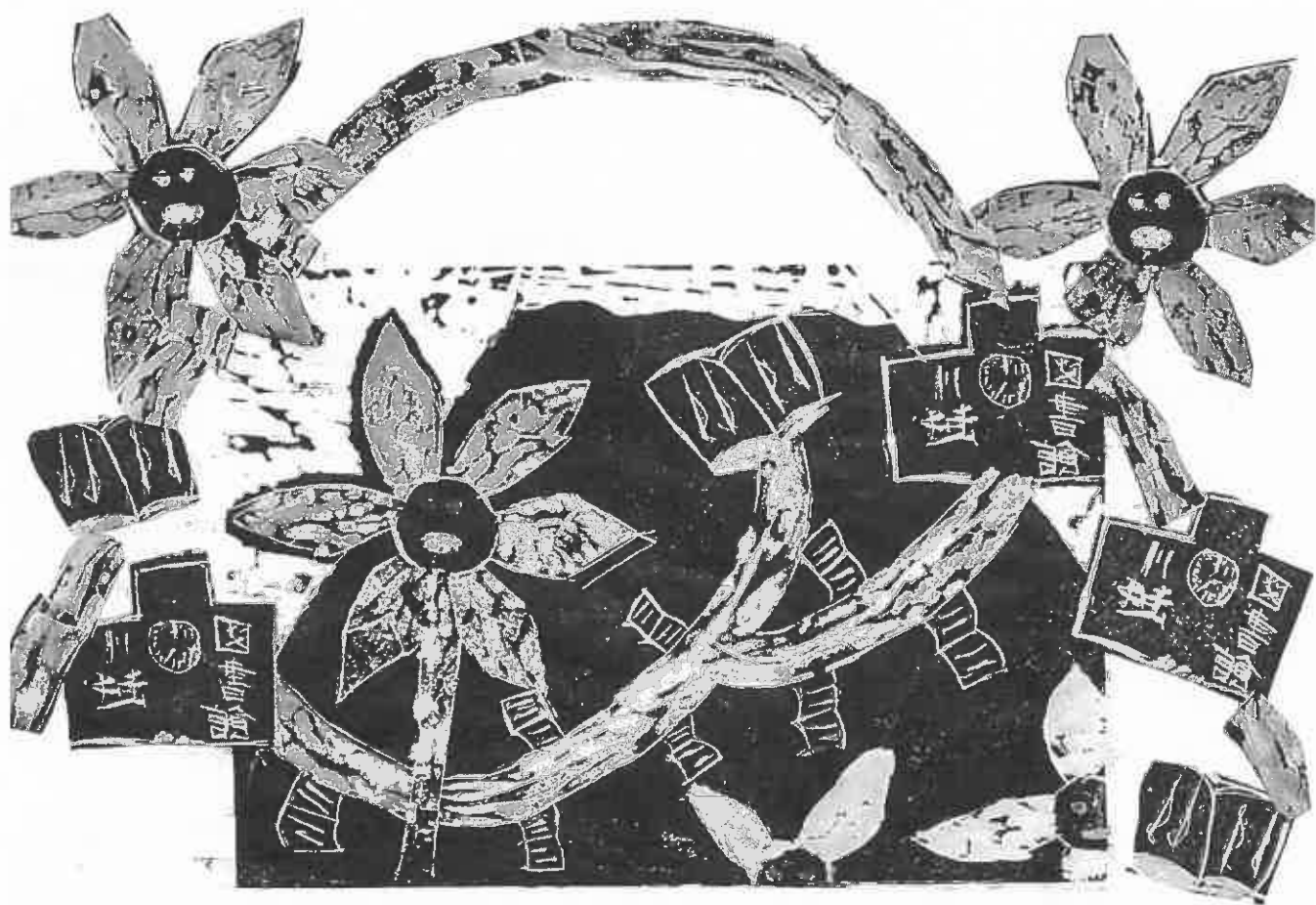


平成29年度
研究集録

川越市教育委員会委嘱学校研究
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会

挨拶

川越市教育委員会教育長

新保 正俊

平成29年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究の19校、小中連携教育研究指定校の2校、指定学校研究の6校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

少子高齢化、情報化、グローバル化が進展する中で、子どもたちに対して知の量と質を確保しつつ、社会の中で自立し活躍できる力、異なる価値観を理解し尊重し合いながら共存していく力などを育てていくことが求められています。

川越市と川越市教育委員会では、第二次教育振興基本計画の基本理念を「生きる力と学びを育む川越市の教育」として、次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成のため、様々な取組を推進しております。また、各学校においては、確かな学力や自立する力の育成、豊かな心と健やかな体の育成を推進し、特色ある学校づくりに取り組んでいただいているところです。

こうした中、研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、教員の資質向上や指導方法の工夫、学習環境の整備等、教育活動をより深化・充実させる実践を重ねてこられました。

それぞれの学校の研究成果は、学習活動を見通し、振り返り、課題を解決していこうとする児童生徒の姿、他者と協働すること等によって、多様な見方・考え方を学ぶ児童生徒の姿、自分自身の次の課題を見つける児童生徒の姿など、子どもたちの学びを深める姿となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の10校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、他校に多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして、本集録にまとめられた研究内容や成果を、積極的に活用していただきたいと思います。そして、子ども達に、人と協調しながら自らの意志で道を切り開いていく力を育成するため、各学校の教育活動を一層推進していただくことを期待しています。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

研究主題

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」
～思考力・判断力・表現力を伸ばす算数科のスタンダードを求めて～
川越市立川越第一小学校

研究のポイント

- ペア・グループ学習に「主体的・対話的で深い学び」の学習観を取り入れ、児童の思考力・判断力・表現力を伸ばす。
- 学校研究を川越市内の小学校にオープン化し、数多くの授業実践を他校の研究者と協議し、改善することで算数科のスタンダードを確立していく。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

日々の授業の中で、自らの経験、体感、既習事項を生かして、新たな考えを作り出す力、また、他者の様々な考えを学び合ったり、考えを作り出すための材料を支援助言してもらったりすることで、多様な見方やよりよい考え方、発想を生み出す力を育みたいと考えている。そのためには、主体的・協働的に学ぶ学習を積極的に取り入れる必要がある。そのような授業実践を通し、本校だけでなく、他校の教職員の意見も聞きながら研究することで、算数の学習の仕方（スタンダード）をつくり、教師の授業力を高めていきたいと考える。

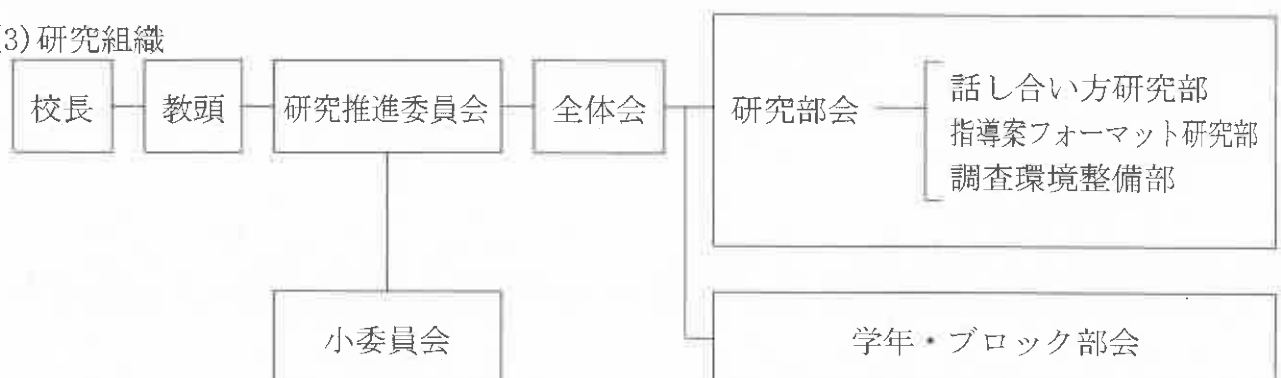
(2) 研究主題設定の理由

本校の学校教育目標である「四つのだいじ」教育の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」、副題を「思考力・判断力・表現力を伸ばす算数科のスタンダードを求めて」とした。

平成29年度埼玉県学力学習状況調査結果を見ると本校の平均正答率は県平均よりも高い。しかし、問題形式別に見ると、記述式問題は県平均を下回っており、無回答率も決して低くはない。これは、質問紙調査の「自分の考えを発表すること」に関する設問の結果にも反映しており、「できない」と回答する割合が高かった。また、このことは普段の授業の様子からもうかがえる。本校教職員に授業中の児童の様子をアンケート調査したところ、「発表する児童が固定化している」「できているのに、自信をもてず発表できない」「自力解決できる児童の差が大きい」「わからないとあきらめる児童が少なくない」「多様な考えに広がらない」等の課題が挙げられた。

そこで、他者との学び合いを通して、児童が自らの考えを錬磨し、その上で主体的に発信できるような指導方法を標準化していくことを志し、本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) めざす児童像

- ① 自分の考えをもつ子
- ② 自分の考えを発信できる子
- ③ 自分の考えを深められる子

(2) 研究の手立て

「めざす児童像」の具現化に向け、学校研究をオープン化して、他校の教職員から研究員を募り、共に研究協議することで指導方法を工夫・改善し、更には、標準化していくことを目指した。研究協議する上での視点は、以下の2点である。

- ① 指導案の中にある「めざす児童像にせまる手立て」についてどうだったか。
- ② 指導方法の標準化に向けて効果的であること、課題となることは何か。

3 実践事例

(1) ペア・グループ学習の系統性

学年が上がるにつれ達成率が低くなっていく実態から、発達段階に合わせて適切に指導できるよう指導のポイント系統表を作り、6年間を見通して指導していくこととした。

	低学年	中学年	高学年
グループサイズ	2～3人	3～4人	3～4人
めあて	自分の意見を伝え、相手の意見を聞くことができる。 ※同じか違うか	自分の意見を伝え、相手の意見と比較することができる。	自分の意見を伝え、相手の意見を聞き、意見を収束することができる。
話し合いの方法	ペア学習 伝え合い	ペア・グループ学習 ※ラウンド ミラーリング 派遣	グループ学習 ※ラウンド ミラーリング 派遣
一人ひとりのめあて	自分の考えを持てるようにする。 方策： ①小集団指導 ②ヒントカード	自分の考えを持てるようにする。 役割をこなせるようにする。(司会、記録、発表など)	自分の考えを持てるようにする。 役割をこなせるようにする。(司会、記録、発表など)
話し合いのスキル 社会的スキル	・相手を見て伝える ・話し合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞く ・隣に聞こえる声で話す ・わからないことをそのままにしない(聞き直す)	・相手を見て伝える ・話し合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞く ・班の中に聞こえるぐらいの声で話す ・わからないことをそのままにしない(聞き直す) ・画像や記録、ノート等を活用して伝える ・考えや意見について、質問したり付け加えたりしながら「つなぐ」ことができる	・相手を見て伝える ・話し合いの始めと終わりのあいさつ ・丁寧な言葉遣い ・うなずきながら聞き、大事な所をメモをする ・班の中に聞こえるぐらいの声で話す ・わからないことをそのままにしない(聞き直す) ・画像や記録、ノート等を活用して伝える ・ホワイトボードを使って班の考えを整理できる ・考えや意見について、質問したり付け加えたりしながら「つなぐ」ことができる。また、よりよい意見を作り出すことができる。

(2) 標準化

① 授業構成 (基本的な流れ)

- ア 問題場面をつかむ。
- イ 課題を考える。
- ウ 自力解決をする。
- エ ペア・グループで学び合う。
- オ 考えを発表し、話し合う。
- カ 一般化する。
- キ まとめをする。
- ク 適用問題を解く。
- ケ 振り返る。

② ノートの使い方

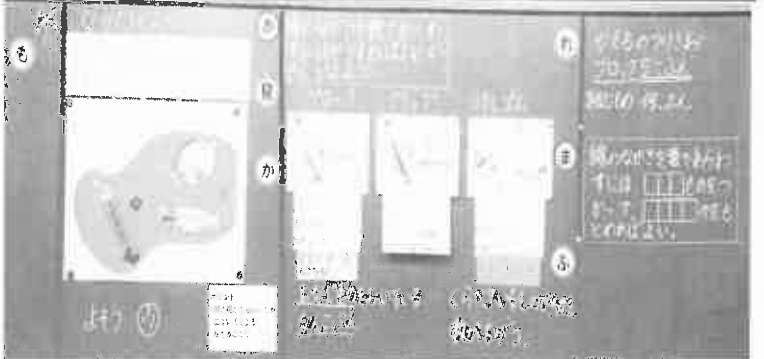
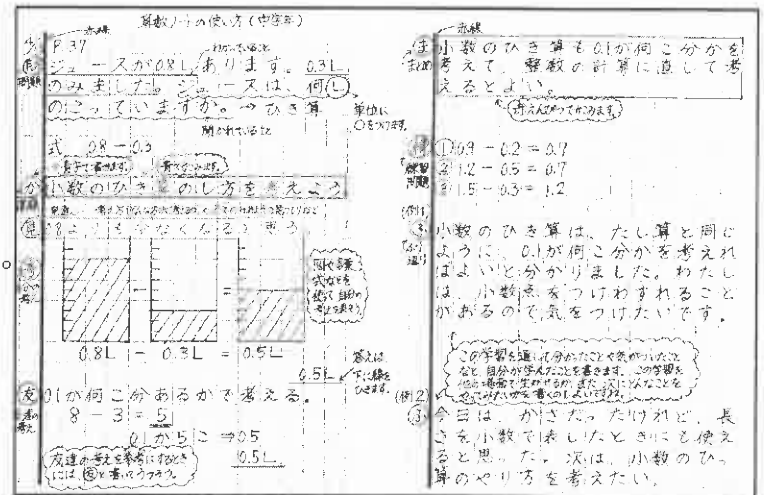
- ア 1年、2年、中学年、高学年別に見本を作成。
- イ 1時間で見開き1ページ。

③ 板書の仕方

- ア 三分割
- イ 学習略語カードを掲示。

④ 算数コーナーの設置と活用

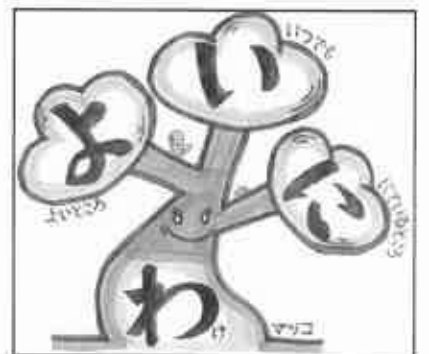
- ア 前時までの児童の考えやつまづきやすい箇所等を掲示。
- イ 既習事項の振り返り等で活用。



(3) 話し合いの視点「よ・い・に・わ」の活用

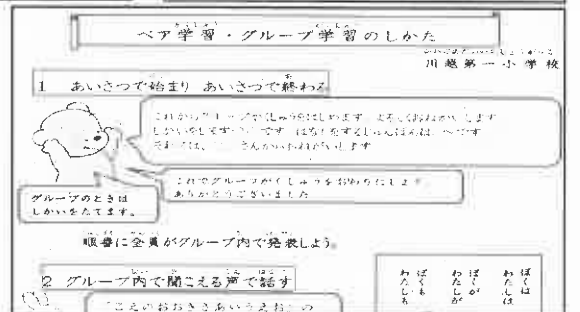
話し合いの視点を明確にすることで話し合いが活性化することを旨とし、算数のペア・グループ学習や全体の話し合いに、話し合いの視点「よいにわ」を意図的に取り入れた。また、話し合いの方法をポイント系統表を基に、児童の実態や発達段階、学習内容に合わせて精選したり、変形したりして、より効果的なものに改善していった。

よいところ	(並列型)
いつでも	(序列型)
にている	(統合型)
わけ	(理由)



(4) 「ペア・グループ学習のしかた」の活用

ペア・グループ学習が円滑に進むよう「ペア・グループ学習のしかた」を全校共通としてまとめた。その際、児童が活用しやすいよう内容項目や文例もできるだけシンプルにした。これを全児童のノートに添付し必要ときに使わせるようにした。



(5) 練り上げ構想図

事前に「練り上げ」から「まとめ」への流れを研究し、授業で活用しやすいよう構想図にして整理した。

第 学年 単元名	
1 学習問題・学習課題	
2 本時で取り上げる児童の考え (取り上げる順序と考え方の題名【作題名】も入れる)	○1() ○2() ○3() ○4()
3 練り上げ構想	【練り上げの型に○をつける。一 並列 統合 序列】
まとめ	1. 六理め 2. リード文 3. キーワード・全記述

(6) ペア・グループ学習の検証と改善

算数の研究授業でどの学年もペア・グループ学習を意図的に取り入れ、研究協議等で検証していった。話し合いの方法として、「伝え合い」「ラウンド」「ミラーリング」「雪だるま」等を実践したが、その中から話し合いを精選したり、話し合いの方法を変形したりして、より効果的なものに改善していった。以下が、その実践の一例である。

伝え合い（1年ペア学習）

- ①隣同士で、自分の考えを伝え合う。
- ②「よいにわ」を基に話し合い、その答えを見つける。



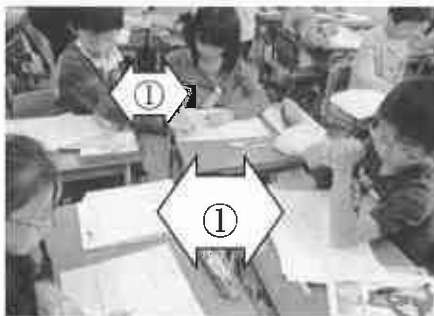
相手に質問形式（4年3人グループ学習）

- ①自分の考え（図）を2人に見せる。「私は、どう考えたでしょう？」
- ②2人は、相手の考え（図）から式を説明する活動を通し、相手の考えを理解する。理解が難しい時は、出題者がヒント等を出す。

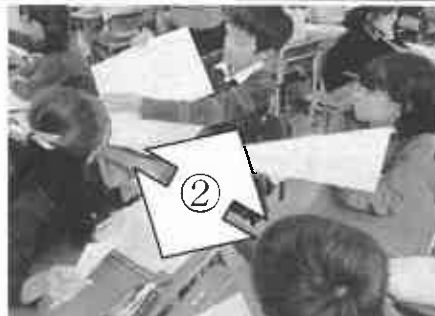


変形雪だるま（5年ペア学習→4人グループ学習）

- ①隣同士で、自分の考えを説明し、聞き手は分かるまで質問し相手の考えを明確に理解する。



- ②4人グループとなり、理解した相手の考えを説明し合う。説明が不十分のときは考えた本人が説明を補足していく。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 学校のスタンダードを確立したことで、児童に身に付けさせたいことを統一して指導できた。
- ② オープン化により、全ての教員が授業を公開し、その後の協議会で他校の研究員の意見を聞く機会が増えた。そのことで、新たな視点を持つことができた。
- ③ 話し合いを中心に研究したことで、児童が自分の意見を伝えたり、深めたりできるようになってきた。
- ④ 授業研究を多く行ったことで、教員の授業づくりのための視点が豊富になり、様々な視点で、授業改善を図ることができた。

(2) 課題

- ① 話し合い活動の質を発達段階に応じて、更に深められるようにする。
- ② 話し合い活動の充実と並行して、基礎学力の定着も確実に図れるようにする。
- ③ 児童一人一人の見方・考え方を丁寧に見取り、授業を更に活性化する。

研究主題

「豊かなかかわり合いを通して、今を見据え、明日（あす）に雄飛する児童の育成」
～3つの『学び』の授業づくり～

学校名 川越市立川越小学校

研究のポイント

- 教科等を横断的に見渡した、授業と教育課程の工夫・改善
- 「学びの実感」「協働的な学び」「主体的な学び」の3つの『学び』の視点から授業を構築し、未来に向けて臨機応変に対応できる能力の育成を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、目指す学校像「豊かなかかわり合いを通して、歴史と伝統を育む潤いあふれる川越小学校」に示されている通り、145年目の歴史と伝統を大切にし、地域との深いかかわりのもと、日々の教育活動を進めている。平成22年度からかかわり合いを基盤とした学習の研究を行っており、平成26・27年度の前研究では根拠を明確にした話合い・汎用的な学力の育成・教科等の結びつきを研究の中核としてきた。

平成28・29年度の本研究では、新たな学習指導要領改訂に向けて、その主旨の一つである「どのように学ぶか」に焦点を当てて、「学びの実感」「協働的な学び」「主体的な学び」という3つの「学び」を定め、展開するとともに、他者との豊かなかかわり合いの中で生きる力を育成していくことをねらいとする。

(2) 研究主題設定理由

本研究では『明日（あす）に雄飛する児童の姿』のもとになる生きる力がさらに必要になってくると考えた。そこで、今まで研究してきたことを礎とし、子どもたちが主体的・協働的に探究し、学びを実感しながら、未来に向けて臨機応変に対応できる能力をつけていくこととした。そして、他者とのかかわりの中で、自分を高め、現在および未来の自己の生き方につながるようにしていく。

また、研究テーマを具現化するためには、豊かな人間関係を育み、実践活動を通してより良い集団生活を育てていく道徳教育と特別活動の充実を図り、授業研究と環境づくりを軸として、研究を進めていくこととする。そして、この礎のもと複数の教科等において計画的・継続的に実践を重ねていくことが重要だと考え、教科等を横断的に見渡し、授業と教育課程の工夫改善をしていく。これらを踏まえて本主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

学びの実感

自己の学びを生活と結び付けて学んだことに意味づけ、価値づけていく。
→学習内容や身近な生活、社会の出来事、他教科との関連を図りながら、学習活動を見据え、よりよい自分へと変容を目指す子どもを具現化できるように見直す。

協働的な学び

対話的な学びや他者とかかわり合う協働的な学びにより学習内容の理解や思考が深められる。

→各教科において、シェアスタイルやプレゼンスタイル等を活用し、自分の考えを表現し、他者と相互にかかわることを通して、さらに自分の考えを発展させていけるように見直す。

主体的な学び

学びの習得、活用が互いに関連し合う学習過程の充実によって、子どもの主体的に学ぶ姿が具現化される。

→基礎的基本的な知識・技能を習得し、課題解決していくために必要な思考力、判断力、表現力を育み、子どもが主体的に学ぶことを通して、「確かな学力」が形成されているか見直す。



3 実践事例

クリティカルシンキング

他者の考えを認識しつつ自分の考えについて前提条件やその適用範囲などを振り返る。他者の考えと比較、分類、関連付けなどを行うことで、多様な観点からその妥当性や信頼性を吟味し、考えを深めていく。①授業の流れに沿って自分の考えをもつ②グループごとに話し合い、練り上げる③発表④クラス全体で練り上げる

トライアングル

「豊かなかかわり合いを通して、今を見据え、明日に雄飛する児童の育成」のテーマに基づき、生きる力につなぐ教育



課程の工夫改善に向けて3つの学びに重点をおく。「3つの学びの授業づくり」の具現化に向け、3つの要素をもとに本研究で目指す子どもの姿を設定する。

プロジェクト	テーマ	3つの学びの姿	工夫
特別活動	自分からそして自分たちで活動する子ども	○よりよい自分への姿容をめざす姿 ○友達のを考えを生かそうとする姿 ○自分の考えを持ち、自分から取り組む姿	・自他の成長に気付き次への活動へ生かそうとする工夫 ・子どもの思考を可視化する工夫 ・実践までの見直しを持ち、主体的に活動する工夫
道徳	自己の生き方を考える子ども	○自己の生き方へ学びを生かそうとする姿 ○友達のを考えから学ぼうとする姿 ○自分の考えを持ち、道徳的諸価値を理解しようとする姿	・道徳性の育成につながる評価の工夫 ・自己の生き方を多面的・多角的に考えさせる工夫 ・道徳的諸価値にせまる発問、指導過程の工夫
国語科	自分の言葉で表現することで学び合い、さらに思考を深める子ども	○養った力を日常生活に活用しようとする姿 ○論理的な思考で、意見を伝え合う姿 ○根拠を明確にして思考・表現する姿	・課題解決できた喜びを次の学習につなげる工夫 ・自分の意見を明確化できる言語活動の充実 ・子どもが自ら学ぶ意欲を高める工夫
算数科	数学的な見方や考え方ができる子ども	○算数の学びを活用していく姿 ○より良い解決法を考え実行していく姿 ○既存の知識を生かし自力で解決していく姿	・学びを還元する工夫 ・数理的な処理のよさに迫る工夫 ・多様な考え方を引き出す工夫
理科	科学的な見方や考え方ができる子ども	○理科のよさや有用性を見つけ出す姿 ○自信をもって自分の考えを表現できる姿 ○観察・実験を通して結論を導いていく姿	・自分の考えを顕在化させる工夫や多面的な見方で仮説を検証する工夫 ・考察を共有化させる言語活動の充実 ・多面的な観察や仮説を検証する工夫
音楽科	思いや意図をもって表現する子ども	○思いや意図をもって活動できる姿 ○音楽のおもしろさや楽しさを表現できる姿 ○音楽のおもしろさや楽しさを感じられる姿	・自分らしく高め合える活動の工夫 ・音楽表現における言語活動の充実 ・音楽を感じし活動の見通しがもてる工夫
体育科	技能・人間関係力・体力を高める子ども	○運動の楽しさを味わい運動に進んで取り組む姿 ○動きの感じを言葉や動作で他者に伝える姿 ○運動の技能を発揮する姿	・日常生活で主体的に運動に取り組む工夫 ・教え合い・学び合いの工夫 ・技能を確実に身につける工夫
保健	自他の健康保持のために協力できる子ども	○生活行動をよりよく改善する姿 ○より良い解決法を考え実行していく姿 ○自己の成長を肯定的にとらえる姿	・学びを生活場面と関連づける工夫 ・より良い解決法を考え実行していく姿 ・客観的に健康課題をとらえる工夫
特別支援	友だちの意見を聞いて、自分の考えを深め実践する子ども	○実践したことを振り返り、みんなでできた喜びや次への活動を期待している姿 ○友だちの意見を聞いて、よりよいものを決めようとする姿 ○自分で決めて、みんなで取り組む姿	・実践と振り返りの充実 ・友だちの話を聞き合い、意見をまとめていく言語活動の充実 ・自分の意見を持ち、発表できる工夫
ことばきこえ	肯定的な自己意識をもつ	○自己肯定感が高まり、意欲的に生活できる姿 ○自分にとって楽な話し方で、考えを表現できる姿 ○吃音にとらわれず楽しく表現できる姿	・ことばの教室と保護者・在籍校との連携 ・グループ学習を通しての多様な経験 ・環境調整や活動内容の工夫

授業改善のための11の視点

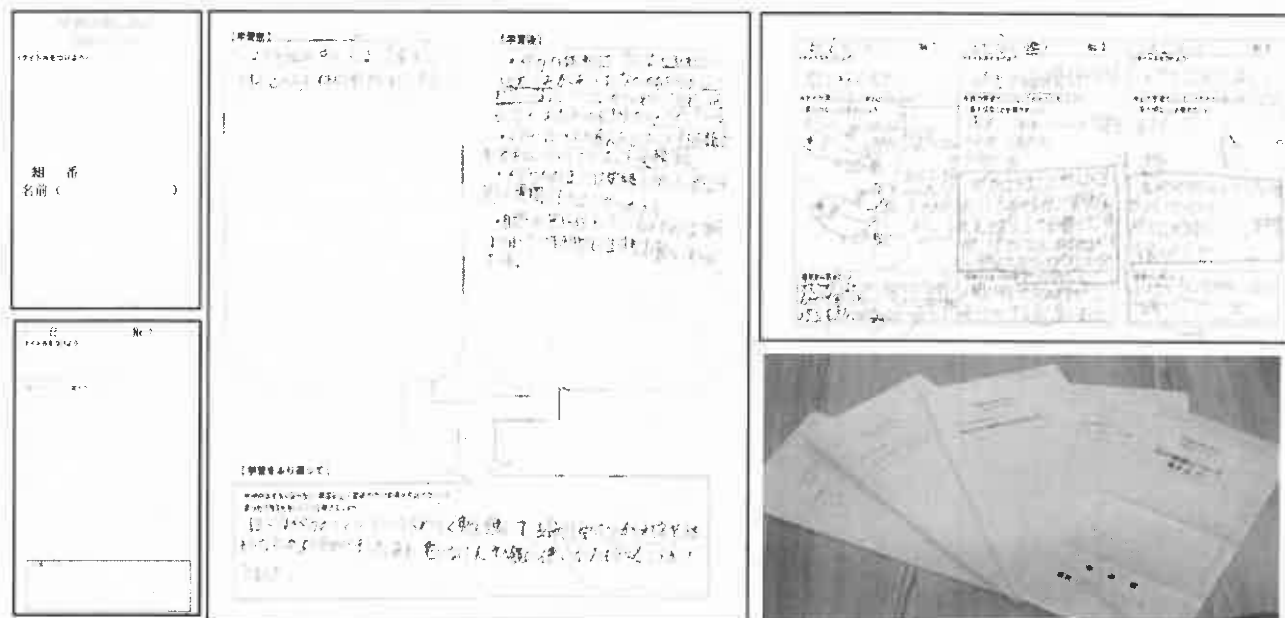
『11の視点』をすべての教科等に位置づけていく。単元を通して評価していくようにし、計画的に視点を入れていく。そして、3つの学びの具現化につなげる。

OPP(One Page Portfolio)シート

学びの実感の評価として、一枚ポートフォリオ評価法を活用し、OPPシートを使う。A3用紙1枚の中に単元すべての学習履歴、自己評価、感想を表す。授業の最初と最後だけの評価のみならず、単元途中でも評価ができ、授業改善をすることもできる。指導と評価の一体化を目指し、理科・音楽・体育・保健・道徳・学級活動・ことばきこえの教科等で活用している。本質的な問いにせまることができ、「今日学んだことで1番大事なことはなんですか。」という自由記述もあり、自分の学びを書き表すことができる。

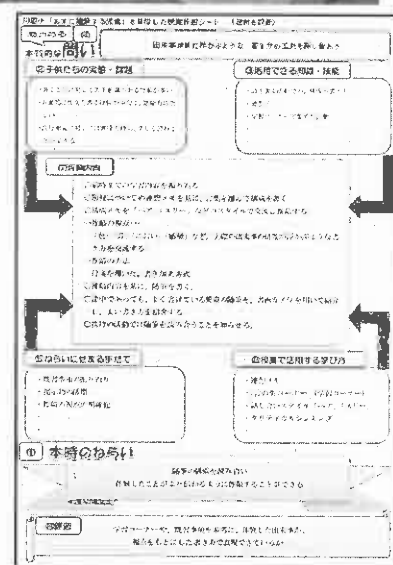
川越小「3つの学び」の授業づくり 11の視点

- 視点1 学習内容・学習活動を吟味する。
- 視点2 導入を工夫する。
- 視点3 発問や言葉かけを練る。
- 視点4 問題意識を高める学習内容、学習課題を設定する。
- 視点5 学びを可視化・外化する。
- 視点6 思考力・判断力・表現力を育むために言語活動を充実させる。
- 視点7 個の学びを充実させる。
- 視点8 学び合う活動や学習形態を工夫する。
- 視点9 学びを身近な生活やこれまでの生活経験と関連させる。
- 視点10 学習の振り返りを充実させる。
- 視点11 学習内容の成果を、これからの生活に活用したり、活かしたりする。



逆向き設計

単元を見通した「本質的な問い」をもち、これを解決するために授業づくりをする。育成すべき資質・能力を整理し、「何を学ぶか」必要事項の整理をする。そして「どのように学ぶか」具体的な学びを提示する。評価を念頭に置いた設計なので、重要なスキルや知識を一つ一つ確認しながら、授業づくりをすることができる。また、一枚のプリントに表しているの、研究授業をする前にその内容についてすべての職員に周知することが容易である。



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①達成感を味わうことができた児童が、身に付けた知識・技能を活用するような場を意図的に設定したことにより、学習と生活が関連付くことを児童が認識し、より学びの実感へとつながっていた。
- ②自分や友達の考え・様子を認識したり比較したり、練り上げたりする活動をどの教科・領域においても重視し、知識・技能の習得や活用と絡めて学習過程の中で確かに位置付けて取り組んだことにより、協働的な学びが推進され、他者とのかかわりの中で自分を高めようとする姿が多々見られた。
- ③学習内容を明確にし、自己と他者、自己と教材とのかかわりの中で状況や文脈に応じて、基礎的基本的な知識・技能を確実に習得できるような工夫を図ったことにより、意味ある学びが展開されていき、児童は主体的に課題に取り組んでいた。

(2) 課題

横断的な研究が進められた反面、教科・領域ごとに掘り下げきれなかった。また、これからの時代を考えると、キー・コンピテンシーをベースとした研究が必要である。すなわち教科・領域の枠を越えた汎用的な能力の育成という視点のもと、各教科・領域で何ができるかという新たな方向性の研究であり、今回の横断的な研究を契機に取り組んでいきたい。

研究のポイント

研究の仮説として

- ①「単元を貫く言語活動をより推進していくことで、児童は主体的に活動するであろう。」とし、前年度までおこなってきた単元を貫く言語活動をさらに追究し、主体的な児童を育成しようとした。
- ②「他者との交流や関わりを持つことで、自分の考えを深めることができるであろう。」とし、グループでの話し合い活動が目的かのような形式的な話し合い活動からの脱却を図ろうとした。

1 研究の概要

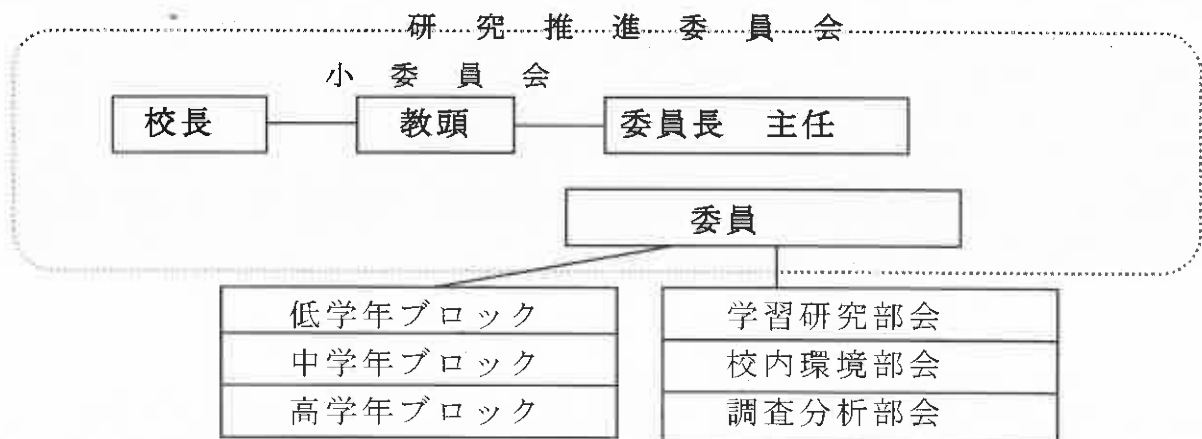
(1) 研究主題

本校は、平成28年度より、川越市教育委員会及び川越市教育研究会の委嘱を、29年度から埼玉県国語教育研究会及び入間地区国語教育研究会の委嘱を受け、国語科を中心とした研究を続けてきた。

本校の学校教育目標は、「やさしく・かしこく・たくましく」で、この学校教育目標を具現化するにあたり、本校の児童の実態について、アンケートや諸調査を基に分析した。すると、学力は身に付いているものの、授業に積極的に参加したり、自分の意見を発表したりすることに課題がある児童がいることや、小グループで話し合ったり、協力して学習を進めたりすることが苦手な児童が多いという実態が明らかになった。

こうした児童の実態やこれまでの学校研究を踏まえ、国語科の授業実践を中核に、児童の主体性や、仲間との協力や協働する力を涵養することを目指し、研究主題を『国語科を通した、主体的・協働的な学び』と設定した。

(2) 研究の組織



2 研究の内容

(1) 研究の主な手立て

「国語科を通した、主体的・協働的な学び」

① 目指す児童像

主題にある「主体的・協働的な学び」ができる児童を育成するために、「主体的」と「協働的」の2つの観点に分けた。さらに、低・中・高学年の発達段階に即したより具体的な「目指す児童像」を明確にした。

ブロック	観点	目指す児童像
低学年	主体的	自分の思いを持って、言語活動に取り組む。
	協働的	考えを比べて認めることができる。
中学年	主体的	目的や相手を意識して、言語活動に取り組む。
	協働的	考えを比べ合い、まとめることができる。
高学年	主体的	目的や相手を自覚して、言語活動に取り組む。
	協働的	考えを広げたり、まとめたりし、深めることができる。

目指す児童像の実現に向けて本校では、「単元を貫く言語活動」と「ホワイトボード・思考ツールを活用したグループ学習」に着目し、これら2つについてそれぞれ研究仮説の柱とした。

② 目指す児童像の実現に向けて

研究仮説1

「単元を貫く言語活動をより推進していくことで、児童は主体的に活動するであろう。」とし、前年度までおこなってきた単元を貫く言語活動をより追求し、主体的な児童を育成しようとした。具体的な視点として、「できたこと」、「わかったこと」の振り返り、「既習事項を活用する学習」を設定した。

研究仮説2

「他者との交流や関わりを持つことで、自分の考えを深めることができるであろう。」とし、グループでの話し合い活動そのものが目的かのような従来のスタイルからの脱却を図ろうとした。その視点として、思考ツールの活用とグループ学習における視点とゴールを明確にするということを設定した。

本研究では、この2つの研究仮説からのアプローチを生かすために、「グループ学習の場」「言語活動の場」を設定した。これを単元の中で繰り返し設定していくことで基礎・基本の定着を図るとともに、児童の意欲や達成感を引き出し、その積み重ねが児童の自己肯定感を高めていくと考えた。

③ 研究三部会の取り組み

目指す児童像へ子どもを変容させるには、それぞれの発達段階に合ったグループ学習の仕方や、その実態の調査・分析、より国語に関心を持たせる環境づくりが必要と考え、低・中・高学年ブロックでの実践組織、『学習研究部会』、『校内環境部会』、『調査分析部会』の3つの研究組織をつくり連携を図りながら、研究・実践を進めた。

学習研究部会

- ・系統を持たせた話型の作成
- ・学習（国語）ファイルの活用
- ・できたこと，わかったことの振り返り作成
- ・系統をもたせた振り返りの作成
- ・学習のまとめシート

校内環境部会

- ・音読朝会の実施
- ・思考ツールの整理，事例作成
- ・国語ノートの校内統一化
- ・思考ツール一覧表の作成

調査分析部会

- ・児童の意識実態調査及び分析である。

(2) 研究授業の実施（平成29年）

月	日	学年	教材名	単元名
6	2 2	1	「どうやってみをまもるのかな」	～「どうやってみをまもるのかなクイズ」で友達に，動物の身の守り方を伝えよう～
		2	「お手紙」	～ものがたりのいいなどおもったところをリーフレットでしようかいしよう～
	2 6	3	「ゆうすげ村の小さな旅館」	～正体はだあれ？おすすめの本の「しかけ」を本のショーウィンドウにして紹介しよう～
	1 9	4	「走れ」	～ガイドトライアングルで，気持ちが大きく変化する登場人物の本を紹介しよう～
	1 5	5	「世界でいちばんやかましい音」	～作品の魅力を「場山変面ボックス」を使って伝えよう～
		6	「風切るつばさ」	～その感動の正体は？関連チャートで言葉の奥に隠された心情を読み取るう～

(3) 研究発表会（平成29年）

月	日	学年	教材名	単元名
1 1	7	1	「いろいろな ふね」	～気に入っている乗り物の「乗り物カード」を作って，友達と紹介し合おう～
		4	「世界一美しいぼくの村」	～「ビブリオトーク」でシリーズ本を紹介しよう～
		6	「海のいのち・いのちシリーズ」	～「いのち」について語り合おう。読書座談会～

3 実践事例

(1) 「できたこと」，「わかったこと」の振り返り

低学年

できたこと・わかったこと
の視点を教師が示した。

中・高学年

自分の言葉で，できたこと・
わかったことを記入

(2) 「既習事項を活用する学習」

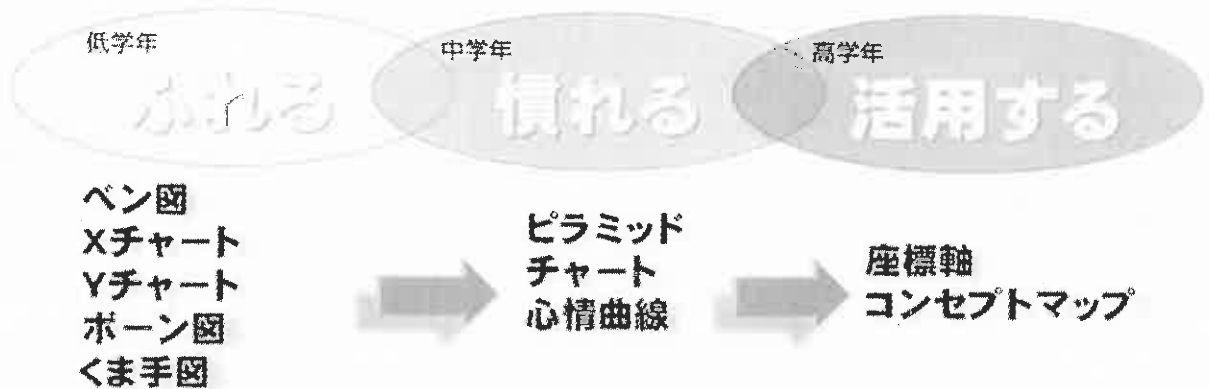
一人一冊学習ファイルを購入

今までの学習を蓄積していき、学習したことを活用できる児童へ



(3) グループ学習

① 思考ツール



掲示物や児童配布用のプリントを作成したり、教師が様々な場面で活用できるよう系統性を持たせた思考ツールの一覧表を作成したりした。

② ホワイトボード

グループ学習では、ホワイトボード上で、思考ツール等を活用し、考えを広げたり、深めたりした。学年の実態に合わせ、付箋なども活用することで思考の整理がしやすくなった。



4 研究の成果と課題

【成果】

- ・四年間の国語科指導法の研究により、児童一人一人が国語科の学習を通して、達成感を得ることができ、話し合い活動や発言などから自信に満ちた児童の様子が見られた。
- ・国語ファイルにワークシートや言語活動の成果物を蓄積することによって、それらを既習事項として、その後の学習に生かし、系統的に学習することができた。
- ・思考ツールの活用にも次第に慣れ、国語科に留まらず、他教科でも活用する姿が見られた。

【課題】

- ・グループ学習や単元を貫く言語活動の手法を、人事異動による職員構成の変化に応じて、どのように維持、発展させていくかが課題である。

「活力あふれる樗っ子の育成」

～体育科の授業と体育的活動をとおして～

川越市立大東東小学校

研究のポイント

- 「運動学習量」を十分に確保した授業展開の工夫・改善
- 運動経験を豊かにし、運動の生活化を図る環境整備
- 家庭と連携した規則正しい生活習慣の確立

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 「運動学習量」を十分に確保した授業展開の実践をとおして、コツコツと体を鍛える樗っ子の育成を図る。
- ② 授業や休み時間に仲間と一緒に学習したり活動したりすることで運動好きにさせ、いろいろな運動に進んで取り組む樗っ子の育成を図る。
- ③ 生活習慣を改善し、健康な心と体づくりに取り組む樗っ子の育成を図る。

(2) 研究主題設定理由

本校では、新体力テスト結果の数値が、県や市の平均値を下回り、ここ数年来の課題として挙げられていた。また、休み時間等に外遊びする児童としない児童の二極化傾向の現状や、ぎこちない体の動かし方、思わぬ怪我が多いこと等から、平成28年度より体力の向上に目を向け、研究に取り組むこととした。

単に、体力の向上だけを目指すのではなく、「体育授業の充実を図ることができれば、児童は運動が好きになり、その結果、体力や活力が向上し学力の向上や生活習慣の改善にも良い影響を与えられるのではないか。」という大胆なテーマを掲げ、体育科の授業と体育的活動の充実をとおしてこれらの課題を解決すべく、本研究主題を設定し2年間の研究に取り組んできた。

(3) 研究組織



2 研究内容



3 実践事例

実技研修



【体育授業の充実部】

○運動量を増やすための授業改善○

- (1) 実技研修の実施（指導に苦手意識のある運動領域）
- (2) 授業の行い方の統一（見通しを持った授業展開）
「集団走」や「けやき体操」を取り入れ、心拍数を上げる。
- (3) 学習過程を掲示し、児童に単元の見通しを持たせる。

○運動量の確保、運動の楽しさを味わえたか見取る評価の工夫○

- (1) 運動量の数値化。
心拍計の活用 主観的運動強度表の活用 学習カード形式の統一 授業場面観察法の活用



心拍の計測

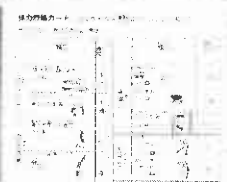


学習過程

【多様な運動経験部】

○「整える」「位置付ける」「取り組ませる」の過程を通して運動の生活化へ○

- (1) 体育の本コーナーの設置
- (2) 新体力テストについての掲示
- (3) PTA 活動による遊具のペンキ塗り
- (4) ケンケンパーロードの設置
- (5) 握力コーナーの設置
- (6) けやきマラソンカードの作成
- (7) 体力貯筋を日々の「けやきチャレンジカード」の項目に追加
- (8) 長なわチャレンジの実施

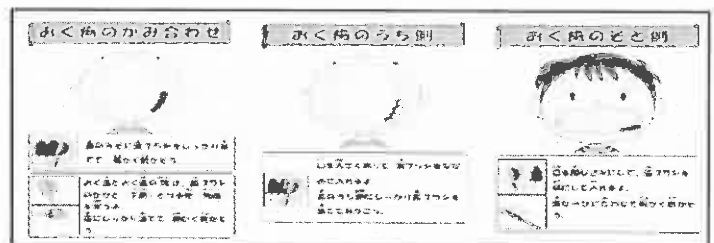
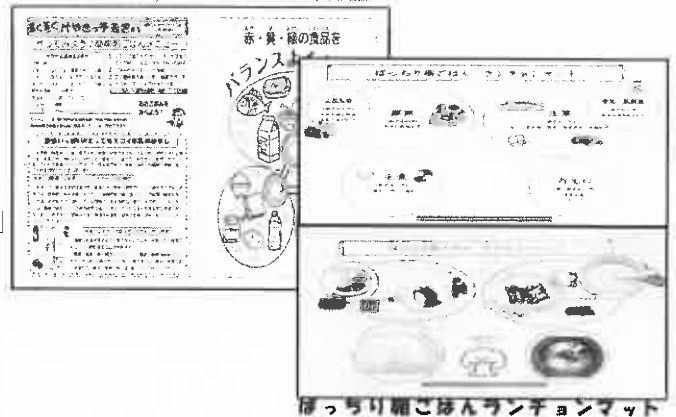


すくすくけやきっ子通信

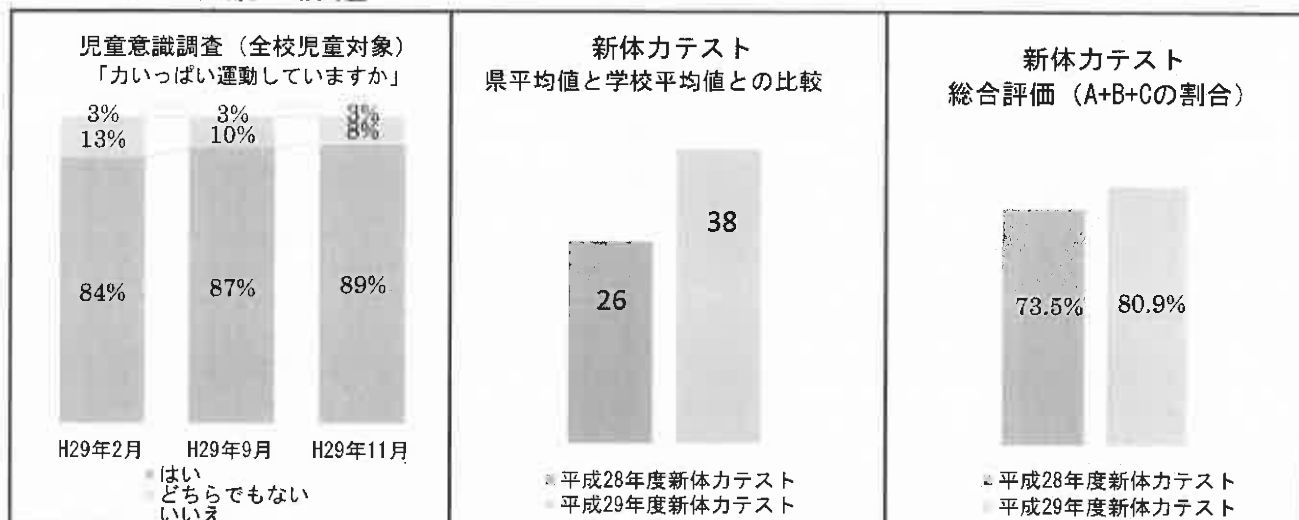
【健康な心とからだづくり部】

○家庭との連携を図る○

- (1) すくすくけやきっ子通信の発行
- (2) すくすくけやきっ子カードの実施
- (3) 「ばっちり朝ご飯ランチョンマット」の配布（夏季休業中）
- (4) 歯垢の染め出し実施（夏季休業中）
- (5) 歯みがきがんばろう週間の設定
- (6) 「歯みがきの仕方」掲示資料の配布
- (7) 生活習慣アンケートの実施



4 研究の成果と課題



【全体を通して】

- 授業の行い方の統一、学習カードの統一をしたことで、教師間の共通理解を図ることができ、運動学習量を確保した授業を展開することができた。
- 運動学習量を確保した授業を教師一人一人が意識して取り組んだことで、児童の体力が向上した。
- 遊びや運動の行い方を紹介したことで、進んで休み時間に体を動かす児童がふえた。
- けやきマラソンカードでは、カードの色を変えていくことで、視覚で個々の取組状況が分かり、他の児童の刺激にもなった。
- ▲動きや運動の行い方を紹介した当初は、意欲的に取り組む姿が見られたが、時間が経つにつれ、児童の意欲が低下してくるため、新しい動きや運動の行い方を定期的に紹介していく必要がある。
- ▲家庭との継続した連携と協力を得にくい家庭への働きかけについてさらに検討していく必要がある。

【今後の方向性】

- 運動学習量確保のための授業改善を引き続き行っていく。（様々な運動領域での研究）
- 心拍数を意識しながら、授業に取り組んでいく。（授業観察カードの中での他の形での活用）
- 保健学習のさらなる充実をめざし、授業改善に取り組んでいく。（ゲストティーチャーや関係機関との連携）
- 運動の生活化をさらに進めていくために、今年度までの取組の充実を図ったり、新たな遊びなどの紹介をしたりしていく。（休み時間の過ごさせ方の工夫）
- 家庭とのさらなる連携を図り、規則正しい生活習慣を継続していくために、情報発信を行っていく。（すくすくけやきっ子通信等の充実）

研究主題

「運動の楽しさを味わい、進んで体を動かす南っ子の育成」 ～「わかる」「できる」体づくり運動の授業づくりと、学びを生かす運動環境づくりを目指して～

川越市立霞ヶ関南小学校

研究のポイント

- 体づくり運動の指導方法を明らかにし、運動に親しむ資質や能力を高める。
- 運動の生活化を図る為の環境を整備し、運動に親しむ資質や能力を高める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

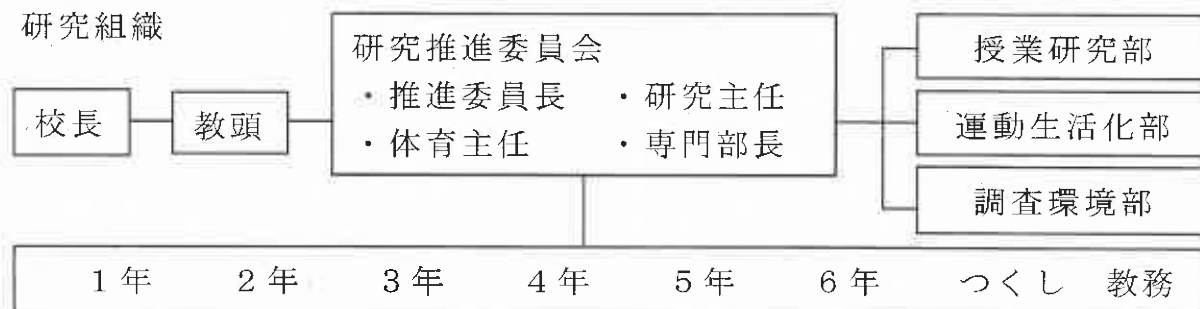
- ・体づくり運動の指導方法の研究
- ・運動の生活化を図るための環境整備

(2) 研究主題設定理由

やる気「知」、思いやり「徳」、げん気「体」を学校教育目標に掲げる本校の教育活動において、「体」力の育成は「知」「徳」を支える生活力の源として、特に素地育成を重要視してきた。しかしながら、子どもたちを取り巻く生活環境は今もなお著しく変化し、本校でも日常的な身体活動の減少傾向や、運動をする子としない子の二極化による影響が懸念されるようになってきた。

そこで、昨年度より校内研究の内容を体育科に選定し、限られた学校生活の中で今まで以上に多様な運動経験を積ませ、運動の楽しさを味わわせ、自ら運動に励む児童を育成することを目的として、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究仮説と手立て

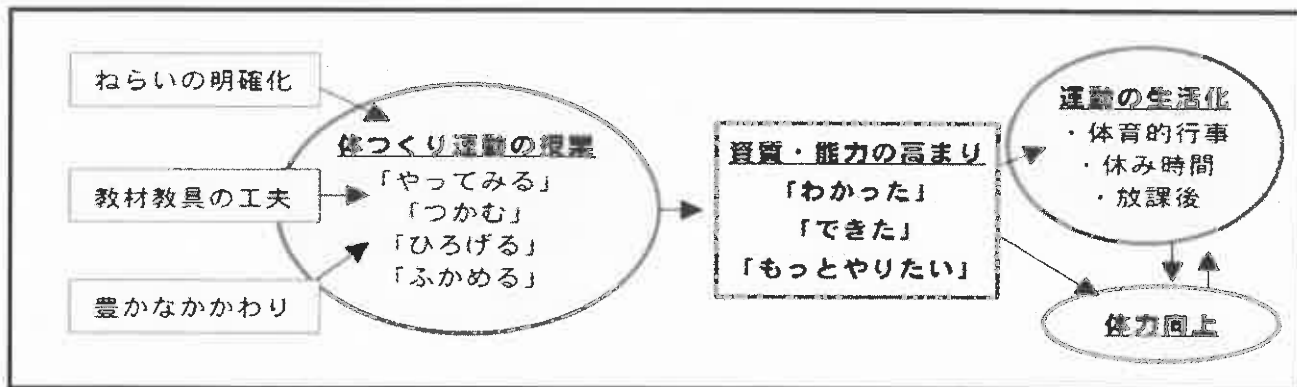
【仮説1】 友達と豊かにかかわりながら多様な動きを身に付ける体づくり運動の指導方法を工夫すれば、子どもたちの運動に親しむ資質や能力を高めることができるであろう。

- 【手立て】**
- ねらいや動きの意図を明確にした指導計画（系統表、ウルトラハンドブック）
 - 運動意欲や技能を高める教材教具
 - 体づくりコーナーの整備・充実
 - 豊かな人間関係を育む学習形態の工夫

【仮説2】 運動の生活化を図るための環境を整備し三間（時間・空間・仲間）の充実を図れば、子どもたちの運動に親しむ資質や能力を高めることができるであろう。

- 【手立て】**
- スポーツタイム・体育的行事の充実
 - 休み時間・放課後運動の推奨・充実（校庭アスレチック、学級レクタイム）
 - 家庭における運動習慣づくりの啓発
 - 健康な体を育む口コモ体操の活用

(2) 研究内容構想図



3 実践事例

(1) 授業研究部

3つの視点（ねらいの明確化、教材教具の工夫、豊かなかかわり）を定めて、「わかる」「できる」授業づくりに迫った。年間を通じて、一人一授業を実施し、計画的に検証を行い、手立ての修正や充実を図った。

①動きの質を高める体づくり運動「系統表」

1 霞ヶ関南小版「動きの系統表」		図…個人 □…ペア 団…グループ		
多様な動きをつくる運動遊び		多様な動きをつくる運動		
	1年生	2年生	3年生	4年生
（C1）運動の楽しさ	回る 図 1人1足踏 団 1人1足踏してじゃんけん		回る 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	
（C2）運動の楽しさ	寝転ぶ・起きる 図 1人1足踏 団 1人1足踏してじゃんけん		寝転ぶ・起きる 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	
（C3）運動の楽しさ		跳ぶ・立つ 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん		跳ぶ・立つ 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
（C4）運動の楽しさ		バランスを保つ 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん		バランスを保つ 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
（C5）運動の楽しさ	這う・歩く・走る 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん		這う・歩く・走る 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	
（C6）運動の楽しさ		跳ぶ・はねる 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん		跳ぶ・はねる 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
（C7）運動の楽しさ	つかむ・持つ・握る・回す (ボール、輪) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	握る・持つ (ボール、輪) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	つかむ・持つ・握る・回す (ボール、輪) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	握る・持つ (ボール、輪) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
（C8）運動の楽しさ	くぐる (筒橋) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	跳ぶ (短橋) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	跳ぶ (短橋・長橋) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	跳ぶ (短橋・長橋) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
（C9）運動の楽しさ	転がす・運ぶ 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	乗る (缶ぽっくり) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	転がす・くぐる・運ぶ 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	乗る (缶ぽっくり) 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
（C10）運動の楽しさ	人を押す・引く・力比べをする 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	人を譲ぶ・支える 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	人を押す・引く・力比べをする 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん	人を譲ぶ・支える 図 1人1足踏、背中を踏 団 1人1足踏してじゃんけん
			基本的な動きを組み合わせた運動	バランス+移動 用具+移動 など

②探究的に学習を展開「霞南ベーシック」

習得	やってみる	ねらいとする運動の基本の動きを経験する
	つかむ 「いっしょがたい」	ポイントやコツを理解し、基本の動きを身に付ける 写真や言葉で動きを図解し、動きの習得を支援
活用	ひろげる	条件を変えた場で運動を行い、動きの質を高める
探究	ふかめる	動きを交換・共有し、そのよさや楽しさを味わう

「動き」を分類し、上級学年で難易度の高まりや、動きの広がりが出るように計画した。

単元を通じて学習のねらいに迫るとともに、運動の特性を味わい、「わかる」「できる」授業づくりの流れを定めた。

③授業イメージを共有「実践ノート」

1年 用具（ボール）を操作する運動遊び

ころころランドへようこそ

運動のしかた	用具
ボールを転がしながらコーンの間・オセロ板の間を通ったり、コーンを転がらせた状態でボールを転がす。	ボール・コーン オセロ板・踏切板

やってみる

【みだりてどこころ（2人）】

- ・同時にボールを転がしてぶつける。
- ・ボールがぶつからないように転がす。（交差させる）

【ポイントやコツ】

- ・手とボールが離れすぎないようにする。
- ・お互い転がす場所を確認して、声を掛け合って、ぶつからないようにまっすぐ転がす。

ひろげる

【条件の変化】

- 障害物（コーン・オセロ板・踏切板）
- ボールの数を（1つ）

【ころころ名人になろう！】

○人数（1人）

運動のしかた

- ・コーンに当たらないように転がす。
- ・オセロ板に当たらないように転がす。
- ・踏切板の奥のコーンを倒す。

ポイント

- ・腰をまげて体を丸めて転がす。
- ・腰を低くする。

5年 力強い動きを高めるための運動

マッスルスパイダー

運動のしかた	用具
筋木に乗った状態で、数の小さい方から順番にすばやくナンバースीलをタッチしていく運動	筋木・マット ナンバースील

やってみる

往を筋に筋木をはかり、運動を始める。30秒間にタッチできたシールの枚数を記録者が計測する。

つかむ

【ポイントやコツ】

- 足踏（しっかりとつかむ、すばやく移動）
- 目標（次のシールを手裏）

ひろげる

【条件の変化】

- リレー（10枚タテ手して交代）
- 横方向に移動（高しおけるなど）

30秒間でいくつの自由をタッチできるかな？自分の新記録を目指してがんばれ！！

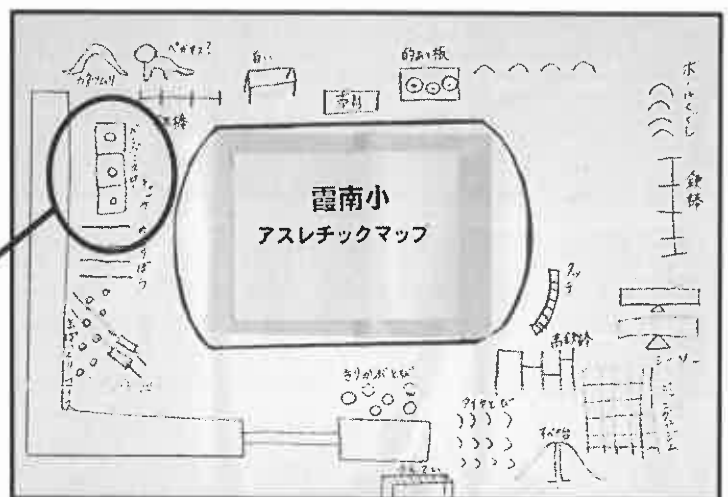
(2) 運動生活化部

体づくり運動の授業で習得した技能や高まった意欲を生活の中で活用できるように、時期や既存の施設・用具を工夫しながら運動環境の整備を行った。

①遊びたくなる場づくり
「校庭アスレチック」

バンバンスローキャッチ

まとの中心にボールを当てることができる	★
まとに当たったボールを自分でキャッチできる。(両手・片手)	★★★
まとに当たったボールを次の人が続けてキャッチすることができる。(両手・片手)	★★★★★



業前運動の時間に縦割り班で遊具遊びを行ったり、遊具ごとに「遊びボード」を設置したりして、校庭で遊ぶきっかけをつくる。



②家庭との連携「体力アップカード」

お家の人から ふたんやけんけんごりをみんなでたのしくでき
よかったですね。いもうと下ろに、やさしくお返してくれてありがとうございます。
また、みんなでやろうね。

お家の人から 普段は一緒に運動をする機会がないので、楽しくでき
ました。体の大きさや運動不足を痛感していました。ぜひ参加し、
大笑いしながらやり終った時間があったと思います。

夏休みや冬休みの課題として、全校で取り組んだ。豊かなかわりや交流を深める中で、運動することの心地よさを味わい、自分の体の状態に気付くことができた。

(3) 調査環境部

①「体づくりコーナー」の整備



整頓の仕方を写真で示し、授業や休み時間の使用後きれいに用具を戻せるようにした。

夏休み体力アップ！家族でチャレンジ12

名前()

家族で楽しく体力づくりをしよう！
○下の絵からチャレンジしたいものをえらんで、家の人といっしょにチャレンジしよう！
でもおうちにチャレンジしよう！

1□ 指の遊びで なげっこを しよう。	2□ タイミングを 合わせてジャンプ しよう。	3□ ロープを引っ張って あつぱらんすを しよう。	4□ タダでボールをキャッチ したり上げたりしよう。
5□ お星を落とさず 運んでみよう。	6□ けんけんまも うをしよう。	7□ ひざを上げ、ひじを くっつけて、お星 に近づけよう。	8□ うしろを 使ってお星を キャッチしよう。
9□ ひたいを 使ってまわって なげっこを しよう。	10□ どちらが早く くわがわを しよう。	11□ タダで あつぱらんす をしよう。	12□ ロープで、かき をキャッチし よう。

感想

お家の人から

4 研究の成果と課題

- ねらいを明確にした指導計画（系統表、ウルトラハンドブック）により、教師間の共通理解を図り、多様な動きを習得できる授業づくりが展開できた。
- 学習過程を定め、「できる」喜びを友達と分かち合う授業を展開することで、児童の運動意欲を高めることができた。
- 動きに応じた教材教具の工夫を行い、それらを「実践ノート」に記録することで、魅力的な教材をいつでも活用できる学習環境を整備することができた。
- 授業で学んだことを生活の中で生かす取組（スポーツタイム、学級レクタイム）を充実させることで、外遊びの活性化につなげることができた。
- 研究の取組が新学習指導要領に即したものであるか検証を行い、新しい内容と照合しながら、本校の計画を適切に加除修正する必要がある。

自分のよさを発揮し、心豊かに

たくましく生きる子どもを育成する道徳教育

～自己の生き方についての考えを深める指導法の工夫と改善～

川越市立霞ヶ関北小学校

【研究のポイント】

- 問題解決的な学習を取り入れることにより、児童が自分の問題として捉え、実践への意欲を高めることができるようにする。
- 「話し合い」の工夫と改善を図り、「考え、議論する道徳」への転換を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

- ① 道徳科における問題解決的な学習の工夫と改善を通して、自己の生き方についての考えを深め、自分のよさを発揮し、心豊かにたくましく生きる子どもを育成する。
- ② 自信をもって道徳の授業を実践できる教員の資質向上を図る。

(2) 研究主題設定理由

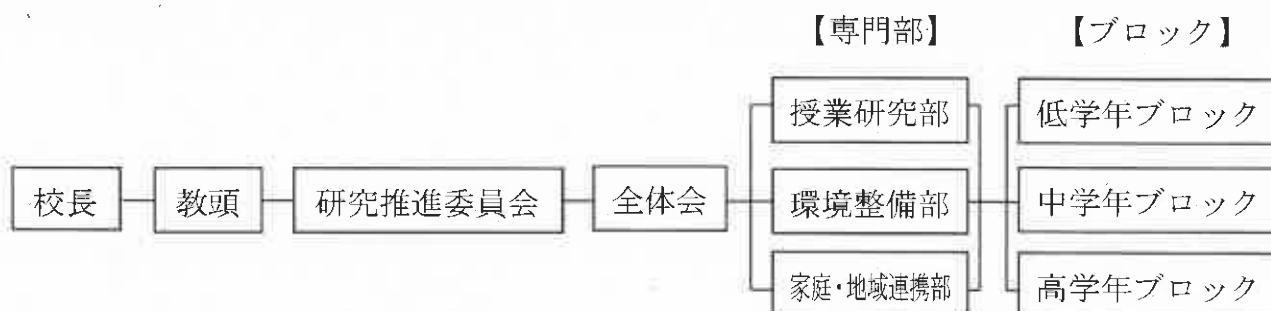
本校では、学校教育目標「かしこく（あふれる知性）・きよく（豊かな感性）・たくましく（生きる意欲）」を掲げ、「自分のよさ（知性・感性）を発揮し、心豊かにたくましく生きる子ども」の育成を目指している。

教育活動全体で行う道徳教育は、学校教育目標の実現へ向け、大きな役割を担うものと考えられる。中でも、児童の心に直接働きかけ心を耕す道徳科は、道徳教育の要であり、教員が道徳科の授業の工夫と改善に努め、指導力を向上させることは、児童の豊かな心の育成に繋がるものと期待できる。

しかしながら、平成27年度2月のアンケートによると、「道徳の授業が好きだ」と回答している児童が38.2%と低いことがわかる。また、道徳の授業の進め方に不安を抱く教員も多い。

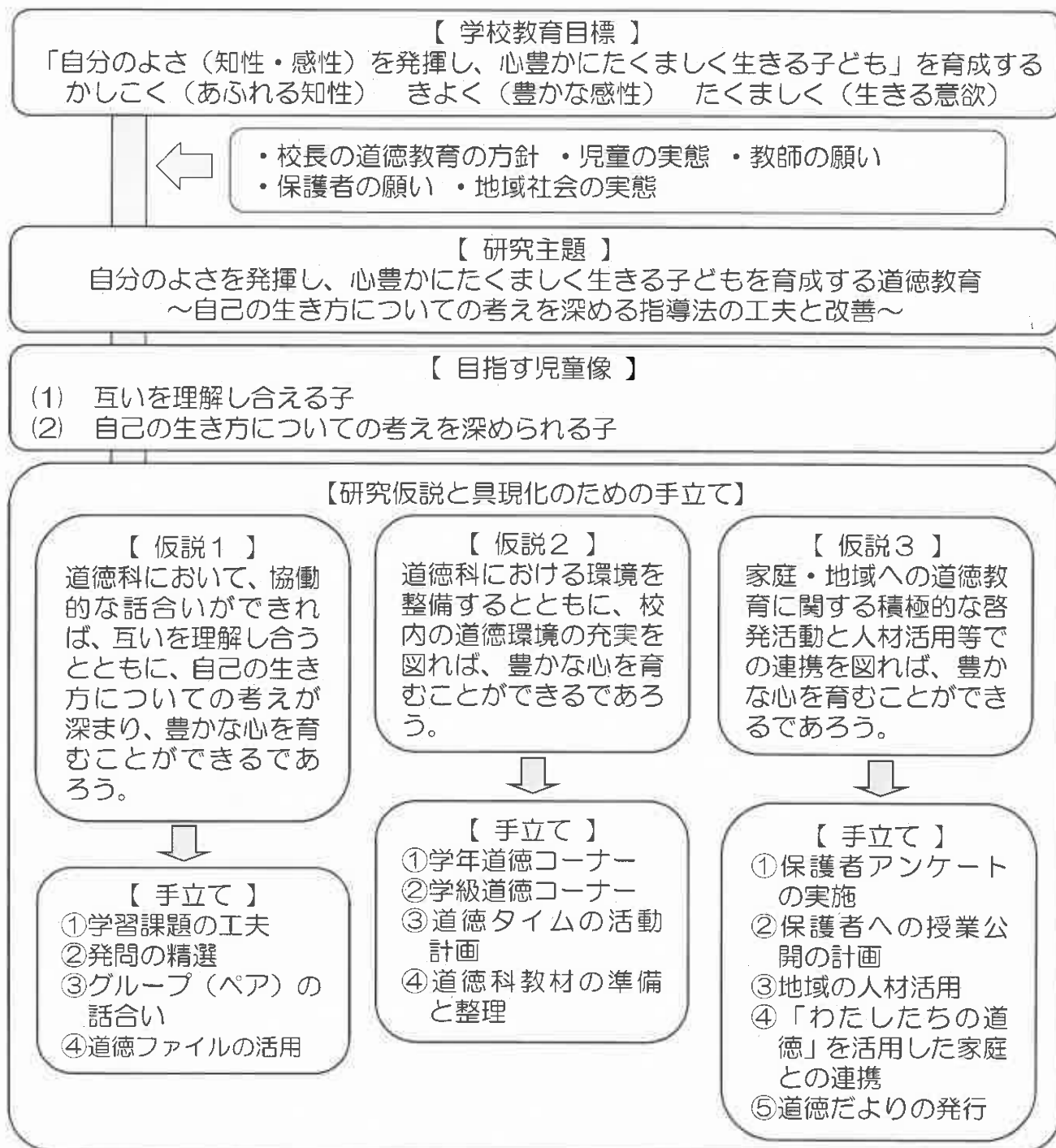
そこで、平成22・23年度の特別活動、平成24・25年度の国語科の学校研究において培ってきた「話し合い」の能力を自己の生き方についての考えを深める手立てとし、主として問題解決的な学習による授業の工夫・改善に努めていくこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想



(2) 専門部の取組

① 授業研究部

研究仮説1に基づき、授業の質の向上を図る。

- ア 研究仮説1の共通理解
- イ 「協働的な話し合い」の本校のスタイルの検討
- ウ 問題解決的な学習展開の指導方法の工夫
- エ 評価についての検討
- オ 授業研究会の計画・実施

② 環境整備部

研究仮説2に基づき、道徳に関する児童の実態を明らかにし、道徳に対する意欲を高める。

ア 道徳コーナー（学級・学年）の設置

イ 児童へのアンケートの実施

ウ 「道徳タイム」の計画・実施

③ 家庭・地域連携部

研究仮説3に基づき、家庭・地域への道徳教育に関する啓発活動と連携を図る。

ア 「わたしたちの道徳」の活用

イ 道徳に対する保護者の意識調査

ウ 地域人材の活用

エ 道徳だよりの発行

オ 「感謝の会」の計画・実施

カ 学校公開における授業公開

3 実践事例

(1) 第1学年（主題名：みんないっしょに）

○学習課題について

より気持ちよく学校生活を送るため、「どうしてだれとでもなかよくしたほうがいいの？」という身近な問題を学習課題とする。

○話合いについて

役割演技をすることで登場人物の多様な心情を共感的に理解させ、ペアや全体で話し合うことで、自分の利益にこだわらずに誰とでも仲良くすることのよさに気付かせる。

(2) 第2学年（主題名：相手の気持ちを考えて）

○学習課題について

教材文を分け、状況を紙芝居で提示することで、内容をしっかりと捉えさせ、課題に沿った話合いが十分にできるようにする。

○話合いについて

ペアでの話合いをすることで互いの考えをしっかりと伝え合い、親切を受ける側の気持ちを考えた言動が大切であることに気付かせる。

(3) 第3学年（主題名：生命あるものを大切に）

○学習課題について

命の大切さが分かっている児童の実態から、敢えてなぜ大切にしなければならないのかを課題とする。

○道徳ノートについて

自己を振り返りながら、どんなに小さくても命は一つしかない大切なものであることやすべての命を大切にしていこうとする記述を発言させることで、ねらいとする価値を印象付ける。

(4) 第4学年（見えないルールを守るために）

○学習課題について

学習課題の答えが、児童の身近な生活にも関わることを意識させ、話し合う必要性や実践への意欲を高める。

○話し合いについて

4人グループで話し合うことで多様な考えにふれながら、自分の考えを深めていけるようにする。

(5) 第5学年（主題名：相手のことを考えて）

○学習課題について

親切にした経験やその時の気持ちを出し合い、児童の生活の中にある課題を設定することで、話し合う必要性と意欲を高める。

○話し合いについて

グループの話し合いでは、主人公の気持ちについて、共感・質問・反論を意識して話し合わせながら多様な考えに気付かせる。

(6) 第6学年（主題名：命いっぱい生きる）

○学習課題について

生命の尊重について話し合いたいことを出し合い、児童の思いから課題を設定することで、話し合う必要性と意欲を高める。

○発問について

発問を一つにすることで、話し合う時間を十分に確保し、能動的な学習を促す。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 道徳科における問題解決的な学習の工夫により、学習課題について自分との関わりで考えられるようになるとともに、自分なりの答えを見つけることで、実践への意欲を高めることができた。
- ② 授業者が発問の場面を十分に吟味し、発問を精選することで、登場人物の気持ちを問うだけの「読み物道徳」から「考え、議論する道徳」への転換を図ることができた。
- ③ 道徳コーナーや廊下掲示で日頃から道徳的価値に触れられるようにすることで、自分の成長や友達によさに気付いたり、自分の行動を振り返ったりすることができた。
- ④ 道徳科の授業公開や保護者等の参加による授業を実施することで、家庭や地域との連携体制が整い始めた。

(2) 課題

- ① 次年度から使用する道徳科の教材と各教育活動との関連を明確にし、指導の時期と方法を工夫しながら、本校の実態により即した年間指導計画へと改善していく必要がある。
- ② 道徳科をはじめとする道徳教育において、児童が自らの成長やよさを実感できるような温かい評価を繰り返し、励ますことで、今後も「自分のよさを発揮し、心豊かにたくましく生きる子ども」を育成していきたい。

研究主題

「追究する力を育てる社会科学習～主体的・協働的に学ぶ学習の充実～」

川越市立川越第一中学校

研究のポイント

身近な地域の文化財や歴史的事象を用いて、生徒が興味・関心をもって課題をとらえ、主体的・協働的に課題を追究する課題解決型の学習を工夫する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

身近な地域の歴史を通して歴史的事象に対する関心をもち、主体的に課題をとらえ、収集した資料から有用な情報を適切に読み取って活用し、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現するとともに、他者と協働して課題解決を図る生徒の育成を目指す。具体的には、

- ① 生徒にとって身近な文化遺産や歴史資料を用い、通史の中の歴史的事象と関連付けることによって、主体的に課題をとらえることのできる生徒の育成に努める。
- ② 教科書や資料集等に掲載されている手元の資料だけでなく、身近な歴史遺産、文書、図表、写真等の多様な資料を適切な方法で収集して選択する力、課題を解決するために必要な読み取る力や加工する力の育成を目指す。
- ③ 歴史を大観し、社会的事象の歴史的な見方・考え方を働かせ、各時代の特色を多面的・多角的にとらえさせることを目指す。
- ④ 他者と適切に意見交換や討論したりして思考を深め、他者から学ぶことで視野を広げたり、よりよい考えを導き出したりすることができる生徒の育成に努める。

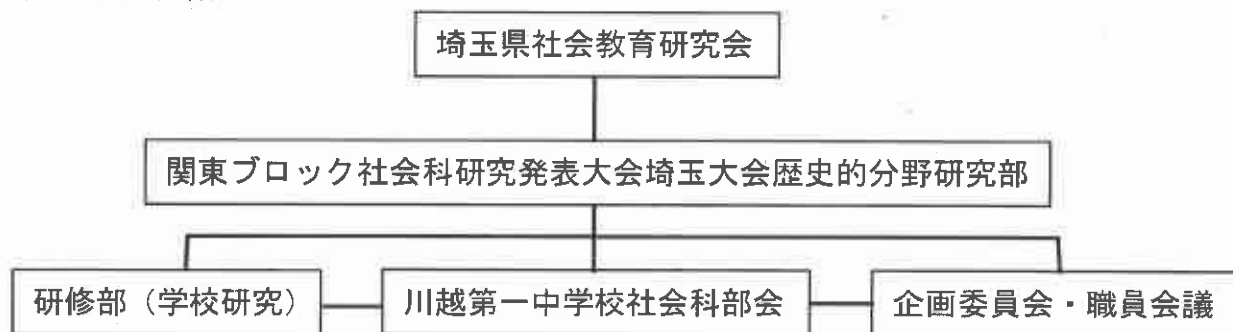
(2) 研究主題設定理由

本校は、平成 26・27 年度に生徒指導の学校研究として「生徒のよさを活かし、伸ばす指導法の研究」に取り組んだ。第 35 回関東ブロック社会科教育研究発表大会埼玉大会（以下、関ブロ本大会）において歴史的分野の授業を公開するに当たり、学校研究の成果を踏まえ、同研究大会の研究主題をもとに、本校の社会科指導の学校研究と進めることとした。

研究に先立って平成 27 年 9 月に実施した社会に関するアンケート結果では、歴史的分野の学習は好きであり、自分の住んでいる地域の伝統や歴史に関心がある生徒は多いが、時代を大観して、その特色を自分の言葉で表現することができるという回答した生徒の割合は約 60%であった。また、生徒対象の学力調査結果からも同様の傾向が見られた。

以上のような生徒の実態を踏まえ、身近な地域の文化財や歴史的事象を用いて、生徒が興味・関心をもって課題をとらえ、主体的・協働的に課題を追究する課題解決型の学習を工夫し、本校生徒の社会科学習上の課題の解決を図ることとした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

関ブロ埼玉大会の研究主題に則って、主体的・協働的な学習を工夫することにより、課題を多面的・多角的に追究する力を育てることをねらいとし、次の3点を研究の柱とした。

- 身近な地域の歴史や文化財等を教材化し、生徒の学習意欲を高め、主体的に学習に取り組む態度を育成する。
- 川越市立博物館の学芸員と授業構成や資料開発、ゲストティーチャーとしてのかかわりなどの面で連携し、博学連携のあり方を工夫する。
- グループ内での話合いや意見交換、発表などの協働的な学習活動を通して、歴史的事象や課題を生徒の多面的・多角的にとらえたりする力を伸ばす。

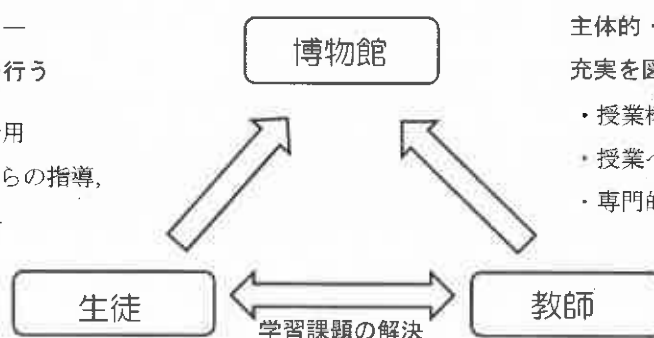
(1) 身近な地域の歴史や文化財等の教材化

単元名	教材化した地域の文化財や資料	活用のねらい
大和政権の統一	三変稲荷神社出土の銅鏡関連資料，市立博物館所蔵の須恵器実物資料，市内の古墳関連資料	生徒の関心を高める。 具体的な資料によって，大和政権の勢力拡大を理解させる。
鎌倉幕府の支配	河越氏の系図 川越市史 河越氏と鎌倉幕府との関係を示す資料	承久の乱における河越氏の動向をもとに，鎌倉幕府の支配の広がりをもとに，具体的に捉えさせる。
明治政府の改革	水村家文書， 川越第一小学校・仙波小学校・中央小学校の沿革，川越市史	学制改革に対する川越の人々の動きを通して，明治政府の改革の特色を捉えさせる。

(2) 市立博物館との連携

ゲストティーチャーとして学習支援を行う

- ・博物館資料の活用
- ・専門的な見地からの指導，助言，情報提供



主体的・協働的な学習の充実を図る

- ・授業構想の理解
- ・授業への具体的な関わりの場面確認
- ・専門的な見地からの指導，情報提供

(3) 協働的な学習活動

本校では、平成26・27年度の学校研究を通して、グループでの話し合い活動や意見交換、発表や表現の場を学習過程に設けることが、生徒の良さを生かし、伸ばすことに効果があることが実証されている。この成果を踏まえ、これらの活動を協働的な学習活動としてさらに工夫・改善すれば、本研究のねらいに迫ることができると思われる。

そこで、①自分で考える②グループで話し合ったり意見交換をしたりして、考えを深める③各グループで発表する④学級全体で意見交換しさらに考えを深める。⑤課題について追究した結果を自分の言葉でまとめる、という学習過程の中で、課題を追究させた。

また、グループごとにホワイトボードを用意し、話し合いの結果を簡潔にまとめさせたり、「発表スタンダード」を設定して、声の大きさ、話すスピードにも留意して丁寧に説明させることなどの定着を図った。

3 実践事例（平成29年11月17日 関ブロ公開授業）

(1) 第1学年

- ① 単元名：「武士はどのように支配を広げていったのか」
- ② 重視した学習過程：「表現・発信」「意見交換・討論」
- ③ ねらい： 承久の乱における地元川越の御家人である河越氏の動向を通して、御恩と奉公の主従関係が土台となった武家政権の特徴をつかませる。
- ④ 具体的方策：○ 市立博物館の学芸員が専門的な立場から河越氏に関する情報提供及び話し合いや発表内容に対し指導や助言を行う。
○ 承久の乱において御家人として河越氏はどのような判断をするのか、異なる立場で考えさせることにより、鎌倉幕府の支配の基盤が御恩と奉公にあったことを具体的に理解させる。



【話し合い活動で助言する学芸員】



【ホワイトボードにまとめた内容を整理】

(2) 第2学年

- ① 単元名：「明治政府はどのように近代国家を形成していったのだろうか」
- ② 重視した学習過程：「情報の収集・加工と読み取り」「考察・構想」「意見交換・討論・判断」
- ③ ねらい： 生徒の出身小学校を具体例として取り上げ、地元川越の人々の動向を伝える地域資料を活用して、明治政府の改革の特色を多面的・多角的に考察する。

- ④ 具体的方策：○ 川越市立博物館・埼玉県立文書館の学芸員，川越市立図書館の司書と連携して，授業を構想し資料を作成した。
- 市立博物館の学芸員が，専門的な立場から学制改革に対する川越の人々の動向に関する情報提供及び話合いや発表内容に対し指導や助言を行う。
- 個人の考えを基にグループで意見交換や発表を行った上で，学級全体での意見交換や質疑応答を行う場面を設け，住民の協力合ってこそその改革という特色をとらえさせる。



【戦前の地図から自分の出身小学校を発見】



【学習のまとめに取り組む生徒に助言】

4 研究の成果と課題

成果の第一は，関プロ当日の公開授業について，参観者から良好な評価を得ることができたことである。また，授業後の生徒対象のアンケートでは，ほぼ全員が身近な地域の資料を活用した授業は興味関心を高め，協働的な学習活動によって新しい見方が生まれ，理解が深まることを実感できたと回答しており，本研究が実践を通して検証できたといえる。

成果の第二は，川越市立博物館の学芸員との連携を拡充し，地域の歴史素材を通史と関連付けて教材化し，資料として授業で活用することにより，生徒の関心を高め，主体的に課題解決に取り組むことができた点である。

成果の第三は，グループでの話合いや意見交換，発表などの協働的な学習活動を通して，生徒が学習課題について多面的・多角的に考察することができた点である。

成果の第四は，本実践を基に，1年生の総合的な学習の時間に地元の文化財を調査してリーフレットを作成する活動を行い，校区の小学6年生に回覧して小学校との連携を図る取組に発展させることができた点である。

平成29年12月に実施した全校生徒対象のアンケートでは，前年同時期に比べ，社会科の学習が「好き」という回答が7ポイント上昇して85%に，また「積極的に取り組んでいる」という回答が5ポイント上昇して86%となった。これらの成果や結果から，本研究によって，社会好きの生徒や，興味関心を持って社会科の学習に取り組む生徒を確実に増やすことができたと考える。

今後の課題としては，

- 協働的な学習活動の指導方法と評価の研究
- 単元を貫く課題の設定と単元構成の工夫
- 実践事例の蓄積と新学習指導要領の趣旨を踏まえた年間指導計画の作成

などが挙げられる。今後も主体的・協働的な学習活動を充実させ，「主体的・対話的で深い学び」を目指し研究を進めたい。

「追究する力を育てる社会科学習」

～主体的・協働的に学ぶ学習の充実～

川越市立富士見中学校

研究のポイント

教科目標である「公民的な資質・能力の基礎を養う」を踏まえ、社会科学習において追究する力を育てるための方策を、主体的・協働的に学ぶ学習の充実に着目して、学習指導の工夫改善に資する。

1 研究の概要

第三十五回関東ブロック中学校社会科教育研究大会埼玉大会（以下 本大会）の公民分野として、公民学習において追究する力を育てるための方策を「主体的・協働的に学ぶ学習の充実」に着目して、授業実践を通して明らかにし、学習指導の工夫改善に資することをねらいとし研究を行った。その際、本研究の具体的な授業イメージを持ってもらえるよう、社会参画をゴールとした授業の構成・実践を単元レベルで構築し、モデルとなる年間指導計画や単元指導計画案を提示した。

2 研究の内容

(1) 育てたい生徒の姿

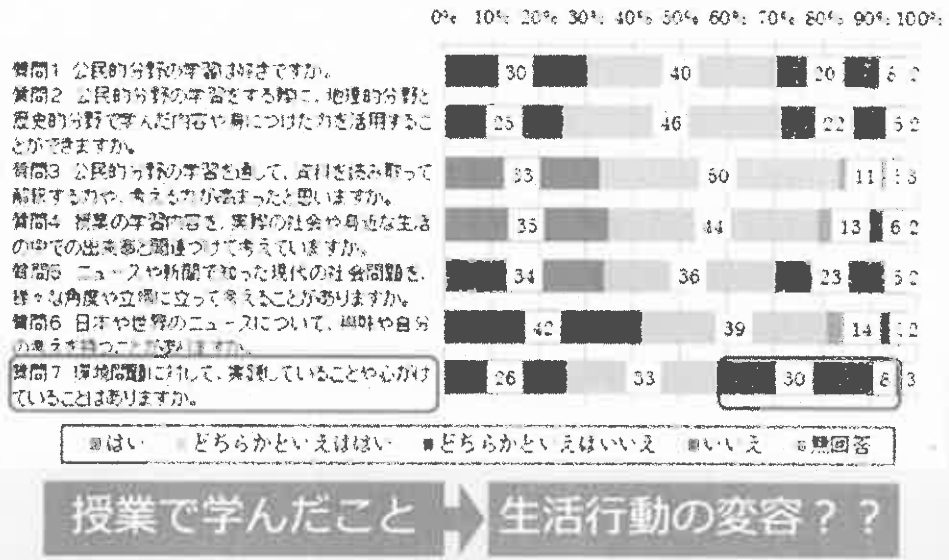
本大会公民分野では、授業を通して育てたい生徒の姿を、資質・能力面に分けて次のように設定した。

資質 現代の社会的事象に対する関心をもち、主体的にその課題を見出し、自分なりの解決策を構想するなど、社会参画に対する意識をもてる生徒。

能力 適切な情報収集と他者との関わりを通して、多面的・多角的な考察を行うことで思考を深め、習得した知識や技能を活用したり、現代社会の見方や考え方を働かせたりして、明確な根拠のもとに公正な判断を行い、自分の考えを適切に表現できる生徒。

公民分野は、小学校での社会科学習、中学校地理的分野・歴史的分野の学習の上に立って成立している。それゆえ、公民分野の研究を通して育てたい生徒の姿は、本大会が目指す育てたい生徒の姿に義務教育終了段階として最も近づいている状況にあると考えられる。

設定の背景～生徒の実態から～(研究紀要p74参照)



(2) 具体的な手立て

育てたい生徒の姿で設定した資質・能力を身に付けさせ、追究する力を育てるための学びの段階として、本大会の総論では6つの学習過程（①課題を見出す ②情報の収集・加工・読み取り ③考察・構想 ④表現・発信 ⑤意見交換・討論 ⑥判断・実践へ）を提示した。各単元の展開の場面では、6つの学びの段階のうち、「情報の収集・加工と読み取り」から「意見交換・討論」までに焦点を当てて授業を行った。生徒が効果的に学習内容をつかめるように、習得の場面と活用の場面を意図的に組み合わせた学習過程に努めた。また、ロールプレイやシミュレーション、ランキング、ウェビングなどの参加型学習の手法を用いた協働的な学習も重視した。各活動では「活動あって学びなし」とならないように、振り返りの時間を意図的に取り入れ、次の新たな問いや課題を見出して、追究することも重視した。そして、単元のまとめの場面では、「意見交換・討論」・「判断・実践へ」に焦点を当てた。公民的分野では、学習内容と時事的な出来事との関連が深い。また、「どのように社会参画するのか」「持続可能な社会づくりの視点からどう考えられるか」といった観点から価値判断を迫られることも多い。そこで、単元やそれまでの既習事項を通して身に付けた知識や技能を活用するとともに、現代社会の見方・考え方を働かせる場面として「意見交換・討論」を行い、自分の考えを深化させ、さらにそれをレポートとしてまとめたり、自分なりの具体案を構想したりするといった方法を取り入れた。その際は、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察することを重視させた。なお、公民的な価値判断や意思決定を行う際は、根拠を明確にすることを徹底させた。

(3) 「主体的・協働的」に学ぶための工夫

まず、生徒が学ぶ意義を見出し「もっと知りたい」と思えるような「切実性」のある教材を教員自身が様々な書籍や官庁の刊行物などから情報を得て、生徒や地域の実態に即した資料を作成した。また、ゲストティーチャーの招聘など、外部人材の活用や、役所や企業といった他機関との連携も積極的に行った。

次に、「参加型学習」を、「学習者が単に受け手や聞き手としてではなく、その学習過程に自主的・協力的に参加することを旨とする学習方法」としてとらえ、ロールプレイング、ランキングなどの具体的な方法を取り入れた。話し合い活動を有意義にするための工夫としては、「質問カード」に質問の型を九つ示し、意見交換や討論の活性化を図った。

(2) 主体的・協働的な学習のための手立て

- ① 指導計画の工夫
- ② 「切実性」のある教材の工夫
- ③ 学習活動の工夫
- ④ 話し合い活動を有意義にするための工夫
- ⑤ 板書の工夫
- ⑥ 評価カードの工夫

(2) 主体的・協働的な学習のための工夫

① 指導計画の工夫

「追究する力」を育てる学びの段階の整理

- ① 課題を見出す
- ② 情報収集・加工と読解力
- ③ 発表・表現
- ④ 整理・統合
- ⑤ 整理力・討論
- ⑥ 刊行物・実践へ

(研究紀要p76,77参照)

(2) 主体的・協働的な学習のための工夫

① 指導計画の工夫

「追究する力」を育てる学びの段階の整理

単元構成の工夫

各単元の指導計画

(研究紀要p79,80参照)

導入	展開	まとめ
単元を貫く課題の設定	課題解決に必要な知識・技能・発想・考え方を身につける	課題の解決解決に向けた感想

(2) 主体的・協働的な学習のための工夫

② 「切実性」のある教材の工夫

本質性	具体性	関連性
関心適合性	発展性	

生徒や地域・現状に即した資料の作成

ゲストティーチャーの招聘、出前講座の活用

(研究紀要p80参照)

(2) 主体的・協働的な学習のための工夫

③ 学習活動の工夫


「参加型学習」の手法

ロールプレイ	プランニング
シミュレーション	ブレインストーミング
ランキング	ディベート

(研究紀要p80参照)

(2) 主体的・協働的な学習のための工夫

④ 話し合い活動を有意義にするための工夫



質問カードの例:

- なぜそう考えたのか、考えたのてすか?
- どうしてそう考えたのか、考えたのてすか?
- どうしてそう考えたのか、考えたのてすか?
- どうしてそう考えたのか、考えたのてすか?

3 成果と課題

(1) 成果

- ① 単元の導入で「単元を貫く課題」を設定し生徒に提示したことによって、生徒が単元全体の学習の見通しを立てることが出来た。また、「単元を貫く課題」は、単元の終末を見据えた問いにもなっており（すなわち、まとめで行うレポートなどの課題にもなっている）、一時間一時間の学習内容がいわば一枚のパズルのピースのようになり、主体的に知識や考え方を習得・蓄積させるとともに、それらを終末の学習過程において、単元全体を見通す上で、しっかりと活用させることが出来た。
- ② 新学習指導要領に示された「対話的で深い学び」に対する社会科公民分野としての準備を、研究を通して進めることが出来た。
- ③ 調べたことをもとに自分の考えを文章であらわしたり、友達の意見を聞いて自分の考えを深めたりする学習を積み重ねる中で、思考力や表現力などを高めることが出来たと考える。

(2) 課題

- ① 「社会参画」を見据えた「追究する時間」を進めるためには、カリキュラム・マネジメントがますます求められる。
- ② 各単元において、「構想」の過程の創出に苦心した。政治面では予算、経済面では原価などを鑑みると、中学校社会科における「構想」の限界も改めて感じた。
- ③ 全単元において「単元を貫く課題」の例を提案できたが、常に見直しをしつつ、より生徒が主体的に追究していけるような問いに改善していく必要がある。
- ④ 年間指導計画を作成したが、社会的な見方・考え方や育成する資質・能力等の位置づけ、単元を貫く課題の設定、学習活動の適切さなどについて、今後の授業実践の結果を基に精査していく必要があると考える。

「追究する力を育てる社会科学習」

～主体的・協働的に学ぶ学習の充実～

学校名 川越市立城南中学校

研究のポイント

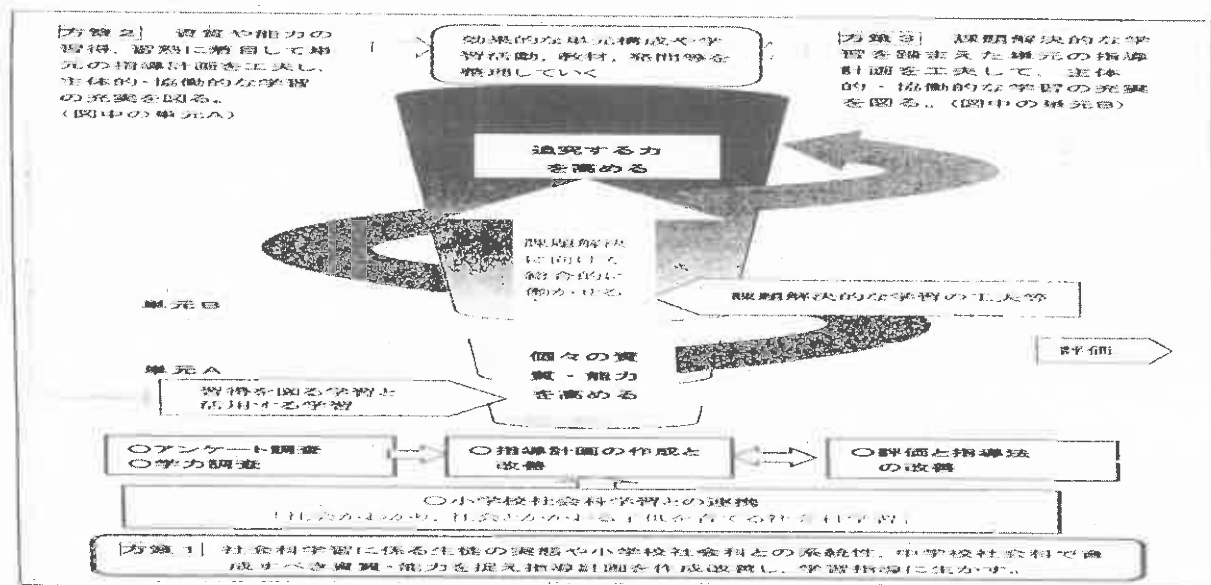
- 社会科学習に係る生徒の実態や小学校社会科との系統性、中学校社会科で育成すべき資質・能力を捉え指導計画を作成改善し、学習指導に生かす。
- 資質や能力の習得、習熟に着目して単元の指導計画を工夫し、主体的・協働的な学習の充実を図る。
- 課題解決的な学習を踏まえた単元の指導計画を工夫して、主体的・協働的な学習の充実を図る。その際、一連の学習の過程を通して生徒が主体的に学習する中で、総合的に資質、能力を働かせるよう留意する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

第35回関東ブロック中学校社会科教育研究大会埼玉大会（以下 本大会）の地理的分野の研究は、社会科学習において追究する力を育てるための方策を「主体的・協働的に学ぶ学習の充実」に着目して、授業実践を明らかにし、学習指導の工夫改善に資することをねらいとし研究を行った。その際、小学校社会科との系統性、分野の学習で育成する資質・能力などを検討・整理、その成果を踏まえて各分野の指導計画を作成した。また、指導計画の工夫や学習活動の工夫、教材の工夫、問いの工夫などに着目し、「追究する力」を育てるための方策（手立て）を検討し、研究授業を行った。さらに、効果的であったと考える事例を取り上げ、その手立てを「実践事例」として整理し、課題となることについて検討した。

(2) 研究構想



2 研究の内容

(1) 育てたい生徒の姿

本大会地理的分野では、分野の研究を通して育てたい生徒の姿を、次のように設定した。

「地理的事象に対する関心を持って主体的に課題を捉え、適切に情報を収集して活用し、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現するとともに、他者との関わりの中で思考を深める生徒」

そして総論の「追究する力を育成するための段階」を受け、地理的分野で追究するための段階を、次のように考えた。①課題を見いだす ②情報の収集・加工・読み取り ③考察 ④表現・発信 ⑤意見交換・討論 ⑥判断

さらに、地理的分野の学習では、社会的事象を関連付け、追究したり説明したりするなどの学習を通して、社会的事象の地理的な見方・考え方の基礎を養うことを重視している。

以上、様々な点を踏まえ、生徒の課題意識を引き出して主体的に諸地域の地域的特色を追究する課題解決的な学習展開を工夫していく。

(2) 具体的な研究の取り組み

① 指導計画の工夫に着目して

ア 単元構成の工夫

基礎的な知識や技能の習得、地理的な見方、考え方を働かせて事象の特色や事象間の関連等を考察、表現することなど、生徒の実態や計画的な指導を踏まえて重点とすることを意識して単元構成を工夫する。また、課題設定から情報の収集、整理、考察、発表・意見交換や表現までの学習過程を、生徒が主体的に取り組めるよう課題解決的な学習の単元構成を工夫する。その際、課題追究の仕方を身につけさせるために、モデルを示す場面を設けることも考える。

イ 単元を貫く課題の設定

単元を貫く課題を設定して、単元を通して課題を追究していく。その際、単元を貫く課題を基に、各時間の学習課題（問い）をあらかじめ単元の学習計画の中に設定する。

② 主体的・協働的に学ぶための工夫

ア 学習活動の工夫

○ 作業的な学習の工夫

地球儀や地図、統計資料などを活用し、地理的な情報を収集、整理、加工するなどの作業的な学習を工夫して、地理的な技能の育成を図っていく。その際、主体的・協働的に学ぶために、グループで役割分担を設定して作業に取り組み、その中で互いに教え合ったり、作業の結果を共有したりする場面を設定するなどしていく。

○ 多面的・多角的な考察を促す学習活動の工夫

地理的な事象を捉え、それを多面的・多角的に考察する学習活動の工夫として、ジグソー法やディベートなどを取り入れた学習活動の工夫に着目。例えば、ジグ

ソー法は、情報の読み取りや解釈（エキスパート活動）、情報の伝達、説明（ジグソー活動）、考察、意見交換（クロストーク活動）の過程が学習展開の中に組み込まれていて、エキスパート活動の情報を基に、事象間の関連や地域的特色などを多面的・多角的に考察することができる。ディベートは、肯定、否定の異なる2つの立場から論題について考えていく中で、多面的・多角的な思考を促すことが期待できる。その際、地理的な見方・考え方を働かせる上で適切な論題の設定が鍵となる。

○ 表現活動の工夫

追究した過程や結果を、資料を示しながら説明、発表したり、地図や図にまとめたりする。その際、対話的で深い学びとなるよう、表現したことを基に意見交換する場面を設定。そして、まとめとして、個人で解釈したことを記述する学習活動を位置づける。

イ 教材の工夫

生徒の実態を踏まえ、主体的な学習を支え学習のねらいを達成する上で効果的な教材の工夫の検討。資料コーナーを設置し、小学校の教科書を置いたり、多様な資料を準備し生徒に提供、生徒が有用な資料を主体的に選択して学習を進めるなど、学習環境の整備の工夫を含め考えていく。

③ 地理的分野で育成する技能について

地理的分野で育成する技能について、様々な資料や過去の研究成果等を基に検討し、ア 情報を収集する能力 イ 情報を読み取る能力 ウ 情報をまとめる能力に分けてまとめた。

④ 研究授業（11月17日（金） 於：川越市立城南中学校）

ア 授業者 小川紗世子 教諭 ・ 宮川 剛久 教諭

単元名 「世界の諸地域 北アメリカ州」

イ 授業者 関 正史 教諭

単元名 「日本の諸地域 関東地方」

指導者 平成国際大学 特任教授

平澤 香 先生

埼玉県教育局市町村支援部 義務教育指導課

清水 利浩 先生

3 研究の成果と課題

(1) 成果

① 表現活動や表現方法を工夫し、単元の指導計画に位置づけることで、地図や図を作図したり、それらを使って説明したりする学力を養うことができた。そして、その学習過程で、グループで話し合いながら活動する場面を設けることにより、思考を深めることができた。最後に個人でまとめる場面を設けることで、社会的事象間のつながりや地域的特色について理解を図ることができた。

② 社会的な見方・考え方や技能の系統性、小学校や他分野との関連などを位置づけて、年間指導計画例を作成することができた。その中に全ての単元で「単元を貫く

課題」を示すとともに、主体的・協働的な学習活動を例示した。

- ③ 協働的な学習は、生徒が個人で取り組んでも理解できないものを生徒同士で学び習得していくことに大きな力となることが分かった。また、仲間と関わることで仲間から学び方を学び、生徒が資質や能力を習得し、習熟をさらに深めていく姿が見られた。
- ④ 生徒の実態をより意識して、教材開発や主体的・協働的な学習を位置づけた授業展開を考えることができた。その際、地域に目を向けることで、生徒の学習意欲や地域に対する関心を高めることができた。また、「学びの段階」を押さえることで、資質・能力を段階的に育成することを意識して授業実践に取り組むことができた。
- ⑤ 指導と評価を充実させる手立てとして、複数のチーム・ティーチングを実践できた。

(2) 課題

- ① グループ活動や個に応じた活動では、生徒の多様な学習状況の把握や個に応じた指導を充実させることが難しい。複数の教師によるチーム・ティーチングを導入、実践したが継続することがむずかしい。
- ② 1時間の授業でジグソー学習を取り入れて課題解決を図る授業に取り組んだところ、クロストーク活動の時間が十分確保できない点が課題である。また、クロストーク活動で、「対話的な深い学び」になるために、どのようなことを話し合わせればよいのか、その適切な問いを作ることが難しく、課題となっている。
- ③ 主体的な学び、社会参画に対する意欲や態度の高まりなどを、どのように評価していけばよいか、グループ学習による生徒の学習状況を的確に把握するためには、どのように評価活動をしていけばよいかといった、評価と指導の工夫改善が今後の課題となる。本研究では、評価規準を基にして、予め生徒の学習状況を想定しておき、学習活動の観察やワークシートの記述など生徒の思考を可視化したものを捉えて、教師の評価活動に取り組んだ。また、生徒自身に学習の振り返り、自己評価させる取り組みを行った。まず、これらの取り組みの効果と課題を検討し、「追究する力」を育てる上で効果的な評価と指導の在り方を考えていきたい。



研究主題

「 学力の向上を図る教育活動の充実 」 ～授業の質の向上を目指して～

川越市立霞ヶ関中学校

研究のポイント

- 総合的な学力向上策に全校で取り組む中で、特に「か・す・み ラーニング」を主軸にして指導力の向上を図る。
- 指導法改善PT（コアチーム）が随時必要に応じてTF T（タスクフォースチーム）を編成し、研究を進める。その編成は、全職員が研究に参画するために、職員個々のキャリア段階や分掌、特質を活かす。
- 各教科領域で指導内容の継続性、教育課程の接続を明確にするための小中協働教科部会と協働授業を実施する。
- 学校評価アンケートやTF Tの調査から、生徒・保護者・教員の実態を把握して課題ごとにヴィジョン（達成目標）を立て、PDCAサイクルの下で研究に取り組む。

1 研究の概要

（1）研究のねらい

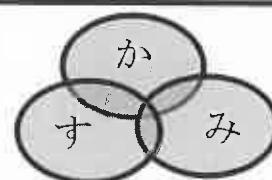
①授業の改善

「か・す・み ラーニング」を主軸に授業を改善する。

「か」確実に基礎基本をおさえる授業

「す」進んで学びたくなる授業

「み」みんなで伸びる授業



- ア 生徒の実態をもとに各教科領域で目標と仮説をたて、授業研究を行う。
- イ 毎月一回授業を見直し、PDCAサイクルの下で授業研究を行う。
- ウ 教師・生徒のための「話し合いのスキル」を作成する。
- エ 小中協働部会で板書・ノートの一統化を図る。

②学びの積み上げ（9年間を見通した一貫教育）

全教員が小中協働教科部会・協働授業を行う。

③学びの環境づくり

- ア 授業規律の指導を徹底する。
- イ 学習掲示を充実させ基礎基本の定着や意欲の喚起を図る。
- ウ 自主学習ノートへの指導によって家庭学習の指導を行う。
- エ 補習教室（Kゼミ）による学習支援を行う。



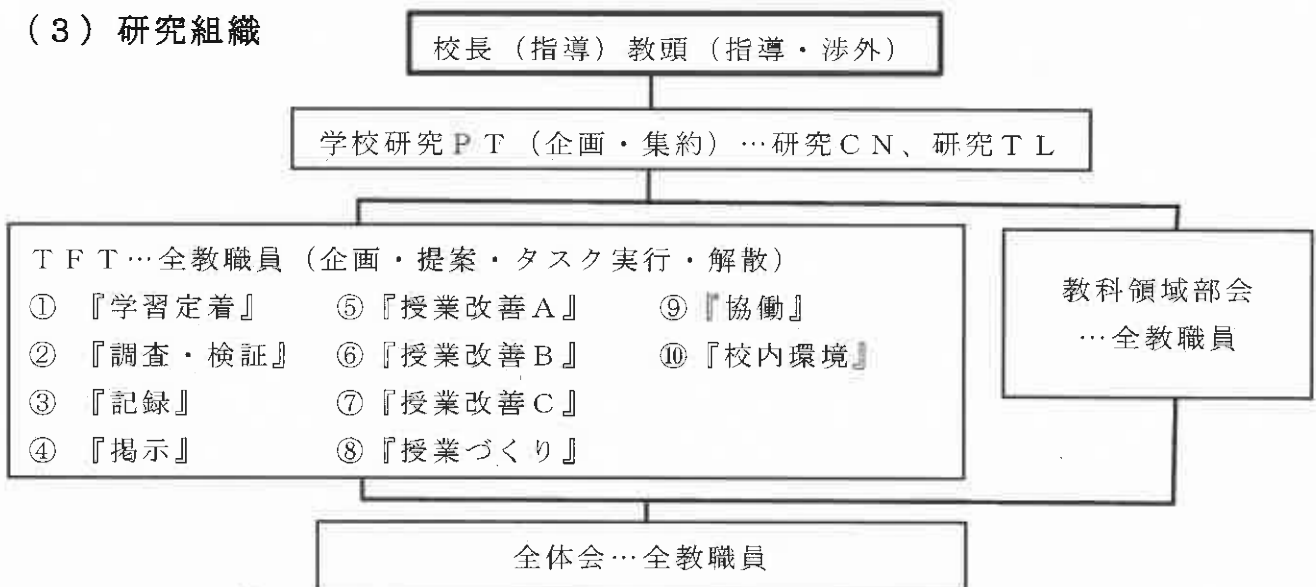
研究の構想図

(2) 研究主題設定理由

昨年度より本市教育委員会と市内小・中学校が「川越市小・中学生学力向上プラン」を策定し、「基礎的・基本的な知識・技能の習得とのバランスを図りながら、思考力・判断力・表現力の育成を一層充実させる」教育に取り組んでいる。このことは、県の『指導の重点・努力点』の中にも示されており、子供たち一人一人が、自ら経験したり試みたり表現したりすることを基軸とした学習活動の展開が本県でも求められている。

これらを受け、本校の課題「学習意欲・学習習慣の定着・基礎学力の定着」や保護者の思いである「授業のわかりやすさ」をもとに研究仮説「一人一人が活躍できる場の工夫をすれば、生徒は授業が楽しくなり、すすんで学ぶ力を高めることができるであろう。」を設定し、研究主題「学力の向上を図る教育活動の充実～授業の質の向上を目指して～」の実現を目指すこととした。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 学校研究 P T が組織、研究の方針・重点・計画を検討して立案する。
- (2) 各教科領域部会で、実態把握・研究テーマと仮説・具体策を検討し、「か・す・み ラーニング」を実行する。
- (3) P D C A サイクルによる途中評価から、成果と課題を抽出し、改善策を検討する。
- (4) 各 T F T による検討と提案を受け、実行する。
- (5) 小中協働教科部会・授業を実施し、9年間の学びの積み上げにおける課題を抽出する。

3 実践事例

仮説 一人一人が活躍できる場の工夫をすれば、
 生徒は授業が楽しくなり、すすんで学ぶ力を高めることができるであろう。

(1) 研究の柱1「学びの環境づくり」

①A チーム（授業規律）

ア 落ち着いて授業に集中できるように「授業の受け方 8箇条 みんなで8ろう」を作成し、授業規律の徹底を図った。また、各教室の前面に掲示し、生徒の意識を高めさせた。

イ 教師が授業を進める際に留意する「授業の進め方 やるべ4」を作成し、全教室の教卓にはったり、掲示したりした。

ウ 「授業の受け方 8箇条 みんなで8ろう」の生徒たちへの浸透を目指し、委員会単位で8項目を分担して、徹底を図るための活動をした。さらに、小中協働部会を設定し、9年間を見通した授業規律の向上を図った。

②掲示チーム

ア 教科掲示板の作成、生徒の作った問題等の掲示を廊下だけでなく、階段にも行った。

ウ 生徒の作品の掲示だけでなく、見本となるノートの掲示を行った。また、各行事のスナップ写真を掲示し、生徒の活動が見える掲示にした。

③記録チーム

ア 学校研究の流れや動きを、いつでも誰でも把握できる環境を作った。

イ 記録した資料を様々な形で教育活動に活用できるようにした。

ウ 「平成29年度霞ヶ関中学校」―「学校研究」とフォルダを割り当てて誰でもいつでも自主研修に役立てられるようにした。

(2) 研究の柱2「指導力の向上」

①B チーム（生徒の自己評価）

生徒が「わかった」ことや「できた」ことを自己評価することで、自己肯定感を高め、生徒が学習にさらに意欲的に取り組むようになり、学力向上につながると考えた。

②C チーム（教師の授業評価）

授業を見直すための教師向け授業評価シートの作成を研究した。毎月の授業を振り返ることで、各チームの取り組みの成果が結果に出ると考えた。

生徒が自分の居場所があると思える授業か、生徒一人ひとりが授業に参加できているかを振り返るための項目を作成した。

(3) 研究の柱3「学びの積み上げ」

① 学習定着チーム”

ア わかる喜びや具体的な学習方法の指導をねらいとし、全学年で定期テスト前に補習教室を開いた。C判断の生徒には個々に声をかけて、参加意欲を引き出した。

イ 自己肯定感や学習意欲の向上をねらいとし、全学年で「家庭学習の仕方」を指導した上で実施した。良い取組のノートを掲示や学級通信で紹介するなどの啓発や、「自主学習努力賞」の表彰などを行って意欲喚起を行った。また、学級通信や保護者会を活用して保護者へも指導の協力を求めている。

② 協働チーム

- ア 全教員が霞ヶ関小学校と小中協働教科部会と協働授業を行い、「9年間の学びの積み重ね」における課題点の抽出を行った。その実施内容を全体研修で発表し、共有した。
- イ 思考や表現力を育むように学習の流れや解決の方法、手順などが分かる板書の工夫をした。小学校で行われている指導を基に各教科で話し合い、統一化を図った。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 「授業はわかりやすいか」の質問に「わかりやすい」と答えた生徒が増えた。
【17% (H28) → 23% (H29)】
- ② 「先生は、熱意をもって教えてくれるか」の質問に「よく教えてくれる」と答えた生徒が増えた。【26% (H28) → 34% (H29)】
- ③ 協働授業を実施することが教員同士の研修の場となり、指導技術の向上を図ることができた。
- ④ 小学校での取組を基本とした板書計画とノート指導を各教科で統一することにより、教師が学習内容を明確化することができ、授業の質の向上につなげることができた。
- ⑤ 「将来の夢を持っている」の質問に「よくあてはまる」と答えた生徒が増えた。
【39% (H28) → 45% (H29)】
- ⑥ 「挙手や発言などで積極的に授業へ参加している」の質問に「よくあてはまる」と答えた生徒が増えた。【21% (H28) → 25% (H29)】
- ⑦ 復習をする生徒が増えた。【43% (H28) → 55% (H29)】
- ⑧ 1日の家庭学習を「やっていない」と答えた生徒が減った。
【14% (H28) → 4% (H29)】
- ⑨ 「授業の振り返りができた」と答えた生徒が増えた。
【54.6% (H28) → 80.3% (H29)】
- ⑩ 「自主学習に振り返りを生かすことができた」と答えた生徒が増えた。
【45.4% (H28) → 70.5% (H29)】
- ⑪ 「自主学習に振り返りを生かすことができた」と答えた生徒が増えた。
【45.4% (H28) → 70.5% (H29)】
- ⑫ わからない点や疑問点を解決するために、進んでKゼミに参加する生徒が増えた。
- ⑬ 9年間を見通した授業規律を、「霞地区 みんなで8ろう！」として策定できた。
- ⑭ 掲示をきっかけにし、廊下で学習の話をする生徒が増えた。
- ⑮ 自分の作品や結果が掲示されることを目標にし、学習をする生徒が増えた。

(2) 課題

- ① 小中相互の教職員交流の充実と、学習規律の継続的な確認と修正。
- ② 望ましい人間関係の醸成や潤いのある学級・学年経営の実現に向けた生活規律の小中共通指標の策定。
- ③ 教育機器の活用や多様な教材、教具、資料活用についての合同教科部会の充実。
- ④ 板書計画とノート指導の統一化を図る検証方法の工夫。
- ⑤ 家庭学習の向上をねらいとした指導と個に応じた支援方法の工夫。
- ⑥ 生徒の学習意欲の向上につながる掲示教育の充実。

研究主題

「体育好きな泉っ子の育成」 ～運動の楽しさを実感できる授業づくり～

川越市立泉小学校

研究のポイント

- 体育好きな児童を増やすには、どんな授業したらよいかを研究のスタートとする。
- 運動の楽しさを児童に味わわせる授業を研究する。
(4つの楽しさ…動く楽しさ 分かる楽しさ 伸びる楽しさ 関わり合う楽しさ)
- 研究を体育科の授業だけに特化して行う。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

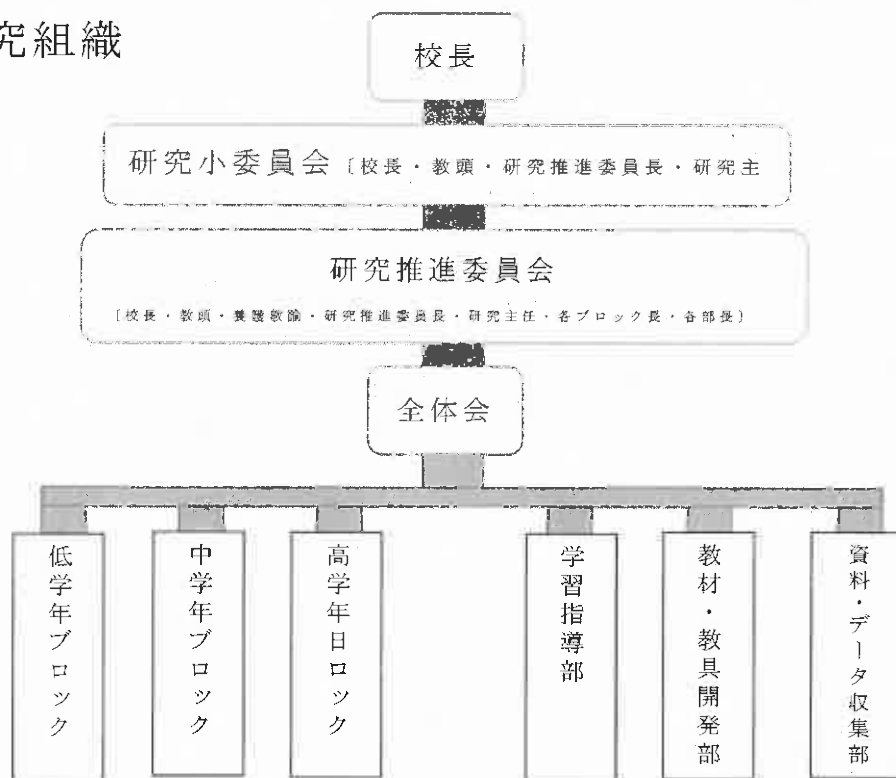
本校は、平成29・30年度の2年間にわたり、川越市教育委員会及び川越市教育研究会の委嘱を受け、研究テーマ「体育好きな泉っ子の育成 ～運動の楽しさを実感できる授業づくり～」を掲げ、研究に取り組んでいる。本校の過去3年間の研究内容を振り返ると、「特別支援教育の視点を生かし、コミュニケーション能力を高める授業づくりの工夫」を掲げ、研究に取り組んだ。「豊かな関わり合いを通して、泉っ子が輝いてほしい」という教師の願いによる研究であった。本年度の研究内容を決定するにあたっては、こうした教師の願いをもとに、本校における重要課題の一つである体力向上を切り口として研究に取り組むこととした。具体的には、体育科の授業研究会を研究の中核に据え、「運動の楽しさ」を追求する中、指導の工夫・改善に関する研究を進め、体育が好きな児童を育て、運動好きな児童を育て、生涯にわたって運動に親しむ資質をどの子にも育むことをねらいとしている。

(2) 研究主題設定理由

本校の児童は、明るく素直な子が多い。また、外で遊ぶ子も多い。しかし、運動をする児童と運動をしない児童の二極化や、体育が「あまり好きではない」「好きではない」と感じている児童も見られる。また、生涯スポーツの観点から、これまでの小学校期における体育科の役割は、生涯スポーツへつなぐ準備段階として考えられていた。しかし、これからの学校期における体育科は、準備と生涯スポーツ即実践の二重機能を備え、自発的・自主的なスポーツの意味・価値を伝えていく役割を担っている。本校における児童の実態、そして、生涯スポーツの観点から、小学校期に「体育好きな子ども」育成することで、将来にスポーツの選択肢を残し、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることができると思われる。

そこで、本研究では、授業改善に特化した研究を進め、子どもたちが「運動の楽しさ」を実感できる授業を実践していくことで、体育が好きな子どもの育成に繋がると考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の仮説と仮説にせまる手立て

目指す児童像 **運動の楽しさを味わい、生涯にわたって運動に親しめる児童**

低学年 **力いっぱい運動を楽しむ子**

中学年 **友達と協力し合い、運動を楽しむ子**

高学年 **友達と高め合い、運動を楽しむ子**

仮説①

運動の特性や魅力を味わわせる学習過程を展開すれば、運動の楽しさを実感できるであろう。

仮説②

児童の実態に応じた教材教具場を工夫すれば、運動の楽しさを実感できるであろう。

仮説①にせまるための手立て

- ① 児童の実態の徹底調査
- ② 学習過程の工夫（学習過程の明確化）
- ③ 学習規律の徹底
- ④ めあて学習の工夫（学習カード）
- ⑤ 児童同士の学び合いの工夫

仮説②にせまるための手立て

- ① 技能分析
- ② 児童が楽しめる場や教材教具の工夫
- ③ 単元の徹底的な教材研究
- ④ 運動量を確保するための場の工夫
- ⑤ 指導と評価の一体化

(2) 本校における運動の楽しさの分析

<p>【動く楽しさ】 自ら体を動かそうという気持ちになったり、力いっぱい運動することができたりしたと感ずること。</p>	<p>【伸びる楽しさ】 運動ができた、技能が向上した、体力を高めることができたと感ずること。</p>
<p>【関わり合う楽しさ】 集団内でお互いに教え合ったり、励まし合ったりすることができたと感ずること。</p>	
<p>【分かる楽しさ】 課題意識を持ち、課題の解決に向けて運動したり考えたりする中で、新たに感ずたり、分かったりしたことがあったと感ずること。</p>	

(3) 専門部の取組

○学習指導部

1 学習指導案の形式の検討と提案

- ・県の体育必携を参考にし、指導案の形式を決め、どの学年でも共通して使えるようにした。
- ・全ての児童に『運動の楽しさ』を実感させるための工夫や、どの教師でも、どんな場面でも同じような指導ができる手立てを記載した。
- ・親しみやすい単元名の活用をした。

2 新体力テストの学校平均値・県平均値の掲載をした。

3 「泉小『運動の4つの楽しさ』」の表を記載した。

4 「泉小『運動の4つの楽しさ』を実感させる手立て」の提示をした。

○教材・教具開発部

低学年・・・学習の展開を物語性にして、児童の意欲を喚起した。一時間の学習で身に付けさせたい動きを、「○○の術」として表現した。テープ（まきびし）やクッション（お宝）、牛乳パックを連結したものを作成した。

中学年・・・ハンドボールのシュートした後に音がなるように工夫した。このことによりゴールの判定がより明確になった。得点をあげた児童に達成感や喜び、楽しさが増した。ハードルを三角形にした上から段ボールを被せたものをゴールにした。

高学年・・・虎柄のバーの両脇に三角コーンを置いてゴールとした。ゴールはI型として、キーパーは置かずに様々な角度からシュートを打てるようにした。その結果、フィールドをワイドに活用し、ゲームも大きく展開され、児童の運動量が確保された。

○資料・データ収集部

本校児童が体育科の授業に対してどのようなイメージをもっているのか、また領域別の興味・関心はどのようなものなのかを調べるため、アンケート

調査を行った。1年生は12月に1回、2～6年生は9月と12月に2回調査を行い、結果の比較を行った。

3 授業研究の実践

低学年ブロック「認定証を手に入れる！～マットの巻き～」（マットを使った運動遊び）



中学年ブロック「バン！バン！ ハンドボール」（ゴール型ゲーム）



高学年ブロック「みんなで得点ゲットだぜ！！型サッカー！」（ゴール型ゲーム）

4 研究の成果と課題



- すべての授業研究において、子どもたちが楽しそうに取り組む姿が見られた。授業に研究を特化した成果である。教師の授業に対する意識がさらに高まった。
- 本年度の取組は、どの学年も1つの領域について4つの楽しさについての分析を行っていたが、領域や単元により、4つの楽しさを絞ることを考えていくべきである。

「自分事として捉え、話し合い、よりよい生き方を考える道徳科指導」

学校名 川越市立月越小学校

研究のポイント

- 問題解決型の道徳科授業を実践し、追究していく。
- 移動型ミニホワイトボードを活用したグループ学習の充実を図る。
- 道徳ノートの実践活用を図るとともに、望ましいノートの在り方を追究していく。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

価値観が複雑に絡み合う現代社会においては、児童に道徳的判断力を育成していくことが重要である。本校の児童の実態を踏まえるなら、実際の生活場面における問題場面と資料における道徳上の問題場面との関連性を持たせ、道徳的問題を解決していくにはどのような考え方がよいのかを全員が諒解できる解決策、大切にすべき価値を見いだす力をつけていくことが大事であると考えた。そこで、学校研究の研究対象を問題解決的な道徳科の授業の在り方に絞り、児童の道徳性の向上を目指すこととした。なお、問題解決型の道徳科の授業が本校の研究の鍵を握ると考え、従来の道徳の時間の授業を追いかけるのではなく、全職員一丸となって新しい道徳科としての授業を創造していくことを研究のねらい（方針）とした。

(2) 研究主題設定理由

いじめによる自殺が後を絶たない現在、いじめられている友達を見てもみぬふりをしたり、自分がいじめに合いたくないために加害者になってしまったりする悲しい現実がある。激しい社会の変化の中で、今、目の前で起きている問題を自分のこととして捉え、「自分にはなにができるのか」を考え、よりよい行動を選択・判断できる児童を育成したいという願いのもと、本校の研究主題を「自分事として捉え、話し合い、よりよい生き方を考える道徳科指導」とした。

(3) 研究組織

- ・授業研究部・・・よりよい授業の創造をめざして
- ・教材開発部・・・授業を支える環境整備

2 研究の内容

いじめによる自殺が後を絶たない現在、いじめられている友達を見てもみぬふりをしたり、自分がいじめに合いたくないために加害者になってしまったりする悲しい現実がある。激しい社会の変化の中で、今、目の前で起きている問題を自分のこととして捉え、

「自分にはなにができるのか」を考え、よりよい行動を選択・判断できる児童を育成したいという願いのもと、本校の研究主題を「自分事として捉え、話し合い、よりよい生き方を考える道徳科指導」とした。その上で、この研究主題に迫るべく2つの仮説を立てた。

仮説1 問題解決型の授業を展開すれば、自分事として考えることができる。

仮説2 小グループでの話し合いを充実させれば、よりよい生き方を見いだすことができる

仮説1で挙げた問題解決型の授業を展開することで、今までのように物語の主人公の気持ちを考えて終わりではなく、「自分だったらどうするか」と実生活に即して、より現実のこととして考えようとする授業へと変えることができる。道徳科での学びに終始することなく、現実の問題が起きた時に、他人事ではなく自分のこととして考え、選択・判断できる児童の育成につながることを期待している。また、問題解決型の道徳科の授業の理論ベースを、ディスクルス倫理学に置き、ハーバーマスの提唱する参加メンバーの諒解に着目し、実践的な研究を進めてきた。研究1年目の結果として、道徳的な問題となる場面提示が自分事として考える上で重要な鍵を握ると考え、下記の仮説1の下位仮説として位置づけることにした。

仮説1-1 道徳的に問題となる場面設定の仕方を工夫することで、自分事として考えることができる。

仮説1-2 問題場面の条件を変える、児童の日常の問題場面を取り上げた発問を組み込むことで、より自分事として考えることができる。

仮説2では、小グループで話し合いをすることにより、一斉授業では思考していなかった児童も話し合いに参加し、発言することができること。また、多様な価値観に触れることもできること。他者の意見を聞き、話し合いを深めていくことにより、新たな価値を見出すことを期待して実践を重ねてきた。これまでに、単にグループで話し合うのではなく、ジョンソン&ジョンソンの提唱する5つの原則（①相互互惠関係の構築②対面的積極的相互作用③個人の責任の明確化④社会的スキルの獲得⑤グループ改善の手続き）に則った話し合いを研究してきた。その結果として、仮説1と同様に仮説2についてもより具体化するため、下位仮説を位置づけて研究を進めることとした。

仮説2-1 移動型ホワイトボードを活用したグループ学習を組み入れることで、話し合いを充実でき、よりよい生き方を追究することができる。

仮説2-2 グループ学習課題を工夫することで、話し合いを充実させることができ、よりよい生き方を考えることができる。

このような下位仮説を立て、「自分事として捉え、よりよい生き方を考える道徳科」の研究授業を重ね、道徳性を育む指導方法を探究、検証していくこととした。

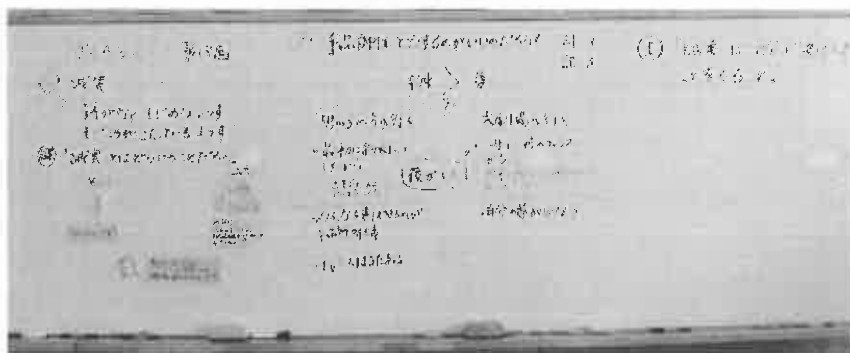
3 実践事例

【授業実践1】

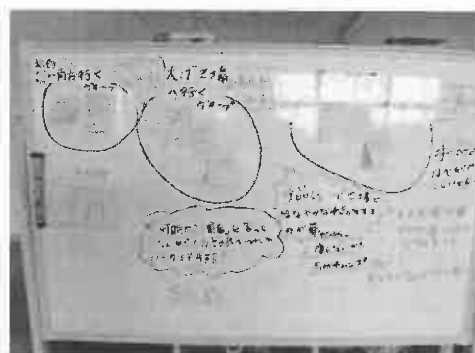
第5学年で研究授業を実施した。主題名は「自分の心に誠実に」、資料は「手品師」(学研)を用いた。この実践では、自分事として考えるようにするために仮説1については、問題場面を視覚的にわかりやすくし、どちらも選択することが難しい、その難しさを共感させることに留意した。また、仮説2にかかわって、よりよい生き方を見いだすために、授業後段で「本当にそれが誠実と言えるのか」と問うことで、道徳的価値の理解を深める工夫を試みた。この実践の本時のねらいは、「自分の言動に責任を持ち、いつも誠実な心で人に接しようとする気持ちを育てる」であり、評価の視点は、「誠実な心について、多面的・多角的に自分との関わりで考えることができたか」である。

本実践からは、男の子の方に行くにしても、大劇場に行くにしても「心がそこにあらず」では、誠実とは言えないと考えている。自分の心に誠実になるためには、行為の責任と覚悟があることに気付かせたい。子どもと約束した行為に対する責任、そして決定した行為に対する自分自身の覚悟である。このための自分事として捉える上で、仮説1にかかわっては、何に葛藤しているのか、そこを十分突き詰めさせたかった。また、よりよい生き方を考えるために、仮説2にかかわっては、授業後段で「その行為は果たして誠実か」と問い返すことで、何が誠実には大切なのかを再度考えさせたいと思っていた。グループ学習でのホワイトボードには、様々な行為や考えが出されていた。子どもたちが葛藤をどうすれば乗り越えられるのかを真剣に考えていた様子が見える。ただ授業後の児童の感想を拾ってみると、自分で決めたことを行うことが誠実といった理解も見られ、行為を決定した覚悟や責任についてまでには理解が及んでいない児童も見られる。このことは、問題場面での難しさへの共感が十分でなく、自分事として捉えることができていなかったのではないか。また、授業後段での選択した行為への責任についての問い返しが、時間が足りず十分でなかったことに因ると考えている。

【授業後の板書】



【グループ学習】



【授業実践2】

第4学年で研究授業を実施した。主題名は「理解し助け合う」、資料はわたしとさおりちゃん(出典「みんなのどうとく 埼玉県版」学研)を用いた。この実践では、自分事として考えるようにするために仮説1については、挿絵を効果的に使って問題場面を視覚的にわかりやすくしたこと。仮説2にかかわって、よりよい生き方を見いだすためにグループ課題の工夫を試みた。この実践の本時のねらいは、「友達と互いに理解し、信頼し、助け合おうとする心情を深める」であり、評価の視点は、「相手の立場や気持ち

を考え、理解し認め合い、助け合おうとする心情を深めている」である。

この実践では、グループ課題を「どちらが悪いか」とし、ホワイトボードの真ん中にテープを貼って、両サイドに「私が悪い」「さおりが悪い」と基準を定め、マグネットを線上に置くことで、どちらが悪いと考えているか示せるようにして話し合わせた。

ここでは、どっちが悪いかにねらいがあるのでは無く、この話し合いを通じて、その理由を出し合う中で「どちらも自分の思いを中心に行い、本当に友達のことを考えていたのか」ということに気付かせることにねらいがある。可視化したことで、さおりは全く悪くないと考えていた児童もメンバーの理由を聞く中で「私のことを



考えて言っていたようだけど、それは言葉だけで本当の私の気持ちを考えていなかった」ことに気付かされる場面があった。これまでの道徳の授業では、主人公を中心に心情を追うことが多かった。「この後、私はどうするのがいいのか」といったグループ課題も考えていたが、改めて友情についての道徳的価値を深めるという点からすれば、「どちらが悪いか」といった課題の設定も有効と言えよう。また、授業後段での「私は何と声をかけるといいのか」「さおりは何と声をかければいいのか」と立場を変えて、考えさせることも道徳的価値をさらに深める上で役立ったと考える。

4 研究の成果と課題

【成果】

- ・適切な課題が与えられた子ども達は、十分に葛藤しながら、様々な角度から問題を解決しようと考え、話し合いながらよりよい解決方法を見出そうとしている。話し合う過程の中で、友達の多様な考えに触れることができ、自身の考えを深めることができている。
- ・振り返りの時間を設けることにより、学んだ価値について自分の生活経験と関連させながら考えることができた。授業の中で得たことを元に、よりよい行動選択につながった児童もいれば、「やはり難しいことだ」と実感し、即座に行動に結びつかない児童もいる。しかし、日々の生活は多様な価値観の集まりでできていることや、自分の考え次第で物の見方が変わることを実感しつつあり、道徳科の学習意欲につながっている。

【課題】

- ・「問題解決」にこだわるあまり、問題提示までの段階を淡々と進めてしまうと、自分事になりにくいことがわかった。これまで研究されてきた「自我関与」の手法を取り入れつつ、場面設定（状況設定）の段階で、本時の問題解決の難しさに十分共感させる必要がある。
- ・教師から与えられた問題を解決するのではなく、子ども自身が「何が問題か？」を考えることで、より自分事となり、実践意欲につながるものとする。今後は、子どもとともに問いを作る授業展開を研究していきたい。

研究主題

「学習したことを活用し、主体的に学習に取り組む児童の育成」
～国語科「読むこと」の領域を中心とした指導の工夫～

川越市立今成小学校

研究のポイント

- 全ての児童が参加できるわかりやすい授業を実践する。
- 自分の考えを深めるための交流活動を取り入れる。
- 自分の考えや思いを形にする活動を行い、児童の主体性を引き出す。

1 研究の概要

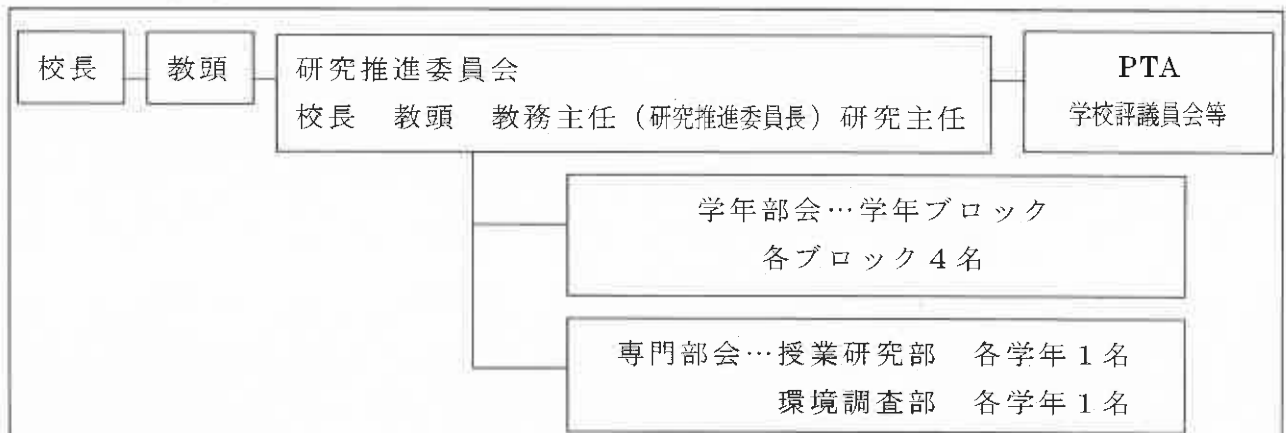
(1) 研究のねらい

仲間との協働学習を取り入れ、すべての児童が進んで学習に取り組むことのできるわかりやすい授業を実践することにより、児童の主体性を引き出し、学力の向上を図る。

(2) 研究主題設定理由

本校児童は、明るく素直な児童が多く、学習に対しても前向きに取り組んでいる。しかし、全国学力・学習状況調査、埼玉県学力・学習状況調査、入間地区学力調査等の結果から、基礎的な学力や理由を説明する等の応用力に課題があることがわかった。この実態を踏まえ、学習の基盤となる国語科の「読むこと」を中心とした言語活動を充実させることにより、他教科においても基礎的・基本的な力を身に付けさせたい。また、「わかって、できる」経験や仲間との交流活動を通して、主体的に学習に取り組む児童を育成させたいという願いから、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 目指す児童像

自ら学ぶ姿勢をもち、考えを伝え合い認め合う子
低学年「自分の考えをもち、進んで表現できる子」
中学年「自分の考えの理由を明らかにし、相手を意識して表現できる子」
高学年「自分と他者の考えを比較して、根拠や理由を示しながら表現できる子」

(2) 研究仮説

基礎的・基本的な内容の確実な定着を図り、学習したことを活用する場や、考えを深めあう活動を意図的に設ければ、主体的に活動する児童が育つであろう。

(3) 研究の手立て

- ① 全ての児童が参加できるわかりやすい授業
- ② 自分の考えを深めるための交流活動
- ③ 自分の考えや思いを形にする活動



(4) 検証方法

- ① 児童に対してのアンケートにより、情意面の変化を調査する。
- ② 教師に対してのアンケートにより、児童の変容、手立ての有効性を検証する。

3 研究実践

(1) 手立ての具体化

- ① 全ての児童が参加できるわかりやすい授業
 - ア 見通しがもてる学習課題、達成目標の提示
 - イ 叙述に係する箇所にサイドラインを引き、短い言葉で説明する活動
 - ウ 中心人物の心情について「心情バロメーター」を活用し、その根拠について叙述をもとに読み取っていく。
 - エ 前年、前単元における既習の内容、学び方を導入で取り入れたり、単元中の学び方のつながりを意識したりした学指指導
- ② 自分の考えを深めるための交流活動
 - ア 低学年、中学年、高学年に適した話し合い活動を取り入れ、表現の場を増やし、全員が授業に取り組める活動の導入
 - イ 根拠を明確にさせ、他の児童に説明する活動
- ③ 自分の考えや思いを形にする活動
 - ア 根拠をもとに、全体の場で自分の意見を説明する時間の確保

※ 個人で考える時間→集団で考える時間→個人で深めた意見を発表する時間

(2) 実践事例

① 手立て1について



図1 だれもが取り組めるワークシート

左図は、読み取りを活動順に配列したワークシートである。児童は叙述に即したサイドラインを基に、これらのシートに自分の考えを記入していく。学習活動が明確になることで、どの児童も主体的に活動に取り組むことができる。また、前学年や前単元の学び方を本単元で生かすことにより、児童が系統的に学習するこ

をねらいとしている。

「心情バロメーター」を活用することにより、登場人物の気持ちに寄り添って読み取りを行うだけでなく、思考を可視化し、仲間の考えと自分の考えを比較しながら教材を深く読み取っていくというよさがある。特に3年、4年の「金色のライオン」「ごんぎつね」では、気持ちの盛り上がりや落ち込みを目で確認しながら、理解を深めていた。

しぎのやる気メーター

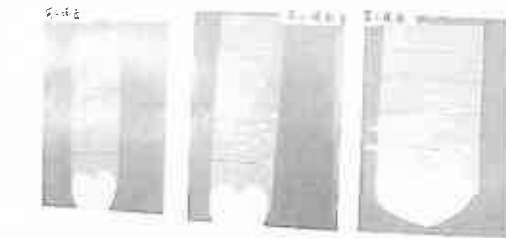
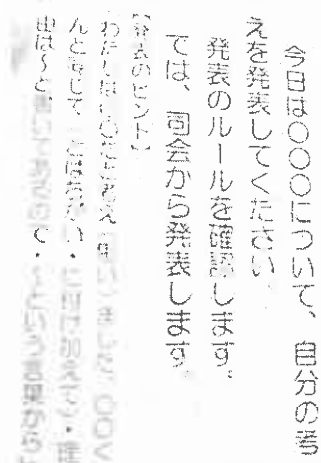


図3 心情バロメーター

② 手立て2について



低学年では、ペアを中心とした意見の交流を通して、互いの意見を聞いたり、伝えたりする活動を行うことで、相手の意見と自分の意見を比較することを学んだ。中学年以上は、左図のような話型を用いてそれぞれの意見を交流した。表現の場を設定することで、叙述をもとにした読み取りを深めるとともに、どの児童も考えた意見が生かされるように配慮した。

他の児童に説明することで、筋道を立てて説明することも重要になり、根拠を明確にした発言ができるように配慮した。

図4 話合いの話型

③ 手だて3について

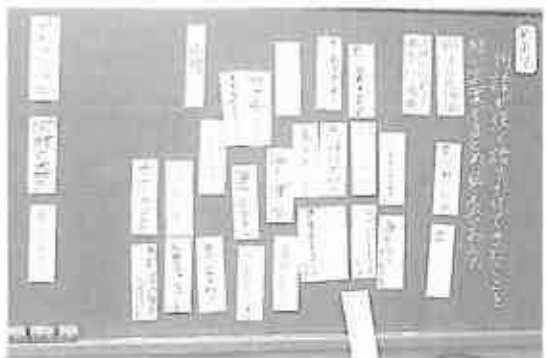


図5 深めた意見を全体に発信



図6 音読の仕方も変化する

手だて3では、グループ交流で学び合ったことを生かし、全体で自分の意見を発表したり、表現したりする時間を確保した。2年生の実践では、最初の音読に比べ、感情のこもった読み方に变化した様子を見ることができた。また、6年生の「物語が強く語りかけたことを伝える」という活動では、個人で考えた場面だけでなく、仲間の意見を聞いた上で、さらに自分の考えを修正していくような場面も見られた。

(3) 結果と考察

① 児童の情意変化 表1

	7月	12月
進んで学習する	82.8%	83.6%
感想や考えを書く(説明する)	70.9%	74.3%

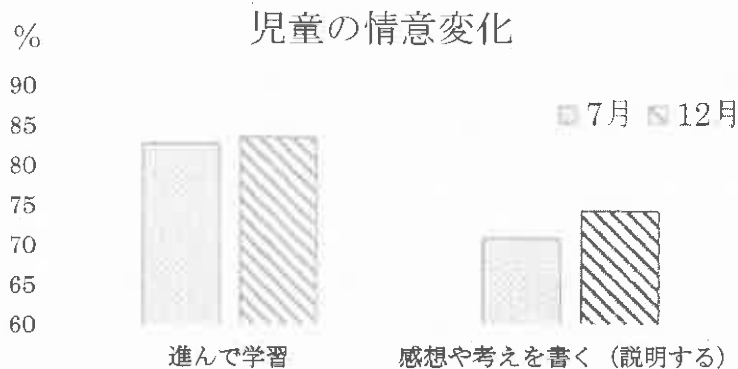


図7 情意変化グラフ

ことがわかる。この結果から、児童は1学期よりも主体的に学習する傾向が現れ始めていることが読み取れる。また、感想や考えを書いたり説明したりすることに対しても、以前よりも自信をもって取り組む児童が多いこともわかる。このことから、児童が見通しをもって活動に取り組み、仲間と意見を交流する中で、国語を通した言語活動が深まっていったからだと推察される。

4 研究の成果と課題 ※教師のアンケート結果も含む

- 児童の自己評価の結果から、主体的に学習できる児童が増えつつある。
- 感想や考えを書いたり説明したりする活動は、教師の適時適切な支援により定着することが分かった。
- 既習事項の掲示物の活用等により、どの児童も理解して学べるようになった。
- あらかじめ規準を決めてワークシートに自己評価を書かせることで、意欲をもって学習に参加する児童が多かった。
- 教材を深く解釈して(教師自身が)授業に臨んだおかげで、以前の単元での学習よりも子どもが意欲的に取り組んでいた。学習活動で行うことが明確なほど、児童は当然迷わず学習できた。サイドラインを引いて、短く書き抜くという学習の仕方を次の単元でも生かすことができた。
- 校内全体で共通した学習指導が定着してきたことで、来年度につながる素地ができてきた。
- ▲話合いの方法や手順について国語科を中心として他教科に広げていく必要性を感じた。児童にも具体的な学び方とその手順を指導していきたい。
- ▲読むことを中心とした研究を進めつつも、「話すこと、聞くこと」「書くこと」の指導や、語彙や表現の基礎的な内容についても指導を行うことで、学力の向上を図っていく。

表1、図3は児童の情意変化を示したものである。

アンケート7項目のうちの2項目を抽出した。アンケートは4観法で集計し、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」を選択した児童数を全児童数で割り、百分率でグラフに表した。

7月の割合と比較し、「進んで学習する」については約1ポイント増加。感想や考えを書く(説明する)については、約2.5ポイント増加している

研究主題

「豊かな人間関係を築き、自分たちの生活をよりよくしようとする児童の育成」
～「読むこと」（説明文）の取組を通して～

川越市立芳野小学校

研究のポイント

- 国語科の研究を通して、学習意欲と読解力を身に付けさせ、一人一人の学力向上を目指す。
- 学校と家庭が一体となった研究に取り組み、児童だけでなく、地域も芳野小は国語の研究を熱心に取り組んでいると分かる研究を目指す。
- 2年間の研究が芳野小の国語科のスタンダードとなるような研究を目指す。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、昨年度、国語科の研究を基盤に、UDの授業づくり、誰もが「分かる・できる」授業を目指してきた。本年度は、新たに国語科の説明文の授業を通して、主体的・対話的で深い学びを実現するための基盤となる読解力を身に付けさせるため、研究授業を中核にして支援や手立てを研究していく。

(2) 研究主題設定理由

新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの授業実現に向け、学び合い、教え合いを活性化するだけでなく、読む力や話す・聞く力はもちろんのこと、思考力や表現力など総合的な学力を高めながら豊かな人間関係を築くことが児童同士の深い学びに繋がると考える。また、読解力をしっかり身に付けることにより、全ての教科で学力向上に繋がり、将来の生活をより豊かにする。そこで、国語科の説明文の読み取りを通して、児童一人一人に確かな学力を身に付けさせたいと考え、本主題を設定した。

①めざす児童像 「自ら考え、自信をもって行動する子」

「豊かな人間関係」＝学び合い

《低学年》

- ・友達の話をよく聞き、進んで考える子

《中学年》

- ・友達の考えのよさに気づき、進んで解決する子

《高学年》

- ・友達の考えを取り入れ、自分の考えを深めようとする子

「生活をよくする」＝確かな読み取り

《低学年》

- ・順序を考えて読み取れる子

《中学年》

- ・事実と意見との関係を考えて、文章を読み取れる子

《高学年》

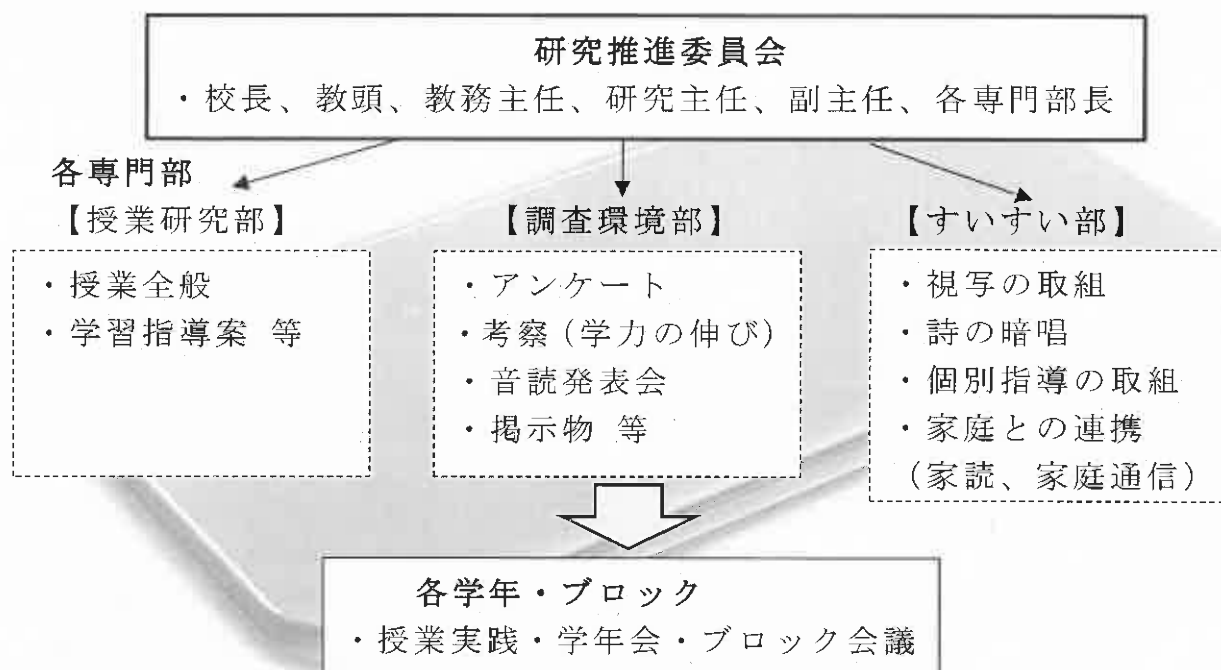
- ・文章の内容を的確に捉え、自分の考えを明確にしながらか読み取れる子

2 研究の内容と組織

(1) 研究の視点

- 〈視点1〉各学年における指導事項を踏まえ、自ら考える場と学び合いの場を取り入れた学習過程を明確にし、指導する。
- 〈視点2〉音読、視写、語彙力の向上、読書量の増加などの指導を通して、基礎基本の習得を目指す。
- 〈視点3〉「読むこと」に関する日常的な言語環境や学習環境を整える。

(2) 研究組織と取組



3 実践事例

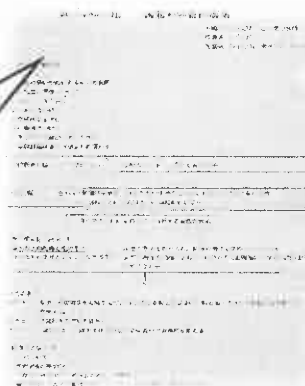
(1) アンケートの取組

各学級における国語科全般や読むことに関する意欲面を見届けるために、説明的な文章の学習をする前と後にアンケートを実施し、各学級の実態把握をするとともに、個の変容の把握に努めた。

(2) 授業実践の取組

説明的文章の重点指導項目である①内容の理解②構造の理解③読解技能の理解を意識しながら、問答中心の授業から主体的な言語活動中心の授業になるよう、授業実践に取り組んでいる。そこで、本校では、読むことと書くことを関連づけた指導、「単元を貫く言語活動」を中心に授業実践を積み重ねている。

学習指導案の形式を統一し、研究のねらいに迫る手立てについての共通理解を図りやすくし、一貫性をもった指導ができるようにした。また、市立図書館と連携し、全学年が並行読書の充実に努めた。



【2年授業実践 教材名「ビーバーの大工事」】



「単元を貫く言語活動」をクイズブック作りとし、本文で学んだことを生かし、他の本で調べた「動物のひみつクイズ」を最後に作る。

【5年授業実践 教材名「和の文化を受けつぐー和菓子をさぐる」】

エキスパート活動



ジグソー活動



主体的・対話的で深い学びの授業実現に向け、共有化の場面では、ジグソー法を取り入れた。

「単元を貫く言語活動」を巻物作りとし、本文で学んだことを生かし、他の本で調べた「和の文学博士〇〇の書」を作る。

(2) 音読発表会の取組

日頃の音読練習の成果と相手を意識しながら読むことで音読の楽しさを知ることが目的とし、業前活動の時間に学年ごとに発表していく。

【1年「月火水木金土日のうた」の発表】



ウッドブロックを使ってリズム良く

姿勢や明瞭な発音、音量を意識して発表した。



発表を聞くだけでなく、全体で発声練習も行っている。最初は、教師が姿勢からお手本を見せ、谷川俊太郎の「日本語のおけいこ」でリズム良く声を出して練習している。

(3) 暗唱の取組



【最終校長検定の様子】

様々な日本語の表現に触れ、親しんで欲しいとの願いから、詩や古文、百人一首などの暗唱に取り組んでいる。

〈合格基準〉

○はっきり伝わる声で ○間違わずに

○リズムよく、間をあげずに

※各学年10枚合格すると、努力を認め、全校児童の前で賞状を渡すとともに、職員室の掲示板に写真と名前を掲示する。

(4) 視写の取組

読解力を付けるために、全校で毎週木曜日のモジュールの時間を活用して、15分間程度、文章や詩などの視写に取り組んでいる。また、視写速度調査を毎学期実施し、個の伸びを見ていく。



読解力だけでなく、書く速度を高めることにより、視写するペースをそろえることができ、どの教科も授業の効率化に繋がられる。

UDの視点から苦手な児童への配慮も行っている。

- (例) ○画用紙で書く行だけ見られるようにする。
○マーカーが引いてあるお手本を見ながら書く。
○お手本にチェックや線を引く。

(5) 家庭への啓発

学力向上を目指す中で、家庭への協力は必要不可欠である。そこで、学校研究だよりを発行することにより、国語の研究の様子を知らせるとともに、家庭への協力を啓発し、家庭学習の充実に繋げていく。

学校研究(国語)だより



4 成果と課題 (成果○課題▲)

- 学校全体で国語科の取組をしている雰囲気が出ると児童にも伝わり、今まで、国語科が苦手な児童も積極的に授業や暗唱に取り組む児童が増えた。
- 暗唱の取組では、10枚達成者が9名(1月末現在)おり、周りの児童もそれに刺激を受け、休み時間は、校長検定に来る子どもで活気にあふれている。
- ▲児童の読解力を付けるために、今後も単元を貫く言語活動を通して着実に力を付けさせるとともに、更なる教師の授業力向上を目指していきたい。
- ▲視写や暗唱の取組など今後も更に学校と家庭が一体となって、子ども達の意欲を引き出し、読解力を身に付けさせていきたい。

「すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくり」

～ユニバーサルデザインと児童理解を生かした算数科の授業を通して～

川越市立古谷小学校

研究のポイント

○ユニバーサルデザインの視点と児童理解を生かして、「落ち着いた環境」「わかりやすい授業」「明るく元気な心」を視点とした算数科の授業を通して、すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくりを図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の教育目標「心豊かでたくましい児童の育成」を掲げ、「心を込めて考える子 仲良くする子 がんばる子」の具現化を図るため、以下のねらいで学校研究に取り組んだ。

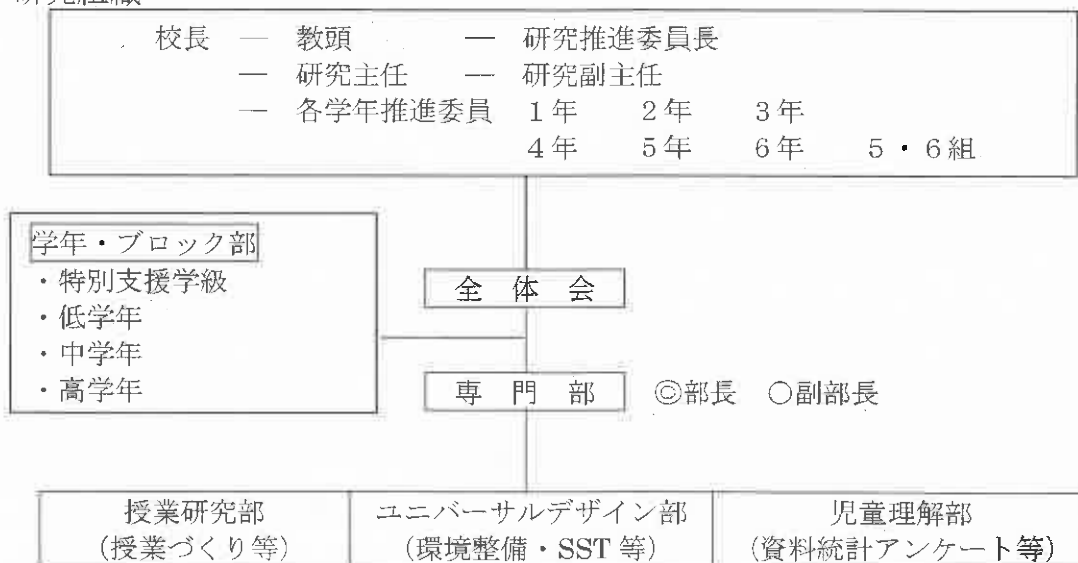
- ① ユニバーサルデザインと児童理解を生かした算数科の授業実践を通して、基礎・基本的な学力を身につけ、意欲的に学習に取り組む子の育成を図る。
- ② 自ら活動に見通しをもち、生き活きと学校生活に取り組む子の育成を図り、すべての児童が安心して過ごしやすい学級経営を目指す。

(2) 研究主題設定理由

平成28年度より特別支援教育の視点に立った学校研究を実施してきた。1年間の研究を通して、改めて通常学級においても特別支援教育の視点の必要性を感じることができ、各ブロックの研究授業や専門部の取り組みにより、「ユニバーサルデザイン」と「児童理解」をより意識し、指導・支援にあたることができた。しかし、昨年度は、様々な教科での研究授業を行ってきたため、教科を絞っての取り組みや指導・支援の視点を絞って取り組みを進めることによって、さらに研究が深まると考えられた。

よって今年度は、教科を絞り、より「ユニバーサルデザイン」と「児童理解」を生かして学校研究を深め、積極的な特別支援教育の実践を図った。

(3) 研究組織



2 研究の内容

学校教育目標

〈心をこめて〉考える子・仲よくする子・がんばる子

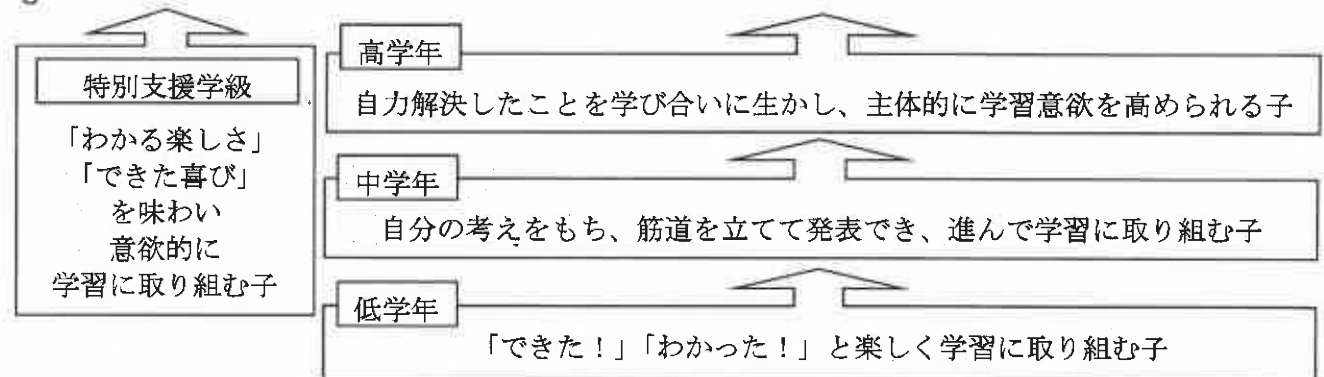
研究主題

「すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくり」

～ユニバーサルデザインと児童理解を生かした算数科の授業を通して～

目指す児童像

「自ら活動に見通しをもち、生き活きと学校生活に取り組む子」



仮説1	仮説2	仮説3
【情緒面からの視点】 落ち着いた環境	【学習面からの視点】 わかりやすい授業	【学級経営面からの視点】 明るく元気な心
ユニバーサルデザインを生かした教室や学校の環境を整えれば、児童の心理的な安定を図ることができ、安心して学校生活を送ることができるであろう。	児童理解を生かした声かけや指導法を基に学習環境及び教材教具の工夫・整備をした授業を行えば、児童の基礎・基本的な学力が身につく、意欲的に学習に取り組むことができるであろう。	児童理解を生かした学級経営をすれば、一人一人の違いを認め合える学級となり、すべての児童にとって安心できる学級となるであろう。

【ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり12のポイント】

1 場の構造化	7 板書の工夫
2 刺激への配慮	8 集中・注目のさせ方
3 ルールの確立	9 指示の出し方
4 生活の見通し	10 参加の促進
5 授業の見通し	11 個人差への配慮
6 授業の組み立て	12 学級モラルの形成

3 実践事例

(1) 講義 4月24日(月)

演題 「すべての児童が安心して過ごしやすい学級づくり」

講師：川越市立特別支援学校 吉野和仁校長先生

① 昨年度の学校研究で効果的だった支援をもとに、

意識は「授業」「学習」から「学級経営」へ。

② 一人一人を大切に学級経営

ア、丁寧な児童理解（教員ができるアセスメントを行う。）

イ、学級ルールの明確化（引き続き、実践を続けていく。）

ウ、肯定的な働きかけ（リフレミングの意識を高める。）

エ、失敗への対応（特別扱いせずさりげなく、そして適確に支援を行う。）





オ、支え合える学級（ア～エを積み重ね、支え合える学級を目指す。）



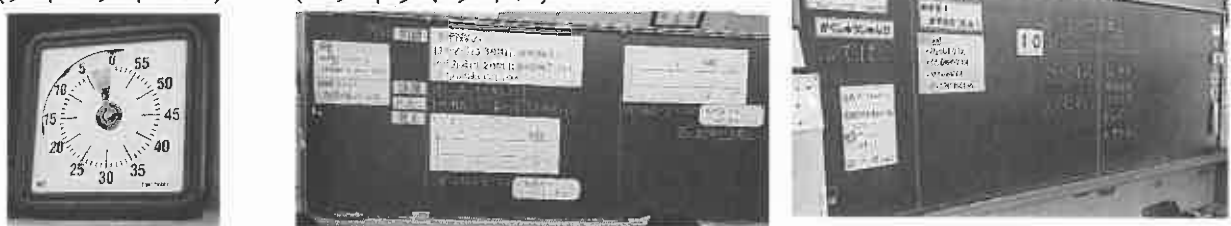


(2) 専門部の活動

	〈授業研究部〉	〈ユニバーサルデザイン部〉	〈児童理解部〉
具体的な活動内容	①指導案形式 ・学校研究との関わり ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり12のポイント(番号・仮説・手立て等、どこに位置づけているか) ②前時のまとめ掲示物提案作成 ③学習過程の札づくり提案作成 ④ノート名人の成果と課題 ⑤研究協議の仕方(12のポイント活用) ⑥系統性の活用検討(指導ポイントの提案・キーワード等)	①教室環境(席・グループ) ②生活の見通し(1日・授業) ・ホワイトボードの活用等 ③集中・注目マークづくり ④支える学級→教え合い(グループなど) ⑤失敗への対応(ロールプレイ・ソーシャルスキルトレーニング)→ハートタイムを活用できないか(学期1回、日時・内容等提案) ⑥校内研修(指導者依頼)	①算数の児童意識調査 ・6月…児童の実態をつかむ ・11月…児童の意識の変化 ②昨年度の教師の実態からまだ必要なことについて ・ユニバーサルデザイン7つの視点から項目を選び実施 ③わかりやすい授業のための手立てがどのように児童にいきているか、単元毎にアンケートの実施
成果(成果)と課題	◇昨年度の取り組みから指導案の形式やノート名人などの具体的な指導・支援へとつながることができた。 ◇グループ協議が授業の重点内容と直結している形式になり、どの協議でも効果的だった指導や支援の手立て・課題等を具体的に協議し合うことができた。 ◆ユニバーサルデザインへの取り組みに差が見られるため、校内全体で意識化し、取り組める実践を考えていく必要がある。 ◆算数の系統表を作成し、学年間のつながりやつまずきにも対応できるようにしていきたい。	◇ソーシャルスキルトレーニングを通して、子どもたちのつまずきに気づき、言葉かけや支援の手立てを考えることができた。 ◇教室環境を整えることで、子どもたちの集中力を高めることができ、学習意欲につながった。また、わかりやすく示すことで、安心して生活が送れるようになった。 ◇児童理解を深め、個別支援に取り組んだ。複数種類のワークシートやヒントコーナーを活用したことで、意欲的に取り組む児童が増えた。 ◆ソーシャルスキルトレーニングを継続的に進めるように計画を立てていく必要がある。	◇アンケートをもとに、算数に対する意識調査を実施したことで、児童の実態をつかむことができた。 ◇アンケートを2回実施したことで、児童の意識の変化も見られ、成果と課題をつかむことができた。 ◆アンケート実施により、発表に対する苦手意識が見られたため、発表に対しての手立てをより具体的に考えていく必要がある。

(3) 研究授業

<p>7月5日(木) 特別支援学級(自閉症・情緒障害学級5組) 教科別の指導 算数科 題材名 算数の達人になろう(数と計算) 〈授業をみる視点〉「わかる楽しさ」「できた喜び」を味わい、意欲的に学習に取り組む子 →ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり12のポイントすべてに取り組み、特に下記3つのことに重点をおき、授業を実践した。</p>	
<p>重点項目</p> <p>⑤授業の見通し(視覚支援による見通し) ⑥授業の組み立て(場の設定) ⑪個人差への配慮(個に合わせた教材・教具の工夫)</p>	<p>研究授業を通して、特に効果的だった具体的な手立て</p> <p>①場の構造化 ⑤授業の見通し ⑥授業の組み立て ⑪個人差への配慮 ⑫学級モラルの形成</p>  
<p>→この授業を受け、低学年の授業研究から、重点とする項目ポイントを3つ程度挙げ、実践していくこととなった。</p>	
<p>9月21日(木) 低学年ブロック(1年3組) 単元名 たしざん 〈授業をみる視点〉「できた!」「わかった!」と楽しく学習に取り組む子</p>	
<p>重点項目</p> <p>③ルールの確立 ⑤授業の見通し ⑪個人差への配慮</p>	<p>研究授業を通して、特に効果的だった具体的な手立て</p> <p>③ルールの確立 ⑤授業の見通し ⑦板書の工夫 ⑪個人差への配慮</p>  

<p>10月19日(木) 中学年ブロック(3年1組) TT学習 単元名 はしたの大きさの表し方を考えよう (授業をみる視点) 「考えをもつことができた!」「考えを発表することができた!」と楽しく学習に取り組む子</p>	
<p>重点項目</p> <p>①場の構造化 ④授業の組み立て ⑪個人差への配慮</p>	<p>研究授業を通して、特に効果的だった具体的な手立て</p> <p>①場の構造化 ⑪個人差への配慮 ⑫学級モラルの形成</p> 
<p>11月9日(木) 高学年ブロック(6年2組) 少人数基礎コース 習熟度別学習コース 学年公開 単元名 速さの表し方を考えよう (授業をみる視点) 「個に応じた手立てが自力解決に効果的であるか」「手立てをもとに意欲的に学習に取り組んでいるか」</p>	
<p>重点項目</p> <p>⑩参加の促進 ⑪個人差への配慮</p>	<p>研究授業を通して、特に効果的だった具体的な手立て</p> <p>⑦板書の工夫 ⑩参加の促進 ⑪個人差への配慮</p> 
<p>研究授業の実践を生かして、学校全体で取り組み始めたこと (タイムタイマー) (マグネットライン)</p> 	

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり12のポイント」や「児童理解」を意識して研究授業を実践したことで、【特別支援教育】の視点に立った算数科の授業を行うことができた。
- ・学校全体でソーシャルスキルトレーニングに取り組み始め、全学級でタイムタイマー、マグネットラインを活用した授業を展開することができるようになった。
- ・特別支援学級やブロック別に目指す児童像を掲げたことで、より実態に合わせた具体的な手立てを検討し、研究授業を実践することができた。

(2) 課題

- ・研究主題に迫る研究授業を実現するためには、さらに児童理解を深め、多様なニーズに応じた支援や配慮を行い、実践していく必要がある。
- ・ユニバーサルデザインへの取り組み意識に差が見られるため、学校全体で共通意識をもって取り組んでいく必要がある。また、タイムタイマーのように校内で共通して取り組んでいく具体的な手立てを検討していきたい。
- ・TT学習指導や少人数、習熟度別学習の効果的な指導方法について、特別支援教育の視点を取り入れながら、さらに研究を進めていきたい。



「児童一人一人が楽しく、わかる、 できる算数科の授業づくり」

～自分の考えをもち 伝え合う児童をめざして～

川越市立高階北小学校

- 基礎学力の向上
- 学ぶ意欲の向上
- 伝え合う力を伸ばす工夫
- 家庭学習と学習習慣の定着



1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校の算数科における児童の実態として、「各学力調査において、埼玉県や川越市の平均よりも本校の平均が、下回っている領域が多い。」「個人の学習意欲や学力差が激しい。」「計算はできるが、活用問題（文章問題等）が、苦手」というところあげられる。児童に意欲的に学習し、自分の考えをもち、伝え合う力を育てていきたい。そのために、全ての児童の関心・意欲を高め、伝え合う力を育てる、児童が主体の授業の実践に努めていく。

(2) 研究主題設定理由

算数科の学習で学んだことを他の場面で活用できていない現状がある。そこで、多様な学びの場を設定し、児童の思考力を高めるような指導・支援に工夫をしていけば、児童の学力が向上し、自信や意欲をもてると考えた。

また、本年度の県の学力学習状況調査の結果で、学力の伸びた児童の割合が、高かった。しかし、個人差が大きく、対応に悩む教師や練り上げ方、授業のまとめ方が、わからない教師もいた。そのようなことから、児童自ら伝え合い、学び合う力を育成していきたいと考え本主題を設定した。

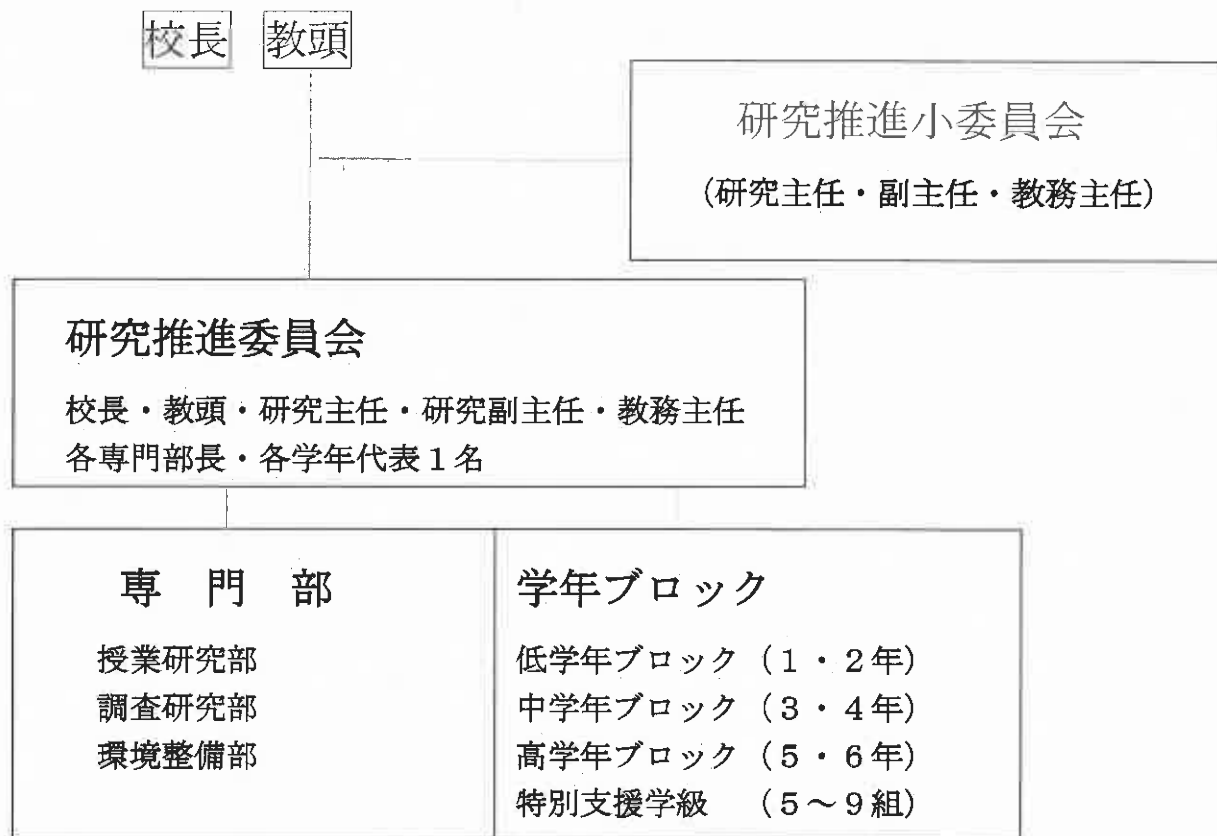


<小集団指導：1年生>



<自分の考えを伝え合う：1年生>

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 基礎学力の向上

- ・授業の開始5分を「ぐんぐんタイム」とし、基本的な計算等の反復学習
- ・個々の基礎学力の向上のため、扱う問題の内容や数量等について教材研究

(2) 学ぶ意欲の向上

- ・学ぶ意欲や学力の個人差に対応するため、3年生から習熟度別学習を導入
- ・少人数指導の教員と連絡を密にし、レディネステストを実施し児童の実態を把握し、指導支援計画を作成

(3) 伝え合う力を伸ばす工夫

- ・自力解決の時間のあり方や小集団指導の方法や算数コーナーなどの環境の整備
- ・今年度は児童同士で自分の考えを伝えるところに重点を置きペア学習、グループ学習の効果的なあり方を研究

(4) 家庭学習と学習習慣の定着

- ・学習したことを覚えていられるよう、家庭との連携及び家庭学習の課題の与え方の研究

3 実践事例

【第6学年の実践】平成29年11月22日(水)

<習熟度別コース>

☆①卑弥呼コース 計38名
☆③織田信長コース 計29名

☆②聖徳太子コース 計35名
☆④坂本龍馬コース 計14名

<単元名> 比例をくわしく調べよう（比例と反比例）

<研究仮説とのかかわり>

研究テーマ	児童一人一人が楽しく、わかる、できる算数科の授業づくり 自分の考えをもち、伝え合う児童を目指して
-------	---

仮説	I 一人一人に応じた指導をすることによって基礎学力を向上させることができるであろう。	II 振り返り検討する活動を充実させることで数学的表現を用いて説明することができるであろう。
手立て	<p>① 習熟度別少人数指導を行うことで、児童一人一人の実態に応じた指導を行い、「わかる」「できる」をめざす。</p> <p>② ぐんぐんタイムを毎授業の開始 5 分間を行うことで、既習事項の確認を行い、基礎基本の確実な定着を図る。</p> <p>③ 単元の内容を確認し、自作のレディネステストの作成をし、結果をコース分けに活かす。</p> <p>④ 児童の理解度によって、自力解決時の考え方に応じた支援計画を立てておき、児童の「できる」を目指す。</p>	<p>① 「いつでも・ちがいは・にているところは・よさ・わけ」の視点をもって学び合うことができるように「い・ち・に・わ・よ」カードを提示し話合いの視点を明確にして考えを深めることをめざす。</p> <p>② 自力解決の時間を確保するとともに、その後ペアやグループで話合いをしてから全体での話合いを行うことで、考え方を共有し、自分の考えの広がりや深まりをめざす。</p> <p>③ 自力解決が難しい児童については、ヒントコーナーや振り返りコーナーで友達や教師と一緒に考えるコーナーを設け、そこで話し合うことで、自分なりの考えをもてるようにし友達や教師の言葉をヒントに考えを引き出すようにすることをめざす。</p> <p>④ 授業の振り返りをノートに記入する。</p>

<各コースにおける本時の問題>

※6年生では、4つの習熟の程度に応じたコースを設定し、目標、評価規準、研究仮説との関わりは同一にして、本時の問題と学び方を児童の実態に合わせた。

(卑弥呼コース)

<問題>

画用紙300枚を、全部数えないで用意する方法を考えましょう。

(聖徳太子コース)

<問題>

箱にみかんが2.5kg入っています。
箱の中には、みかんが何個入っているでしょう。



<授業後の研究協議>



<算数コーナー>

(織田信長コース)

<問題>

ふくろの中にくぎが1kg入っています。何本入っているでしょうか。



<授業風景：6年>

(坂本龍馬コース)

<問題>

この袋にはエコキャップが2000g入っています。では、エコキャップは全部で何個が入っているでしょう。



<授業風景：3年生>

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・自力解決の時間を十分にとることやヒントカードをたくさん用意することで、自分の意見を表現することが出来るようになってきた。
- ・ペア学習などの話し合いの形を徹底することで、問題解決型の発表の仕方の基礎が身についてきた。
- ・毎時間の最初に設けた「ぐんぐんタイム」を行ったことで、計算力が向上してきた。
- ・3年生から習熟度別学習を取り入れたことで、きめ細かな指導が行えるようになった。

(2) 課題

- ・間違いを指摘せず、そのまま流してしまったり、ただの発表会になったりすることがないように、意図、ねらいに合ったペア学習のすすめ方の工夫が必要である。
- ・多様な児童の考えをどう練り上げていくか、個人内の練り上げから全体の練り上げに深めていく指導の工夫が課題である。
- ・児童の実態に応じたコース別学習の指導計画の作成が求められる。
- ・全国学力学習状況調査及び埼玉県学力学習状況調査等の問題においても課題となった長い文章問題に慣れさせる。
- ・コース別学習を行う上で、各コースごとの小集団指導の充実が必要である。

「主体的・対話的な学びによる授業改善」

川越市立霞ヶ関小学校

研究のポイント

昨年度までの研究を引き継ぎ、さらに発展させる。

- 主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を行うことにより、学びに向かう力、生きて働く知識・技能の習得、未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成を図る。
- 学習集団や学習方法、家庭学習・学習環境を整備することにより、学習意欲を喚起し、学習内容の定着を図る。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

算数の授業を中心として、主体的・対話的で深い学びの視点から授業を改善していくこととした。

(2) 研究主題設定理由

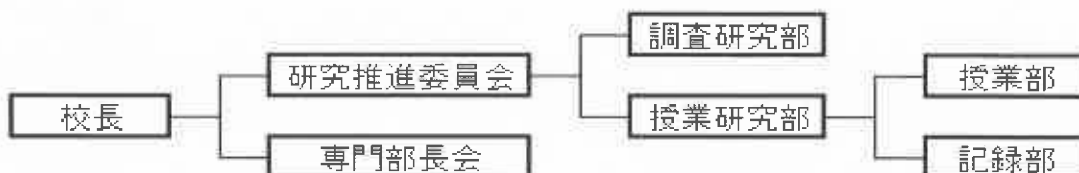
本校は25・26年度に、研究主題「わかる喜び、できる楽しさを味わい、自ら学ぶ子の育成」、副題に「学びあい、高めあう理科・生活科の授業を通して」として、委嘱学校研究に取り組み、研究の過程において、学習したことや自分の考えを表現する（アウトプット）の重要性が浮かび上がった。

27・28年度は、研究主題「学び合い、高め合う授業の創造」、副題に「アクティブ・ラーニングを取り入れた算数学習」として委嘱学校研究に取り組んだ。その成果として、①「課題設定の工夫」、「ふりかえり」が主体的な学びに効果的であること。②「対話的な学び」を取り入れることで、思考のアウトプットや学び直しが必要となり、それが深い学びにつながること。③KasumiStyle（本校の算数授業の学習過程）が、課題や発達段階、コース別などによってどんな学習過程をとれば良いのか。が次第に明らかになってきた。

また、次期学習指導要領では、授業改善の視点（主体的・対話的で深い学びの視点）からの学習過程の改善が重要視された。

そこで、本年度は、昨年度までの研究を引き継ぎ、算数科を中心として「主体的・対話的で深い学びの視点」から授業を改善することを柱として研究を進めた。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 全体構想

学校教育目標
かしこい子 すこやかな子 みりよくある子

研究主題
主体的・対話的な学びによる授業改善

目指す児童像

	主体的な学び	対話的な学び	深い学び
低学年	・目を輝かせて、生き生きと活動する。	・友だちの意見をしっかりと聞く。 ・自分の考えをしっかりと発表する。	・自分の考えを見直し、修正する。 ・学んだことを整理して友だちに話す。
中学年	・見通しを持って取り組む。 ・自ら課題を見つける。 ・粘り強く課題に取り組む。 ・課題に進んで取り組む	・自分の考えと比較しながら友だちの考えを聞く。 ・自分の考えをいろいろな方法で伝える。 ・資料や大人から、適切な情報を受け取る。	・自他の意見を検討し、よりよい考えを生み出す。 ・学んだことを別の場面で生かす。
高学年	・解決したことから新たな課題を生み出す。 ・自らの学びをふりかえり、次への意欲を持つ。	・視点に沿った話し合いをする。 ・対話を通して課題解決のために適切な考えを創り出す。 ・自分たちの考えや調べた情報を発信する。	・教科の特質に応じた「見方・考え方」を働かせて、より深い理解に到達する。 ・学んだことを応用・深化させて活用する。

仮説 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことによって、質の高い学びが実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力が身につくであろう。

<研究の視点>

- ◆問題解決的な学習過程 ◆適切な課題設定 ◆視点を明確にした対話的活動
- ◆ふりかえりによる学びの手ごたえ



(2) KasumiStyle (本校の算数科における学習過程)

Kasumi Style	A	B	C	D	E
展開の指針	適用問題で 自力解決の力を つける	自力解決の力を持つ			学び合いを 充実させる
課題を つかむ	全体	全体	全体	全体	全体
見通す	全体	全体	全体	全体	全体
自力解決	グループや 全体で協力 して問題を 解決	個人	個人	個人	個人
集団解決	全体に発表 全体で 練り上げ	グループで発 表 練り上げ1 全体に発表 全体で練り 上げ2	グループで発 表 練り上げ1 全体に発表 グループで 練り上げ2	全体に発表 (練り上げ1) グループで 練り上げ2	グループで発 表 ↓ 練り上げ1 ↓ まとめ
まとめ	全体	全体	全体	全体	全体で確認
適用問題	個人	個人	個人	個人	個人
ふりかえり	個人	個人	個人	個人	個人

3 実践事例

- (1) 学年・教科 第1学年 算数
- (2) 単元名 たし算 (1位数どうしの繰り上がりのある加法計算)
- (3) 研究主題との関わり<おもな手立て>

◆主体的な学習をうながす課題設定

- ・児童に身近な場面を設定する。
- ・ブロックを操作して、安心して自分の考えを表せるようにする。
- ・自分の考えをもてない児童には、個別に声かけをし、必ず自分でブロックを動かすようにする。

◆視点を明確にした対話的活動

- ・ペアの友達の前で発表の仕方に沿ってブロックを動かし、自分の考えを伝える。
- ・ペアの友達の動かし方と自分の動かし方の相違に気づくようにする。

- (4) 本時の学習指導 (6 / 13)

① 目標

- ・被加数、加数の大小に関係なく、10のまとまりをつくることに着目して計算の仕方を考え、言葉やブロック操作などによって説明している。【数学的な考え方】

② 展開

KasumiStyle B		学習活動
課題をつかむ	全体	課題 3 + 9 の けいさんのしかたを かんがえよう。
見通す	全体	T: 何を使って考えますか。 C: ブロック、まる図、さくらんぼ
自力解決	個人	C1 ブロックで C2 図で C3 さくらんぼ図で
集団解決	グループで発表 練り上げ1	● ペアで考えを伝える・聞く。同じところ、違うところを探す。 話し合いの視点 ブロックのどこを動かしたか。
	全体に発表	● 自分の考えを伝える・聞く。 ● 話し合いの視点にそって考えをまとめ、ホワイトボードに書く。
	全体で練り上げ2	● 自分の考えと同じところ、違うところを発表する。 ● 友達のよいところを探す。 話し合いの視点 被加数、加数のどちらを分解しているか。
まとめ	全体	3 + 9 のけいさんのしかたは2つある。 まえとうしろのどちらを10のまとまりにしてもいい。
適用問題	個人	3 + 8 のけいさんのしかたをたしかめましょう。
ふりかえり	個人	T: 今日の授業を振り返ってみましょう。 C: 各自振り返る。

4 成果と課題

(1) 成果

- ◎本校の学習過程（KasumiStyle）は、課題や児童の実態に合わせてフレキシブルに変化させることが特徴であるが、今年度はさらに細分化し、精緻化した KasumiStyle が実現できた。
- ◎課題の工夫や振り返りの重視により、主体的な学習を実現することができた。
- ◎算数だけではなく、様々な教科、場面で「対話的な活動」を取り入れることにより、児童の練度が上がり、自然な形で深い話し合いができるようになってきた。
- ◎特別支援学級においても、スモールステップの指導や教師との対話を通して、主体的・対話的な学びが実現できた。
- ◎学校研究の取組により、児童の学力の向上が見られた。（【例】入間学力テスト、平成27年度は入間平均に対してマイナス4.6ポイント→平成28年度はプラス0.5ポイント、平成29年度はプラス0.8ポイントに向上）

(2) 課題

- ▲グループ活動時、個々のグループへ十分な支援を行うための方策の開発が必要である。
- ▲児童の話合いや発表の技術は向上してきているが、ホワイトボードの使い方など、さらなる向上が望まれる。

研究のポイント

「チーム寺尾の底力」3つのP（誇り、情熱、期待）の向上

- ① これからの時代に必要となる資質・能力の育成
- ② 5つのプロジェクトチームによる研究と取組
- ③ 授業の工夫改善を目指した「1人1研究授業」を行う

1 研究の概要

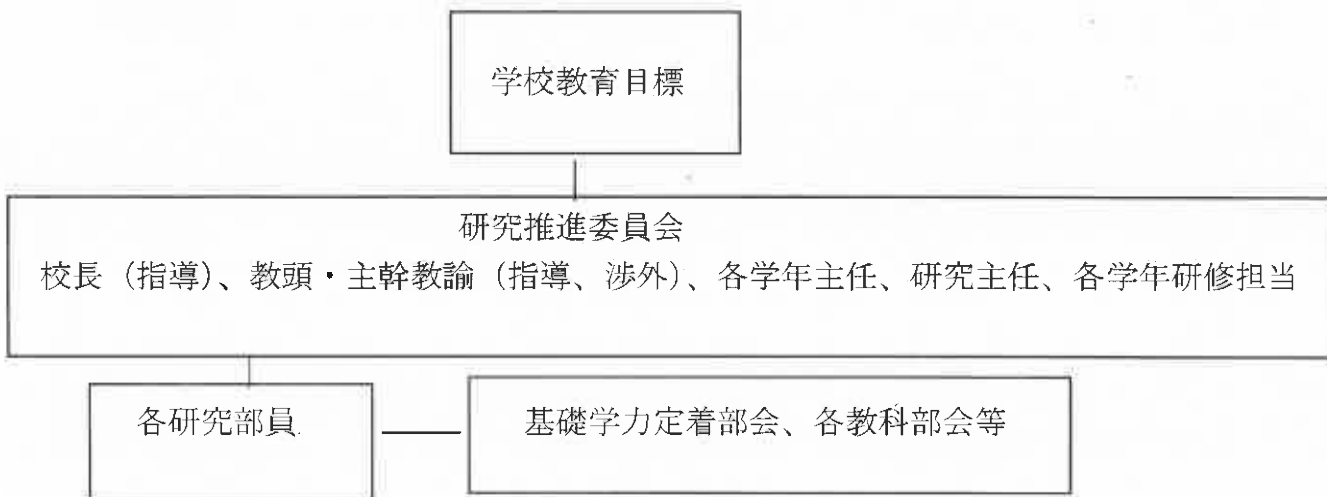
① 研究のねらい

これまでに本校で実践してきた教育活動を、研究主題「主体的・対話的で深い学びの実現」という視点に立ってさらに発展させ、学校教育目標の具現化を図る。

② 研究主題設定理由

昨年度のプロジェクトチームを中心とした取り組みにより、生徒の自尊感情の醸成や家庭学習の定着において、一定の成果をみる事ができた。しかし、校内アンケートの結果によると、全校で約27%の生徒が自分の授業態度に何らかの課題があると感じていることがわかった。また、家庭学習の「質」に関して、生徒間に開きがみられることは事実である。また、すすんで挨拶のできる生徒が少ないことも本校の課題の1つであると考えます。そして、寺尾中学校の伝統である「洗心無言清掃」についても、現在の清掃をさらに進化・発展させていくためには手段を講じる必要がある。生徒の学力を向上させ、これまでに研修を重ねている「アクティブ・ラーニング」などの手法を取り入れた授業についての研究を行い、地域に愛され信頼され期待される学校を目指して、全職員が、「P3Cチーム寺尾」として取り組む。

③ 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究テーマの決定

- ① コミュニケーション能力を高める授業の工夫
- ② 豊かな感性を培う発問の工夫
- ③ 授業に主体的に取り組む意欲の醸成
- ④ 多様性を尊重する態度の育成

(2) アクティブ・ラーニングに関する校内研修 平成29年11月1日(水)

指導者：北原延晃先生

(3) 5領域 プロジェクト会議

3 実践事例 ～各部会の実践～

(1) 学力Ⅰ

- ① 家庭学習ノートの表彰を学校朝会で行う
- ② 未提出者への対応を検討する
- ③ 校内基礎学力テスト(てらりんぴっく)を発展させる
- ④ 成果と課題、来年度の本発表に向けて

ア. てらりんぴっくについて

- ・年間行事計画に明示する(問題提示日も)
- ・問題提示日は10日前を目安に、問題を配布する
- ・再テストの日程は各学年裁量とする
- ・年度当初のガイダンスで年間2回行うことや、満点者が通知票に載ること等、周知する

イ. 家庭学習ノートについて

- ・内容のすぐれているものを各クラス5人選び 全校表彰を行う
- ・新年度からプリントや別のノートのページを貼らせないようにするが、学習の苦手な生徒には「てらこやプリント」を取り組ませ、ノートに貼らせる
- ・埼玉県学力・学習状況調査「復習シート」やコバトン問題集等も活用する
- ・啓発活動 学級委員会の取組掲示物作成等

(2) 学力Ⅱ

- ① 「1人1研究授業」アクティブ・ラーニングなどの手法を取り入れた授業を行う
県学調などの結果を利用しながら、生徒の伸びなどの効果を具体的にみていく
- ② グループ活動の研究
- ③ 授業の様子を記録する
- ④ 机の形態を工夫する
- ⑤ 成果と課題、来年度の本発表に向けて

ア. 4月当初の職員会議で、川越市小・中学校学力向上プランについて学力Ⅱのプロジェクトチームメンバーが中心となり全体に内容の確認を行う

イ. 川越市小・中学校学力向上プランの内容について職員室、ランチルーム、印刷室の3カ所に学力Ⅱのプロジェクトチームメンバーで掲示を行う

- ウ. 年間計画では学期に1回しか教科部会が設定されていないが、教科主任を中心に各教科で時間をとり、授業改善や工夫について話し合う
- エ. 2ヵ月に1回の頻度で、校内研修中の短時間で、ミニ教科部会を開き授業内での生徒の現状を踏まえ、学力向上や授業改善、評価について話し合う
- オ. 校内研修の中で授業研を継続して行う
- カ. 夏休み中に外部講師の方をお呼びし、校内研修を行う(講師の選定については、次年度の校内研修のテーマに沿って決定する)
- キ. アクティブ・ラーニングを取り入れた公開授業を年に1～2回は行う

(3) 清掃

- ① 清掃マニュアルの再点検
- ② アンケートの実施
- ③ 清掃講演会 平成30年3月8日 石坂産業専務取締役 石坂知子氏
- ④ 縦割り清掃の拡大に向けた話し合い
- ⑤ 成果と課題、来年度の本発表に向けて
 - ア. 年度当初の職員会議で提示するマニュアルを、もう少し詳しく説明等が記載されたものにする
 - イ. 年度当初の職員会議での説明する時間に加え、デモンストレーションを行い、実際に教職員が体験する
 - ウ. 時間を確保し、研修する ※職員会議で説明を行った日の午後、約1時間
 - エ. 夏季休業中の校内研修で、洗心無言清掃に関する意見交換(質疑応答)ができる時間を作る
 - オ. 縦割り清掃班での洗心無言清掃を行う
 - カ. 清掃のプロフェッショナルによる講演会を実施する

(4) 豊かな心

- ① あいさつについての重要性を考える
 - ア. 学活の時間に一斉に「あいさつ」について話し合わせる
 - イ. 話し合った結果を生徒会長に提出する
 - ウ. 生徒会から中央委員会に提案(課題、改善策など)
 - エ. 中央委員会からクラス・部活動・委員会等へ伝達、話し合い
 - オ. 生徒朝会で、生徒会長等が中心にまとめ伝える
- ② 成果と課題、来年度の本発表に向けて
 - ア. あいさつ (心の教育の深化のため)
 - イ. 挨拶運動の時・場所を変えてみる
 - ウ. 以前挨拶運動の際に使用していた旗を使用する
 - エ. 生徒会を中心に、生徒に挨拶について考えさせる機会を設ける
 - オ. 挨拶の重要性について再度伝える
 - カ. 道徳の年間指導計画の中に、各学期の中に1回程度、挨拶に関連した項目を扱い、挨拶の意識を高める

- キ. 教員の挨拶に関する意識をもっと高める。生徒の模範となるようにする
- ク. 部活動で、実際に社会に出て役に立つ挨拶の意識を高めるように、顧問から呼びかけしてもらう

(5) 家庭地域連携

① これまでの取組

ア. 文化体験講座、卒業生に学ぶ会、小学校への夏休み学習支援、赤ちゃんボランティア、読み聞かせ、バザー、PTA トイレ清掃および花植え、保育実習、地区パトロール、てらおフェスティバル、など

② 新たな取組

ア. 寺尾中地域清掃の実施

実施日：平成29年10月12日（木）中間テスト2日目

流れ：グラウンドに整列後、学級単位でそれぞれの持ち場へ移動

内容：6種類のゴミ（燃えるゴミ・プラスチック・ペットボトル・スチール缶・アルミ缶・瓶）を各班に割り振り、拾ってくる

改善点：集合方法、支給品（袋・トング等）の確保、清掃時間の確保、分別方法等

③ 成果と課題、来年度の本発表に向けて

ア. 生徒が校外に出てボランティアを行う

イ. 学習支援ボランティアを地域の方にお願ひし、教室には入れない生徒対象に学習などを見ていただく

4 研究の成果と課題

(1) 成果 ～心のアンケートから～

「学校が楽しい」と感じている生徒の割合は、第1回（5月15日実施）89.9%、第2回（7月3日実施）87.8%、第3回（10月30日実施）88.7%、第4回（12月1日実施）87.7%、第5回（1月19日実施）84.6%となった。「学校は誰もが安心して楽しく生活できる場なくてはならない」という理念のもと、生徒が生き生きと活動し、生徒、保護者、地域から愛され信頼され期待される学校の実現を目指し、P3Cチーム寺尾として教育活動を展開していく。

(2) 課題 ～学校生活振り返りアンケートから～

本校の伝統である洗心無言清掃への意識や規範意識が高く、エチケット、マナー、ルールを意識、実行できる学級、学年集団となり、充実した学校生活を送れている等、「気づき、考え、実行する 心豊かな生徒」という学校教育目標に迫っている姿が今年度もデータに現れているが、少人数指導、授業態度、道徳の時間に課題があり、良いところである本校の強みをさらに伸ばしつつ課題を解決するための次年度の新たな取組を検討している。「P3Cチーム寺尾」として、学校教育目標や目指す生徒像の具現化に全力で邁進する所存である。

研究主題

「授業規律を確立して学習意欲を高め、意欲的に学校生活に取り組む生徒の育成」
－「授業の約束 10」を中心とした学校づくり－【1 年次】

川越市立砂中学校

研究のポイント

- 本校のこれまでの取組を「体系化・組織化」する事で、継続的な『学校づくり』を目指した研究です。
- 「規律」「学力」「自己有用感」というキーワードを基に、様々な実践を行います。
- 授業規律の確立を目指した、「授業の約束 10」と「授業規律を高める教師心得」は、生徒と教員が共に『目に見える形』で意識するための実践であり、研究の土台です。
- 「学習研究部」「心の教育研究部」「伝統創造研究部」という 3 つの研究部会を組織して研究を進めています。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究は、生徒一人一人が砂中学校の生徒であることに誇りを持ち、目指す学校像である「笑顔と活力に満ち溢れ、互いに響き合う学校」を具現化し、継続的な学校づくりを行うために、本校のこれまでの様々な取組を体系化・組織化することをねらいとしている 2 年間の学校研究である。

以下に具体的なねらいを示す。

- 授業規律をはじめ学校生活における「規律」を高めることによって、生徒の学習意欲を喚起して自己向上意欲を高揚させる。
- 教育課程や指導方法の工夫改善を図ることによって、「学力」を向上させる。
- 学校における様々な取組の内容を充実させることによって、生徒の意欲と、他者から認められることで得られる「自己有用感」を高め、自信を深めさせる。

上記の、「規律」「学力」「自己有用感」という 3 つのキーワードを柱にしたねらいを実現させるために、具体的な実践を重ね研究を進めている。

(2) 研究主題設定理由

砂中学校は昭和 56 年 4 月 1 日に開校し、本年は開校 37 年目を迎える学校である。校舎の周囲には田園地帯が広がり、のどかな風景の中で落ち着いて授業や部活動に取り組める環境にある。しかしながら、数年前まで生徒が落ち着かず、問題行動が頻発して、授業規律も定着していない状態であった。

そこで、本校に進学してくる小学校と連携して、授業規律の確立に努め、学力の向上を図り、さらに魅力ある学校行事や様々な取組を創り上げることによって、意欲的に学校生活に取り組む生徒の育成を目指し、研究主題を設定した。

① 生徒の実態と課題

本校は、高階小、牛子小、仙波小の 3 校から生徒が入学し、平成 29 年度からの 3 年間は、通常学級 15、特別支援学級 2、合計 17 学級で構成される。素直で実直な生徒が多く、学校生活にも一生懸命取り組むが、反面、受け身の部分も多くみられ、積極性を欠く場面もある。また、学習に対する自信のなさから、元来もっている力から期待される到達点に達することができない場合も見受けられる。

② 研究仮説

ア 教職員が共通理解した授業規律を示して生徒に周知するとともに、教職員自身

も自らの授業に臨む姿勢を改善することによって、学習意欲が高まり、学習内容の理解も深まるであろう。

イ 各教科等の指導方法の工夫改善を図ることによって、授業が充実し、学習意欲が高まるであろう。

ウ 小中連携を推進することによって一貫した指導が可能になり、義務教育9年間を見通した生徒の育成ができるであろう。

③ 研究を支える根拠

本研究は、平成28年6月に提示された報告書、国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターによる「どのように策定・実施したら、『学校いじめ基本方針』が実効性のあるものになるのか？」を参考にしている。報告書における「2年間の研究からの、知見」では、【いじめが起きにくい学校づくり】について、以下のようにまとめられている。

ア いたずらにトラブルが起きたり、放置されたりしないような安心・安全な学校環境をつくること

- ・ 集団生活のルールが明確であること
- ・ その時々々に何を頑張ればよいのかが明確であること等

イ 子供は単に保護されるだけの受け身的な存在ではなく、自らも良くなりたい、頑張りたいと願う主体的な存在・認められた体験のある子供ほど、他の子供のことを認めたり、受け入れたりできる。

「規律・学力・自己有用感（じこゆうようかん）」（キーワード）

規 律：適度な「規律」のある学校は、子供に安心感を与えると同時に安全の確保にもつながる

学 力：学力を保障することで「社会的な免疫力」の低下を防ぐ

自己有用感：子供の自信となり少々のトラブルには負けない「社会的な免疫力」となる

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 学習（各教科・領域）について【学習研究部会】

- ① 「授業規律を高める教師心得」の徹底による授業規律の確立（小中連携）
- ② 「板書計画」の見直しによる授業改善
- ③ 「ノートの取り方指導」による学習内容の理解
- ④ 「主体的・対話的で深い学び」を充実させる指導方法の工夫改善
- ⑤ 「ICT」の活用による学習内容の理解の促進

⑥「補充学習」による学習格差の解消

(2) 心の教育について【心の教育研究部会】

- ①「道徳教育・人権教育」の推進（小中連携）…道徳公開研究授業の実施
- ②「心を育てる学校行事」の創造…体育祭・樗の木祭・合唱祭「砂中三祭」の実施

(3) 伝統の創造について【伝統創造研究部会】

- ①「授業の約束10」の定着による授業規律の確立
- ②「ノーチャイム」の徹底による自主性・自律性の伸長
- ③「無言清掃」の推進（小中連携）
- ④「自主学习ノート」を活用した家庭学習の推進（小中連携）
- ⑤「よさこい鳴子おどり・樗童（特設部）」の充実
- ⑥「校歌指導」の充実…作曲家荻久保和明先生（東邦音楽大学教授）による指導

(4) 研究成果の確認方法

- ①「授業の約束10」に関するアンケート：学期ごとに成果を確認する
- ②埼玉県学力・学習状況調査：個人の学力の変化を経年ではかる
- ③学校評価（生徒自己評価）
- ④「教研式 自己向上支援検査（SET）」
- ⑤「学校生活満足度尺度（QU）」

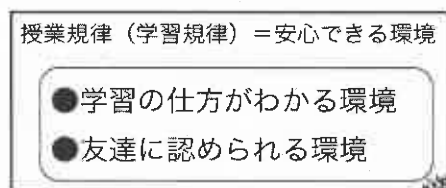
3 研究過程

(1) 理論研修

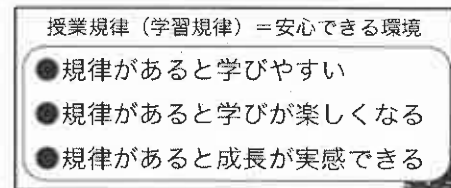
① 若手三喜雄先生（共栄大学教授）による講演

『砂中学校の学校研究と学力向上について』という演題の下に、学校研究の土台となる理論について講演していただいた。2030年の社会を見据えた「資質・能力」を中心とした新学習指導要領を着実に実践していくためには、「規律」の確立がもっとも大切であるということが確認でき、授業規律の定義が行えた。【図1】

また規律の確立による学力向上への効果について確認することができた。【図2】



【図1：授業規律の定義】



【図2：規律の学力向上への効果】

② 北篠博幸先生（日本教育カウンセラー協会）による講演

『QUの意義と読み取り・活用～「在る」学級集団から「創る」学級集団へ～』という演題の下に、毎年実施しているQUの活用方法について研修を深めることができた。特に学級集団の状態について、QUの分布パターン分析することで、本研究で目指す生徒（学級集団）の姿の確認に活用できることがわかった。

③ 黒沢奈生子先生（応用教育研究所）による講演

『SETの意義と読み取り・活用について』という演題の下に、本校生徒が実施したSETの結果をどのように見取り、指導に生かしていくのかを具体的に研修することができた。

(2) 研究推進委員による学校研究の構造化

本研究のねらいに迫るために、「規律」「学力」「自己有用感」というキーワードを基にした研究の構造化を行うことができた。【図3】

(3) 学力研究部会による取組

①板書計画の見直しによる授業改善

5教科を中心に、板書計画の見直しによる授業改善を目指し記録を行った。現状を把握し、目標やテーマの提示方法を改善していきたい。また、ユニバーサルデザイン化を意識し、前面黒板付近の掲示方法の統一化を目指したい。

②ノートの取り方指導

5教科を中心に、単元ごとのノートの振り返りを実施した。ノートの整理方法や効果的な使い方の指導を検討していく。またノートレス化の方向で行われる授業の方法等を記録し、全職員に紹介していくことを検討した。

(4) 心の教育研究部会による取組

①道徳研究授業の実施

10月6日に全校での道徳授業研究会を実施した。1学期より各学年で指導案検討を行い、夏季校内研修を経て、各学年1学級が研究授業を行った。指導者を3名(学年1名)招き、研究協議を通し、道徳の教科化を見据えた研修を行った。

②砂中三祭の実施(体育祭・樫の木祭・合唱祭)

(5) 伝統創造研究部会による取組

①「授業の約束10」による授業規律の確立

授業規律の確立を目指す方策として、校内・教師掲示などで視覚化を行った。学期毎に実施した生徒アンケートの結果を検証し、指導に生かした。【図4】

②「無言清掃」の推進

無言清掃の組織や取り組み方を整理して実施した。

③「自主学習ノート」による家庭学習の推進

自主学習ガイドを活用し、継続的な指導を行った。また、自主学習の内容の向上を目指して、見本となるノートの使い方などの校内掲示を行った。【図5】

④「よさこい鳴子おどり・樫童」による自己有用感の育成

今年度は249名の生徒が樫童に参加した。学級・委員会・部活動などとは違った所属感や充実感を得られる場として、生徒の自己有用感の育成を図ることができた。

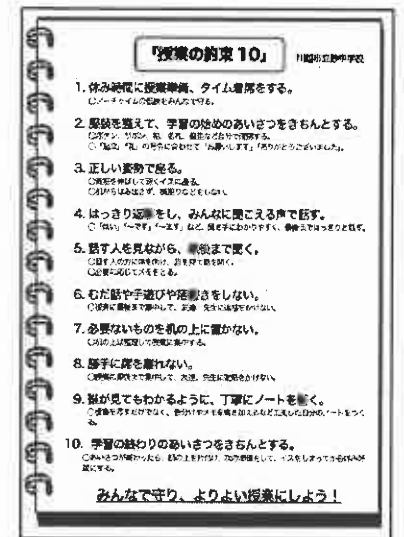
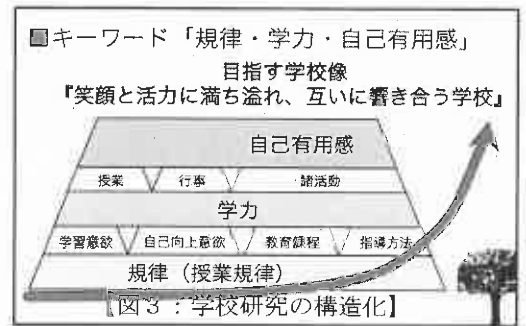
4 研究の成果と課題

【成果】

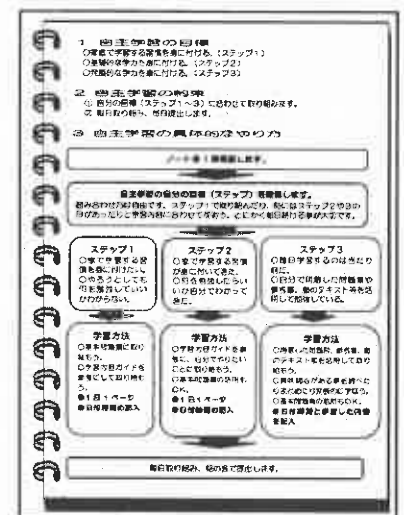
- 理論研究等の講演を重ね、研究を支える考え方への理解が深まった。
- 研究組織を活用して、2年次に向けた研究資料の整理・収集ができた。

【課題】

- 資料の整理・収集を生かし、より具体的な取り組みを実践すること。
- 生徒アンケートの結果を検証し、教科・学年・学級の指導に生かすこと。



【図4 授業の約束10】



【図5 自主学習ガイド】

研究主題

「自ら学び、互いを高め合うことのできる児童・生徒の育成 ～小中9年間の学びと育ちの連続性を重視した教育～」

学校名 福原小学校・福原中学校

研究のポイント

- 小・中の一貫性を重視し、共通の課題を設定した上での具体的な取組の実践
- 課題解決のための小中での情報交換や共通理解を図る効果的な合同研修の実施
- 課題解決のための小中で同一歩調の指導を構築する、教科・領域部会の運営
- 小学校の思い（学習面・生徒指導面の成果を中学校へ引き継ぎたい）を汲んだ中学校の思い（小学校の成果を前提にして、さらに伸ばしたい）への接続と発展

1 研究の概要

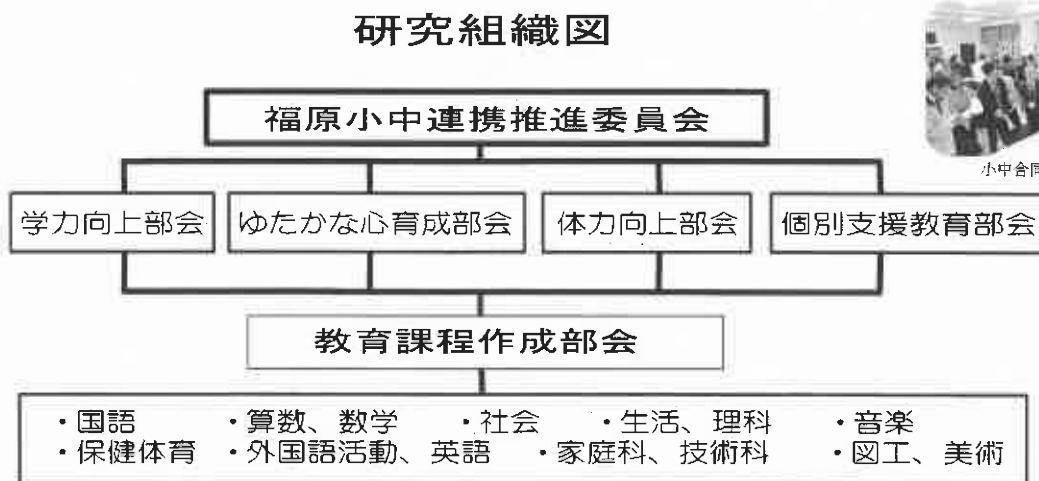
(1) 研究のねらい

良き伝統の中に流れる「友愛」の絆を大切にしたい。心広くおおらかな児童の育成を目指す福原小学校と、知・徳・体のバランスのとれた『生きる力』をもった生徒の育成を目指す福原中学校が、互いに、「かがやく子～友愛の絆を大切にし 志高く生きる ふくはらの子どもたち～」という共通の、目指す児童・生徒像を掲げ、小中学校9年間の学びを構築することで、小中の接続を円滑にする（中1ギャップの解消）とともに、確かな学力を身に付けていくため（学力向上）の教育課程のあり方を探る。

(2) 研究主題設定の理由

福原地区は、古くからの歴史があり、その中でも小学校、中学校ともに、おらが村の「福原学校」として地元の期待が大きい。そこで、地域に根ざした愛される学校像を小中学校が共有し、教職員が連携して、より豊かな人間形成を目指す一貫した教育活動を行う必要があると考え、研究主題「自ら学び、互いを高め合うことのできる児童・生徒の育成～小中9年間の学びと育ちの連続性を重視した教育～」を設定した。

(3) 研究の組織



2 研究の内容および実践事例

(1) 学力向上部会

①家庭学習の定着

- ・自主学習ノートや宿題を小中学校で実施。学習習慣を定着させた。
- ・中学生のノートを小学校で参考展示した。



協働授業の実施

②家庭学習取組週間

- ・中学校の定期テストの時期に合わせて、小学校でもリズムをつくるために重点的に家庭学習に取り組んだ。

③単元配列表の作成

- ・小学校での学習の成果が、中学校の学習活動に円滑に接続されるよう、各教科で小中学校統一の単元配列表を作成した。

④協働授業の実施

- ・中学校の教員が、小学校において小学校の教員と協働授業を企画し、実施した。

■協働授業を実施した教科と内容

- <国語> ・例年、定着率の低い修飾語（小3）の学習について重点的に実施。
- <算数・数学> ・中学校で多くの生徒が苦手意識を持っている「比」の単元で実施。
- <理科> ・鶏の手羽先を使って筋肉の動きについて、体験を通して実感できる授業を実施。
- <社会> ・いくつかの情報を元に話し合い活動から理解を深める授業を実施。
- <英語> ・中1ギャップの解消を目指し、小5、小6に対して、中学校の授業内容を伝えるとともに中学校に期待をもたせる授業を実施。
- <音楽> ・音楽科の教員による専門的な楽器指導や児童の合唱指導等を実施。
- <図工・美術> ・埼玉アートカードセットを美術館から借用し、それを活用して郷土の作家の作品鑑賞をゲーム感覚で楽しむプログラムを実施。
- <体育> ・スポーツテストの課題からボール投げに焦点を当て、リズムを取り入れた授業を実施。児童は投げ方を楽しく学んだ。
- <家庭> ・中学校の生徒がミニティーチャーになって、ミシン縫いの操作を小学生に教える授業を実施。



児童生徒の共同学習

(2) ゆたかな心育成部会

①福原Basicの定着

生徒指導面（ルールの徹底）で小中連携を推進することで、目指す児童生徒像に向けて、発達段階に応じた指導目標を設定し、積み上げていくことができる。また、中学校進学に際し、滑らかな接続を実現することにより、中1ギャップの解消を図る。学校生活でのルールを、10の項目でピックアップし、小中学校合わせて9ヵ年計画で段階ごとに目標を分け、その力を育成していく。

○重点項目の設定○

毎年、重点項目として2項目を設定し、重点的に取り組んでいく。小中間で成果と課題を話し合い、発達段階に応じた指導目標を達成できたかどうか検証し、今後の指導に生かす。（PDCAサイクルの活用）

■指導目標 福原Basic (10項目)

《段階設定》 (1) 低学年 (2) 中学年 (3) 高学年 (4) 中学生	①あいさつ	⑥清掃
	②時間	⑦自分の役割
	③言葉づかい	⑧もの
	④落ち着いた行動	⑨健康
	⑤忘れ物	⑩交通ルール



中学校の生徒総会で発表する小学生

②「あいさつ」の指導の観点

生活目標とリンクさせながら、計画通り指導を積み重ねていく。さらに、児童生徒が主体的に活動し、意識し合えるような取組を児童会・生徒会が中心に計画し、全校の児童生徒が関わり合えるような活動を行う。

(小学校・中学校の校門でお互いの子どもたちがあいさつ運動を実施している。)

③「清掃」の指導の観点

清掃の基本は黙働清掃・無言清掃で行う。小中で清掃方法を統一し教室、廊下での雑巾の拭き方や反省会の仕方など、流れや手段を同じにして教え合っていく。

④「道徳の授業」での共通の実践

道徳通信を活用し、毎月の生活目標の把握や学年間で足並みをそろえた取組を実践していく。

⑤「特別活動」での共通の実践

年度当初に小・中学校ともに学級会の形式をそろえるとともに、話し合い活動の充実を図る。中学校の生徒総会に小学生が参加し、自治的な活動の推進を図った。

⑥「小中合同集団下校」での指導

災害を想定した小中合同集団下校を実施し、中学生が小学生を見守りながら安全に下校できるよう、防災の意識を高めた。



小中合同集団下校の様子

(3) 体力向上部会

①道具の効果的な利用について検討し実践した。(小・中学校間での用具等の共有)

- ・ 跳び箱は台数の制限や、跳ぶことが苦手な生徒の練習を考慮し活用した。
- ・ ベースボール型ゲームのグローブ、打撃練習用ティーを小学校から借用した。

*道具の効果的な活用の実施から見えてきたこととして、小学校の跳び箱を借りて中学校で課題別学習を行うことで、跳び箱の苦手意識の克服やレベルアップへの意欲につながった。

②6年生バスケットボール大会に向けた指導の支援

- ・ 朝練習の時間に中学生が小学生にコーチを行うことで、小学生のモチベーションが高まり、児童が意欲的に取組むような、向上心が見られた。

③4年生の体育の授業における中学校教諭との協働授業としてソフトボールを指導

- ・ 小学校の体力課題の一つであるボール投げに重点をおき、ベースボール型ゲームの授業の導入部分で中学校の体育教員がボール投げのコツを指導することで、その後の授業や課題解決につなげていった。
- ・ 継続していくことが重要である。担任が個々で指導するのではなく、同じ教員が指導を行うことで、学級間の指導に差が出ないようにすることができた。

(4) 個別支援教育部会

①児童・生徒に関わる情報交換

- ・SSWを交えての小中合同ケース会議や、小中連携の支援体制づくりに向けた情報交換、さわやか相談室の利用に関わる情報交換などを行った。

②教育相談

小中学校共通の目標：「豊かなコミュニケーション能力の育成」

■小学校の活動…ソーシャルスキルトレーニング（月1回）

例 11月：わたしの得意なふわふわ言葉 2月：〇〇さんの頑張りに拍手

- ◎検証として、あいさつに特化した内容で行ったため、自信をもってあいさつができる児童が多くなった。今後は、グループエンカウンター的な内容も取り入れながら幅を広げていく。

■中学校の活動…学級コミュニケーション活動（月1回）

例 10月：すごろくトーク 3月：あたたかい言葉がけ

- ◎生徒同士が円滑なコミュニケーションを図るためのよい活動の場となった。生徒同士で言葉を交わす機会が増え、自分の意見を伝えることと相手の意見を聞くことに関して成長した場面がみられた。

③保健

- ・「歯科保健指導」「性教育（いのちの教育）」について、小中9年間を通した指導計画の作成を進めている。
- ・歯科保健指導等、小中の養護教諭と一緒に指導した。
- ・小中合同地域学校保健委員会に外部講師を招いて年2回開催した。



学校保健委員会での研修

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・学力 協働授業では、児童・教員ともに交流ができた。（中1ギャップ解消）
- ・心 福原Basicの、[あいさつ]と[清掃]を重点項目とした結果、意識が向上した。
- ・体力 体力面での課題を共有し、連携した活動を展開できた。
- ・個別 さわやか相談室とスマイル学級について、小・中学校間で確認し、活用のための方策を決定できた。

- 小中が連携して活動することにより、児童生徒同士や教員同士の交流が増え、中1ギャップの解消を図れた。また、今年度は9年間を見据えた計画が立てられ、考えを共有できた。

(2) 課題

- ・学力 学力について様々な観点から細かく分析し、課題への対策を講じていく。家庭学習の時間の目安表をつくり、書式も統一していく。
- ・心 あいさつ週間や統一した清掃の仕方等、小中で計画を立てて実施していく。
- ・体力 児童生徒の活動や目標設定に見通しを持ち、体力向上を更に継続していく。
- ・個別 小学校のスマイル学級と中学校のさわやか相談室の利用のギャップの解消。
- 児童・生徒の課題に応じて、具体的な方策を練っていく必要がある。可能な部分は統一していき、さらに質を高めていく必要がある。

研究主題

「心豊かに、たくましく生きる児童の育成」

川越市立霞ヶ関西小学校

研究のポイント

- 道徳・総合的な学習の時間の授業を通じた、生き方を学ぶ教育を推進する。
- 2020年東京オリンピックの会場となる本校周辺地域の準備進行に併せ、地域の士気を高める取組に関心を持つとともに、オリンピック・パラリンピックの価値について学ぶ。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

自制心や規範意識、人間関係を形成するコミュニケーション能力などの低下により、子どもたちの徳性に係る課題は多い。その中で他者を思いやる気持ちや生命や人権を尊重する心、社会性や、倫理観や正義感等を育成する心の教育を推進することは、重要である。

学校教育目標である「心豊かで、たくましい児童を育成する ～考える子思いやりのある子 たくましい子～」の実現を目指し、道徳・総合的な学習の時間の授業を通じた、生き方を学ぶ本研究を推進する。

(2) 研究主題設定理由

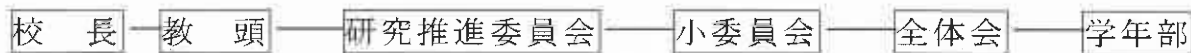
2020年東京オリンピックのゴルフ会場となる霞ヶ関カンツリー倶楽部は本校の学区に位置するだけでなく2年生の生活科や3年生の総合的な学習の時間の地区探検・地域調べで子ども達も、在校中一度は見学する身近で興味深い場所である。今年度に入り、東京2020大会マスコット選定・学校玄関の霞ヶ関カンツリー倶楽部ののぼりの設置・笠幡駅周辺の拡張工事等、身の回りでは、オリンピックに向け様々な準備が進行している。子ども達はこれらの変化を通してオリンピックを身近なものとして感じるだけでなく、自分たちの地域により深い愛着と誇りを感じつつある。

また学区内には障害者支援施設「川越いもの子作業所」、障害者生活支援センター「ともいき」があり、これまでも5年生の総合的な学習の時間に講師として関係者をお招きしたり、実際に施設を訪問したりして、「共に生きる」福祉について学んでいる。

そこで、子ども達の地域への思いを育みながら、道徳・総合的な学習の時間の授業を通して、オリンピック教育の中心となる「友情」や「共生社会実現に向けての気づき、認識」等をさらに深めることで、豊かな心を育み、これからのよりよい生き方を考えさせたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織

本校は今年度、来年度からの教育移行期間に応じられるよう、学校課題研究に道徳を取り上げ、授業実践を重ねてきた。研究はその組織を活かして進めた。



※学年部は低・中・高

学年ブロックに分かれて研修を進めた

2 研究の内容

(1) 道徳授業

本校では、経験の浅い担任が増えている現状がある。そこで1時間の授業の基本的な流れを確認したり、本校児童の実態に適した資料を探し学年で指導案を検討したりして授業実践を行うようにしている。特に、板書の仕方や「心情バロメーター」の提示といった本校独自の道徳のスタイルについても研究を行った。

また、道徳教科に向けた評価の仕方、評価の場面等についてもポイントとなる点について話し合った。

(2) 総合的な学習の時間授業等

移行期間に向け、外国語活動が導入されるため各学年の内容の精選を行った。その中でも3年の地域学習や5年の福祉に関する学習については体験学習を重視しながらも時間配分の変更等を行った。

また、今年度は開校40周年記念事業の一環として特別に様々な取り組みを行った。

- ① 運動会で全校バルーンリリースを実施。バルーンを拾った遠くに住んでいる方々から連絡をいただいたり、暖かい応援メッセージを送っていただいたりする中で、学校や地域に対する思いや願いを新たにすることができた。
- ② 開校40周年記念式典では、子ども達の友達や家族・地域への思いや感謝の気持ち、これからこの歴史をどう引き継いでいきたいかといった決意を呼びかけや歌に込めて、来賓の方々に披露することができた。
- ③ 5・6年生を対象に2016年リオデジャネイロオリンピック20km競歩日本代表である高橋英輝選手を招いて講演をいただく機会を得た。日頃の生活で心がけていること、オリンピックに出場して得たこと、未来を生きる小学生に伝えたいこと等について実技を交えて講演をいただいた。

3 実践事例

(1) 道徳

1年授業研究会7/13

主題名 よいと思うことはすすんで

ねらい よいことと悪いことの区別をし、よいことを進んで行おうとする態度を育てる

2年授業研究会 10 / 12 主題名 いちばん大切なのはともだち
ねらい 友達と仲よくする心情を育てる

3年授業研究会 10 / 17 主題名 友達と助け合って友情を深める
ねらい 互いに理解し、信頼し、助け合って友情を深めようとする心情を育てる

4年授業研究会 10 / 12 主題名 友達と信頼し合って、助け合っていく
ねらい 友達と互いに理解し、信頼し、助け合おうとする心情を育てる

5年授業研究会 11 / 9 主題名 働くということ
ねらい 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って、公共のために役立とうとする心情を育てる

6年授業研究会 1 / 18 主題名 学校の一員
ねらい 先生や学校への敬愛を深め、友達と助け合おうとする心情を育てる



【1年生】



【4年生】



【5年生】

(2) 総合的な学習の時間

第5学年総合的な学習の時間「ふだんの 暮らしの しあわせを 考える」

講演会 5 / 10 ・「わたしの体験談」 斎藤 愛 講師

5 / 15 ・「盲導犬とくらす」 内藤なつ子 講師

5 / 30 ・「車いすバスケット」 佐藤 健一 講師

施設見学 6 / 19, 22 ・障害者生活支援センター「ともいき」

2 / 6 ・障害者支援施設「川越いもの子作業所」



【施設の様子①】



【施設の様子②】



【講演会の様子】

児童感想 実際に車いすやアイマスク体験をしてその大変さがわかりました。
佐藤さんの車いすバスケットでは低い位置からシュートしてゴールを決めていてすごいと思いました。これから自分ができることで手伝ったり親切にしたりしたいと思いました。

第5学年第6学年総合的な学習の時間

11/30 リオデジャネイロオリンピック20km競歩日本代表



【高橋英輝選手】

高橋英輝選手を迎えて特別授業

講義内容

- ・「競歩」という競技
- ・競歩を通じて得たこと
- ・未来を生きる小学生に伝えたいこと



【競歩体験】



【オリンピックへの思い】



【お礼の挨拶】

児童感想 高橋選手の話聞き、一緒に競歩体験をしてその速さと重ねてきた努力に感動しました。またオリンピックという大会のすごさも少しわかりました。

今日の授業で一番心に残ったのは「強い心を持つ」ということです。自分が正しいと思ったことをやり抜く「強い心」をもつことや、目標を持ちその夢を実現させるために努力し続ける「強い心」をもつことを、これからの生活で僕もがんばっていきたいと思いました。高橋選手、これからもがんばってください。

4 研究の成果と課題

工夫した授業や多様な体験は子ども達の豊かな心の育成の一翼を担ったものとする。2020年東京オリンピックにむけ、これからも様々な取り組みが本格化してくる。今年取り組みをきっかけに今後も子ども達の心の育成に地域を活かした授業や体験を重ねていきたい。

研究主題

「自ら考え、進んで学ぶ児童の育成」

～「わかる・できる」喜びを実感できる算数科の指導方法の工夫～

川越市立川越西小学校

研究のポイント

- 問題解決の学習を通して、既習事項を活用する楽しさを味わわせることについては、自力解決時に既習事項を活用できるよう、算数コーナーの設置や振り返りのできるノート指導、ヒントカードの活用を行い、児童が筋道を立てて考え、自分の考えを表現できるようにした。
- 適切な考える場や学び合いの機会を取り入れることについては、ペアやグループでの話し合い活動や全体場で発表する場面を設定したり、多様な考えに触れてよりよい練り上げの仕方を工夫したりし、児童が意欲的に学習に取り組めるようにした。
- 学年に応じてTTによる指導、少人数によるコース別の指導の授業形態を取り入れた。
- 研究授業前に、学年の取組や授業を見る視点を明らかにするための話し合いを持った。

1 研究の概要

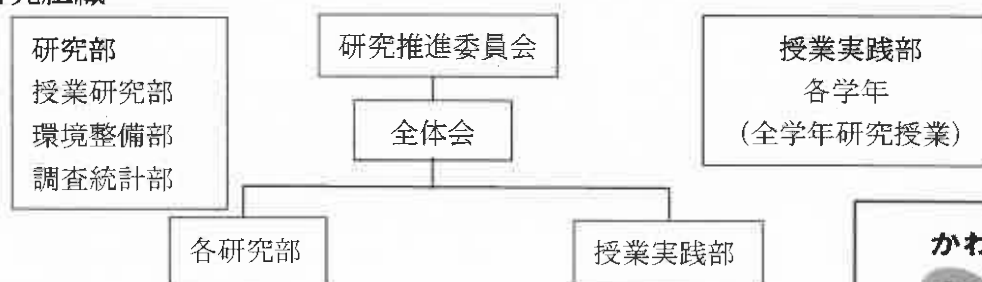
(1) 研究のねらい

本校の児童は、全国学力調査や県の学習状況調査、人間地区算数数学科学力調査等の結果において、地区や県、全国と比べ、正答率や通過率が平均を下回っている項目が多く、学力の向上の取り組みが本校の課題の一つとなっている。また、学力の個人差が大きく、指導や支援の方法の工夫改善が必要である。そこで、個に応じた指導や支援の方法を工夫改善し、一人一人が「わかる・できる」喜びを実感できるようにすることが研究のねらいである。

(2) 研究主題設定の理由

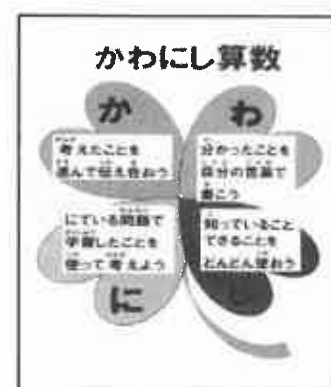
児童の学習への取り組みの様子を見ると、学習内容が理解できていない児童は学習意欲も低い。落ち着いて話が聞けなかったり、ノートがきちんと書けなかったりするなど、基本的な生活習慣・学習規律が身につけていない児童も少なくない。一人一人が「わかる・できる」喜びを実感できるようにすることで、児童の学ぶ意欲を高めたい。そして、一人一人が自分の考えをもち、表現し、伝え合い学び合えるようにし、児童が自信をもって算数の学習に取り組めるようにしたい。そのような算数の時間を積み重ねることで、学力の向上が図れるだろうと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織

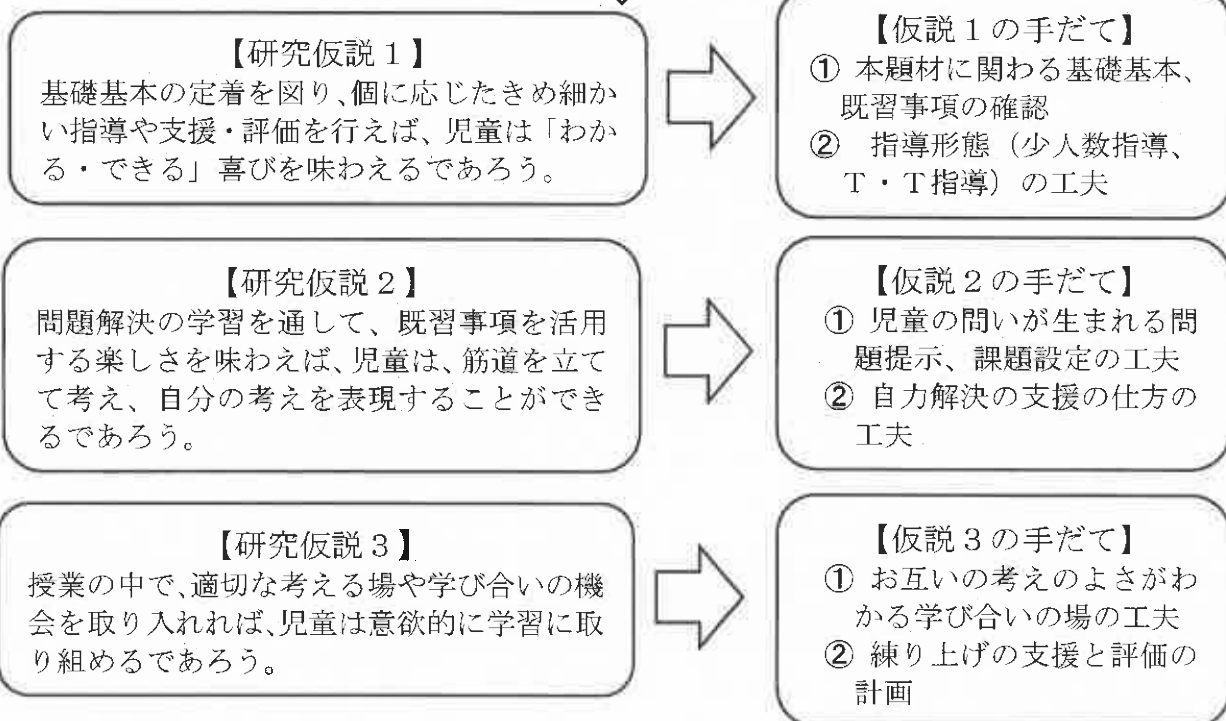
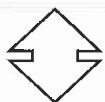
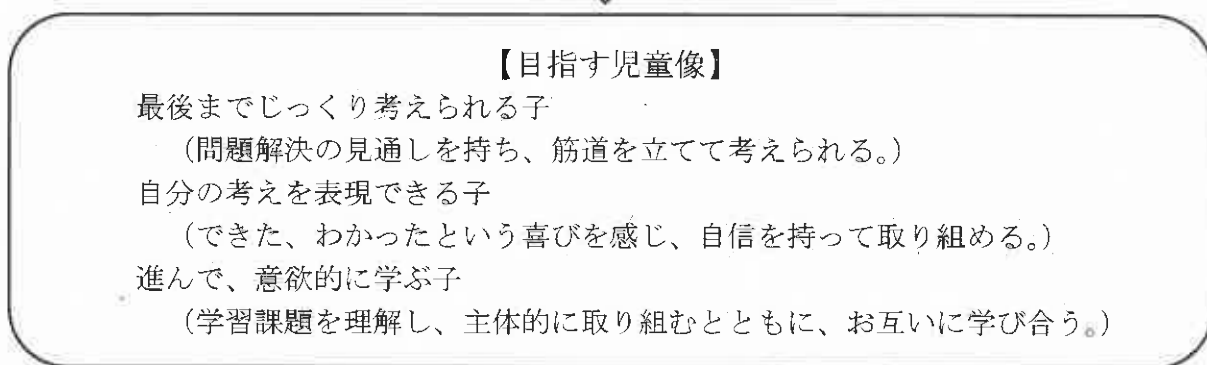
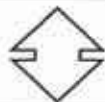
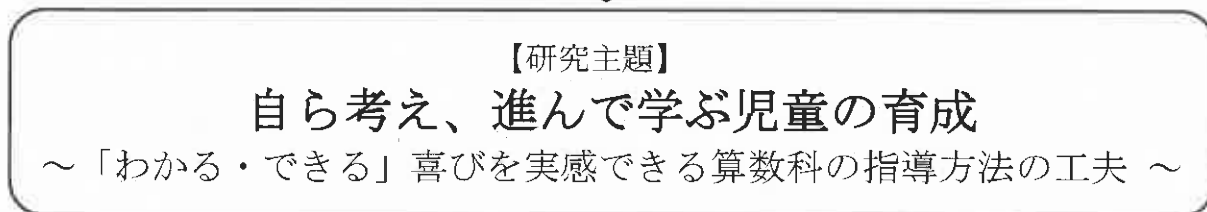
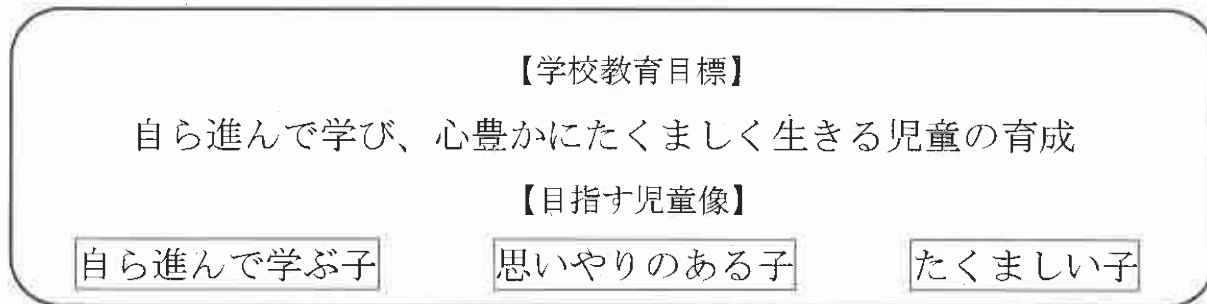










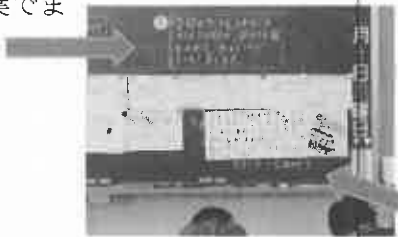

2 研究の内容

本校では、右図のように「かわにし算数～4つの合い言葉～」を各学級に掲示し、つねに児童も教師もこの内容をしっかり理解し、算数の授業だけでなく全ての教科で意識して取り組んでいる。



(1) 目指す児童像・研究仮説とその手立て



学習内容	教師の働きかけ・発問等	児童の活動の様子・発表等
1 スキルアップ練習 2 問題を知る	 <p>コース毎に児童の実態に応じて、問題中の数値を決め、課題につなげた。</p> <p>3 こずつ箱に入れていく場面が明確になるように、ケーキと箱の掲示物を用意した。</p>	
3 課題をつかむ 4 見通しをもつ 5 問題を解く	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 全部のケーキを入れるときはこの数を考えよう。 </div> <p>算数コーナーには前時までの学習内容や、思考や表現の道具となる図や式、言葉などを掲</p>	 
6 発表する	<p>全体での発表の前にペアやグループで話し合う場を設定し、考えを伝え合えるようにした。</p>	 
7 話し合う	<p>すいすいコース2では、ペアで自分の考えを伝え合う場を設定した。</p>	
8 まとめる	<p>すいすいコース1では、教師の助言や発問により、自分の考えを表現したり意見交流をしたりしながら、算数の学習に対する自信を持たせられるようにした。</p>	
9 適用問題を解く	<p>箱の数は、わり算の答え(商)より1つ多くなることを児童の言葉でまとめた。</p>	<p>話し合いでは、それぞれの考えの共通点やアイデアのよさを見つけられるようにした。</p>
10 振り返る		<p>適用問題(長椅子の問題)で、本時で学習したことを活用して考えさせるようにした。</p> 

学習内容	教師の働きかけ・発問等	児童の活動の様子・発表等
1 問題を知る	 <p>T2 が問題・課題の提示。T1 は声かけしながら机間指導・課題の確認。</p>	<p>ハイタッチの組み合わせ」という問題で、その場で実際に試せ、興味を持たせることができた。</p> 
2 課題をつかむ	<p>落ちや重なりがないように調べる方法を考えよう。</p> <p>「あれ、同じ人とやっちゃった？」</p>	
3 見通しをもつ	<p>T2 は2分後に、考えを持ってない児童を集め、小集団指導をする。</p> 	<p>「表や図にしてみよう。」</p> 
4 自力解決する	<p>(全ての場合を書き表す) (表に表す)</p>	
5 発表する	<p>T1 は、児童の発表に補足説明を加えたり、質問したりしながら児童の説明をより分かりやすくする。</p> 	 <p>(樹形図に表す)</p>  <p>(図に表す)</p>
6 話し合う	<p>気づいたところ、似ているところなどを見つけ、よりよい解決方法を話し合う。</p>  	
7 まとめる	<p>児童の言葉でまとめていく。</p>	
8 適用問題を解く	<p>適用問題では、図に表すと五角形になる問題を取り上げた。</p> 	
9 振り返る		

3 成果と課題

(1) 成果

- 学校全体で問題解決の学習過程を進めたことにより、児童も学習の進め方がよくわかり、課題に意欲的に取り組み、最後までじっくり考えられるようになった。
- 小集団指導を行ったり、ヒントカードを用意したりすることで、一人一人が自分の考えを表現し、主体的に学習に取り組む児童が増えた。

(2) 課題

- 児童相互の学び合いの場の設定の工夫、話し合いを活性化させるための指導の在り方について、主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、さらに研究を深めていく。
- 教材の系統性、児童に身につけたい内容等を明確にできるよう、さらに教材研究を深めていく必要がある。

研究主題

「人との関わりの中で自己の生き方について考え、よりよい人間関係を築く子供の育成」
～考え、議論する道徳をめざして～」

川越市立山田小学校

研究のポイント

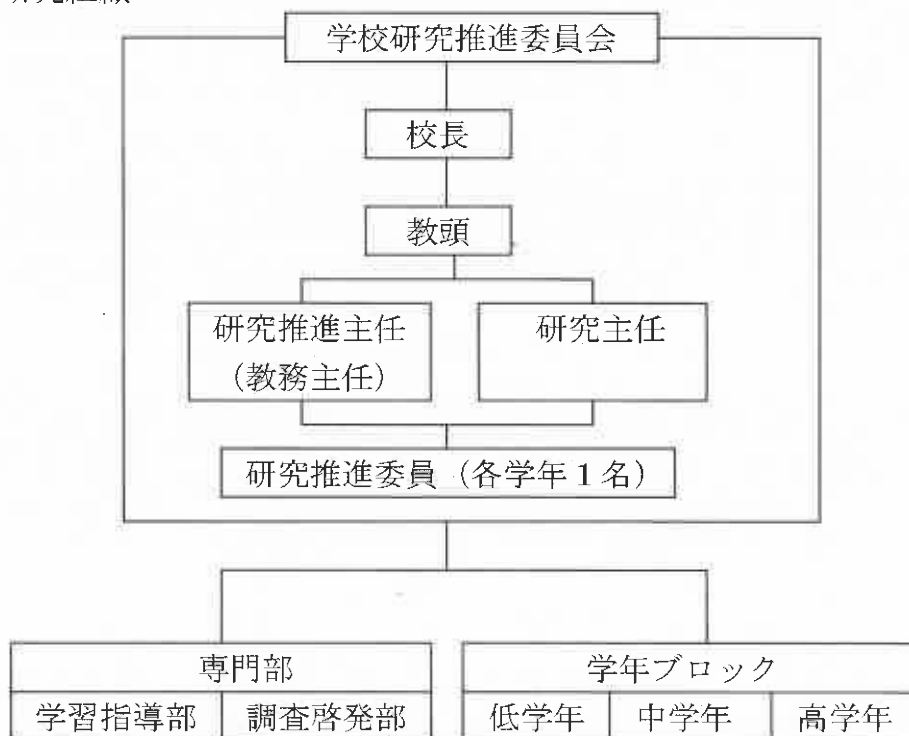
- 答えが一つではない道徳的な課題を自分自身の問題と捉えさせること。
- 考え、議論する場を設定し、自己の生き方について考えさせること。
- 考えを深めるために二分法を活用したり、切り返しの発問を工夫したりすること。
- 道徳の教育活動を、積極的に発信、共有していくようにすること。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

平成27年3月学習指導要領の改正で、いじめの問題への対応の充実や発達段階をより一層踏まえた体系的な内容とするとともに、問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れる工夫が示された。答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の子供が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」への転換を図るため、児童の実態に応じて、多様な創意工夫を生かした授業づくりが求められる。道徳科は「何を学ぶか」という指導内容にとどまらず、「考え、議論する道徳」（どのように学ぶか）「主体的な判断に基づいた道徳実践ができる」（何ができるようになるか）までを見据えた改善を図っていく必要がある。このことを十分に踏まえつつ、道徳科の授業を積極的に実践していくことにした。

(2) 研究組織



(3) 研究主題設定理由

本校の児童は全体的に穏やかで落ち着いた児童が多く、男女の仲もよい。道徳が好きな児童が多く、授業に意欲的に取り組んでいる。これは昨年度からコミュニケーション能力の向上とよりよい人間関係を築くことに視点をおいた道徳の研究の成果とも言える。しかし、「自分の気持ちを上手に伝えられない」、「周りで間違っていることをしている友達に注意できない」などの人との関わり方について課題がある。また、「じっくり考えることが苦手で軽はずみな行動をとってしまう」、「反省が次の行動につながらない」などの自己の生き方について考え行動することにも課題がある。そこで、道徳の授業で、考え、議論する場を設定し、人との関わりの中で自己の生き方について考えることを体験させれば、よりよい人間関係を築くことができるであろうと考え、研究主題を設定した。

2 研究の内容

(1) 仮説と手立て

- ① <仮説1> 道徳的価値の内面的自覚を深めるような道徳の授業の工夫ができれば、自己の生き方についての考えを深めることができるであろう。

<手立て>

- ・二分法の活用
- ・ワークシートの効果的な活用
- ・切り返しの工夫
- ・終末の工夫

- ② <仮説2> 人との関わりの中で多様な意見や考えを知り、互いを認め合うことができれば、よりよい人間関係を築けるであろう。

<手立て>

- ・自分の心情を表すことができる教材、教具の工夫
- ・役割演技の活用
- ・座席の工夫

- ③ <仮説3> 道徳の教育活動を、積極的に発信、共有していくなれば、家庭・地域社会との一体化が図られ、進んで道徳的实践をしようとする子供を育成できるであろう。

<手立て>

- ・道徳コーナーの設置
- ・「道徳だより」の発行
- ・児童アンケート、教師用アンケートの活用

(2) 専門部の取組

① 学習指導部

ア 授業研究の取組

- ・全学級授業公開と全6回の授業研究会の実施
- ・話し合う場での二分法の活用、切り返しの工夫

中心発問において、二分法を用いた。自分の考えを明確にさせ、理由を聞いていくことで、児童から多様性を引き出せた。児童の発言を予測し、教師がどう切り返していくか準備しておいた。その結果、揺さぶりをかけ、考えを深化させることができた。



② 調査啓発部

ア 道徳コーナーの設置

イ 「道徳だより 太陽」を毎学期家庭地域に配布



3 実践事例 ここでは紙面の関係で、第6学年の実践事例を示す。

(1) 第6学年〇組 道徳学習指導案

- ① 主題名 けんきょに、広い心をもって B-(10) 相互理解, 寛容
資料名 ブランコ乗りとピエロ (出典 「わたしたちの道徳」文部科学省)
- ② 主題設定の理由 (略)
- ③ ねらい 自分の課題に目を向け、相手を受け止めることについて多様な感じ方や考え方を出し合い、その話し合いを通して、周りの意見を素直に聞き入れることで自分の心が広がることを理解し、自身の生き方をより良くしようとする態度を育てる。
- ④ 他の教育活動等との関連 (略)
- ⑤ 指導過程

段階	学習活動	児童の反応	留意点 ☆評価の観点
導入	1 教材への関心を高める。 ○今までに人の意見を素直に聞き入れられなかったことはありますか。 (3分)	・友達に注意されたことがあったけど、素直に聞けなかった。	・留意点 ☆評価の観点 ・過去の体験から、本教材のピエロも共通するところがあることにつなげていく。
展開	2 資料「ブランコ乗りとピエロ」を読み考える。 (範読5分)	【あらすじ】今日は、サーカスのショーを大王アレキスが見に来る一年に一回の特別な日。演技の時間はそれぞれ決まっています。ブランコ乗りのサムが先に技を披露して、次がピエロの出番です。	

○技を披露し続けるサム
を見ているときのピエ
ロは、どんな気持ちで
しょうか。

(4分)

○サムとすれ違ったとき
のピエロはどんなこと
を考えているでしょう
か。(25分)



(後略)

- ・サムが約束を守らな
かったせいで俺の時
間が短くなった。
- ・なんて自分勝手なや
つなんだ。
- ・俺こそがスターなの
に、生意気だ。
- ・サムのせいで、自分
の演技を大王に見て
もらえない。

A 怒り

- ・自分勝手すぎる。
- ・俺の時間を奪った。
- ・おまえのせいで、俺
は大王に見てもらえ
ない。

B サムはすごい

- ・観客のためにここま
でやるなんて。
- ・全力を出し切る姿が、
まさにプロだ。
- ・俺は今まで、こんな
にできていなかった。

- ・場面絵に注視させ、技を披
露し続けるサムを見るピエ
ロの気持ちに共感させる。
- ・サムの心の表層的な部分に
しか意識が向いていない場
合は、「ピエロも大王に見
てほしいという気持ちはな
いかな?」と児童に投げか
け、考えのベクトルが自身
に向いていることをおさえ
る。

- ・場面絵に注視させ、サムと
すれ違うピエロの内面を出
し合うことで、ピエロの考
えや心情を多角的に考えさ
せる。
- ・Aの考えしか出てこない場
合は、Bの考えに気付ける
ように切り返す。

【切り返し】

「ピエロの怒りの考えが多い
けど、これからお客さんに
芸を見せるのに、心の中は
怒りしかないのかな?何か
前向きな考えはないかな?
な?」

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①各学年が視点(二分法・切り返し・ワークシート・書く活動・表現・終末等)を絞った授業研究を行ったことで、指導法についての理解を深めることができ、「考え、議論する道徳」へと資質転換していく足がかりをつかむことができた。
- ②学校での取組を家庭へ伝えたりしたことで、保護者への啓発を進めることができた。また、校内や教室に道徳コーナーを設け、来校者や子供たちが道徳に関する情報に触れる機会を提供することができた。

(2) 課題

- ①さらに多くの児童が自分の考えを語り、お互いの考えを交流できるようにしたい。
- ②日常の指導と意識的に関連づけ、道徳性を高めていく必要がある。
- ③学校と家庭との連携について、その方法をさらに考えていきたい。

「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法の研究」

～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「わ・た・しの授業」の実践～

川越市立高階西中学校

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

現代の変化の激しい時代にあつて、子供たちに自ら学び自ら考える力や豊かな人間性などを育成する教育が期待されている。「わかる授業」「楽しい(たのしい)授業」「主体的(しゅたいてき)な授業」の『わ・た・しの授業』を合い言葉に、生徒が主役となり、教師主導型の授業から、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指した学習活動と、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した学習活動をバランスよく関連付け、問題解決的な生徒主体の授業をし、達成感や充実感を味わえる授業の取組と指導法について研究をする。

また、平成25年～28年にかけて4年間、研究委嘱を受けて取り組んできたことを基に、引き続き取り組んでいく中で、より一層研究を深めていく。

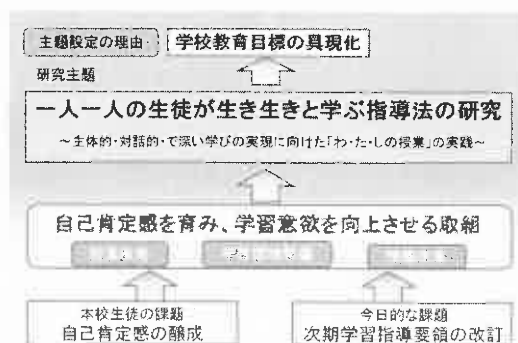
(2) 研究主題設定理由

『状況に応じて自信を持って適切に表現する』ことが、本校生徒の課題である。また、今日的な課題として、次期学習指導要領の改訂がある。

これらの課題を解決するために、学力を『基礎的・基本的な知識及び技能の習得』と『知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成』をバランスよく関連づけることにより、子供たちの学力は一層向上するであろう。」ととらえ、「わ・た・しの授業」を充実させることが重要であると考え、全教職員で取り組んできた。その充実こそが「一人一人の生徒が生き生きと学ぶこと」につながると考え、本主題を設定した。

また、昨年までの取組を基に、引き続き取り組んでいくこととした。

◆主題設定理由



(3) 研究組織

昨年度は、校長を中心として、教頭・教務主任・各研究部長で『わ・た・しの授業』研究推進委員会を組織し、研究部として、授業改善研究部、学習環境研究部、情報収集研究部の三部会を設定していた。

今年度は、その中からさらに授業改善を中心に据え、学校全体の研究を推進した。具体的には、昨年度までの学校研究の成果を土台として「一人一人の生徒が生き生きと学ぶ指導法の研究～主体的・対話的で深い学びの実現に向けた「わ・た・しの授業」の実践～」に向けた取り組みである。

特に授業実践において、事実を正確に理解し伝達したり、課題について構想を立て実践したり、評価・改善するなどの授業力の向上に活かすことができるようにする。

2 研究の内容

(1) 研究仮説

「基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指した学習活動と、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した学習活動をバランスよく関連付けると、生徒の学力が向上する。」と定義づけた。

①手立て1

各教科において、言語活動の充実を踏まえた授業を展開すれば、生徒の思考力、判断力、表現力等を育むことができ、生徒の学力が向上する。思考力・判断力・表現力等の育成として、

- (ア) 言語活動を充実させる。
- (イ) 基礎・基本を身に付けさせる。
- (ウ) 発問の工夫をする。
- (エ) 小・中学校の連携を図る。

全教科で、

- ・「本時のねらい」(学習課題)の明確化
- ・「本時の振り返り」(まとめ)の実施

を確認事項として取り組んでいる。

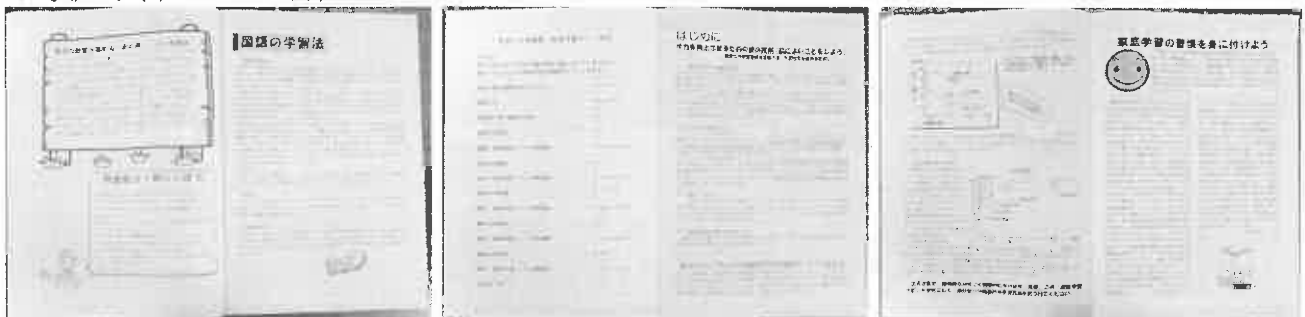
②手立て2

学習規律を確立し、落ち着いて生活や学習ができる環境を整えれば、生徒がじっくり考え、安心して発表できる授業が展開され、生徒の学力が向上する。

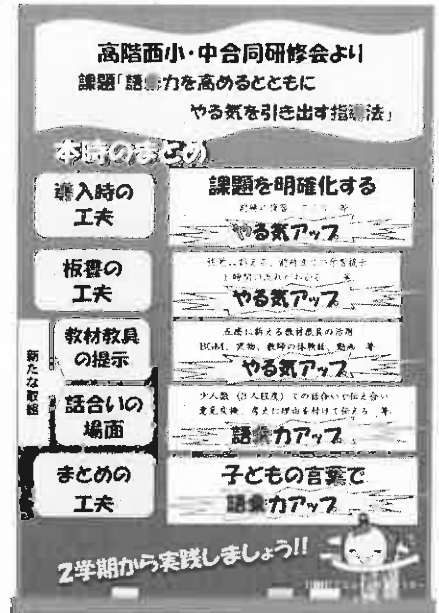
落ち着いて生活や学習ができる環境の考察と整備として、

- (ア) きれいで整った教室環境
 - (イ) ルールや規律の統一と徹底の工夫
 - (ウ) 安心して発言や行動ができるクラス環境
- 学力アップノートの活用と定着として、
- (エ) 「家庭学習ナビ」を活用した指導の徹底
 - (オ) 自己肯定感を持たせる「点検」と「表彰」

◆家庭学習ナビ 内容



◆平成29年度小中連携確認事項



◆家庭学習ナビ



「学習規律を確立し、落ち着いて生活や学習ができる環境を整えれば、生徒がじっくり考え、安心して発表できる授業が展開され、生徒の学力が向上する。」という内容の検証の結果として、下記のアンケートの項目で、向上が見られた。

先生の話や友だちの発表をしっかりと聞き、発表することができていますか。		H28 4月	H29 4月	H29 1学期末	H29 2学期末
	1年生		83.6%	82.1%	74.6%
	2年生	94.9%(1年時)	71.6%	84.3%	90.5%
	3年生	54.7%(2年時)	63.2%	86.9%	90.5%

1年生は入学時の緊張感が切れたことが考えられるが、2、3年生については、生徒の意識の向上が見られた。

③手立て3

各種調査結果を丁寧に分析し、生徒一人一人の実態に応じた指導や支援を踏まえた授業を展開すれば、生徒の学力が向上する。

各種調査結果を丁寧に分析し生徒の実態を把握するために、

- (ア) 学力の伸びをみる視点
- (イ) 「分析支援プログラム」の活用

また、各種調査結果を丁寧に分析し指導法を工夫改善するために、

- (ウ) 「正答率」にとどまらない分析・検討→解答状況等を踏まえた指導法の工夫改善

また、学期ごとに同じ内容でアンケートを行い、比較の対象として変化を見られるようにしている。

◆指導法の工夫改善

各種調査やアンケート結果を丁寧に分析・検討し、指導法を工夫改善する。

「正答率」にとどまらない分析・検討
→解答状況を踏まえた指導法の工夫改善

- 例 授業改善
- 年間指導計画の見直し
 - 学習指導案の見直し
 - 校内研修会での活用
 - 小・中合同研修会での活用

3 実践事例

実践事例として、

(1) 研究授業の実施

全教員が「わ・た・しの授業」を実践し、年間一回以上指導者を招いて研究授業を実施した。

研究委嘱も積極的に受け、

- 西部地区学力向上のための授業研究会（特別活動「学級活動(1)」）発表2人
- 川越市教育委員会人権教育推進事業委嘱 発表1人

等でも、校外への発表も積極的に行い、授業を発表した。指導案を本校のキャビネットに保存し、他からも活用できるように、情報を発信している。

(2) 家庭学習の取組

全校生徒が家庭学習を毎日行い、翌日朝に提出する。毎日忘れずに提出できた生徒、工夫したノートを作成した生徒に賞状を出す。意欲的に家庭学習に取り組ませることで、学力向上を目指した。

家庭学習ノートの取組については、数年来続けているが一通り形式は定着しているので、取組の改善について検討をしている。

(3) 教室、校内環境の整備

授業規律・挨拶・発言の仕方など当たり前にやってきたことを明文化し、統一して掲示している。各教室内に共通の掲示をしている。

廊下、階段等の掲示スペースを利用し、生徒の活動写真、生徒に伝えたい言葉等掲示することで、生徒に意識付けをしている。

(4) 小・中学校の合同研修会

1学期には中学校での授業参観、夏休みには両校2教科ずつ模擬授業による授業の取り組み方の検証、3学期は小学校での授業参観を行っている。

小・中学校の合同研修会を通して、小学校との連携を図る中で、授業の展開や共通の課題への取組が行えた。お互いの授業参観を行う中で、小中の授業の違いを確認し、また、先生を生徒に見立て模擬授業を小学校、中学校両方で行うことで、お互いの授業の進め方の確認ができ、共通の課題を探す手立てとなった。

夏の研修で確認した内容については、共通して取り組む内容をポスターとして作成し掲示して、取り組んでいる。(ポスターについては、2研究の内容 (1)研究仮説 ①手立て1参照)

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①各教科等において、基礎的・基本的な知識及び技能の習得を目指した授業と、思考力・判断力・表現力等の育成を目指した授業をバランスよく関連付けようとする気運が高まった。
- ②学習規律を確立し、落ち着いて生活や学習ができる環境を整備することで、生徒の自己肯定感を育むことができた。(2研究の内容 (1)研究仮説 ①手立て2参照)
- ③家庭学習の丁寧な指導と見届けによる生徒の学習意欲の向上が見られた。
- ④小中連携による課題に対する手立ての実践と連携が図れた。

(2) 課題

- ①年間指導計画や学習指導案等の不断の見直し。次期学習指導要領を見据えた取り組みと工夫改善。特に学校行事等の工夫と改善をし、自分たちの力でやり遂げる力を身につけさせる。
- ②次期学習指導要領の改訂を見据えた「わ・た・しの授業」の実践。各教科間で「本時のねらい」(学習課題)の明確化と「本時の振り返り」(まとめ)などの共通内容をより一層取り組んでいくことが必要である。
- ③学力アップノートの取組の充実(生徒一人一人に応じたきめ細かな指導)を図ること。慣れてしまっていて形式的な取組になっている生徒もいるので、評価等の工夫と改善を考えていく。
- ④今後、中位層や下位層の生徒にターゲットをおいた分析を進め、手立てを講じていくなかで自己肯定感の高揚を図っていく。

研究主題

自らの意思と能力で自らの道を切り拓く生徒の育成
～人権教育と道德教育の充実を通して～

川越市立川越西中学校

研究のポイント

- 2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた「パラリンピック体験授業」におけるパラリンピアンへの授業を通じた学習
- 生徒理解のために校内研修、授業研究会の活用
- 様々な人権課題を学ぶことによる、必要な資質・能力の育成
- 小中連絡会を活用した道德教育の充実

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

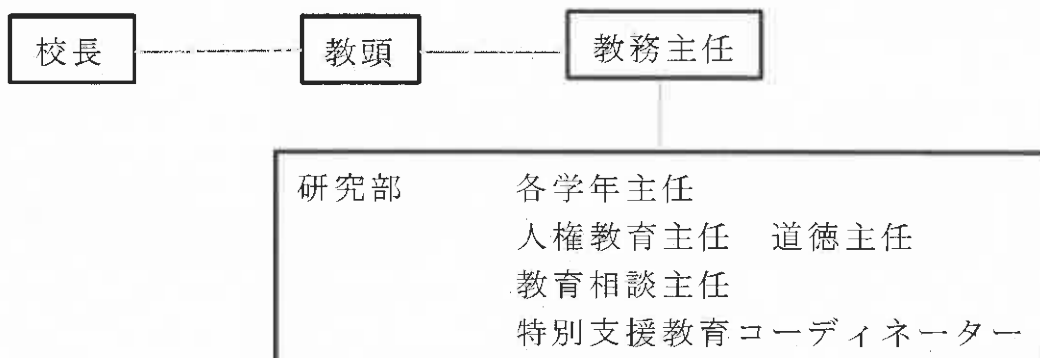
2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおいて本市は、ゴルフ競技の会場となっている。全市をあげて開催に向けた諸事業が進められているところである。霞ヶ関地区に隣接した本校においてもオリンピック事業に合わせて学校全体で様々な視点からの参画を目指し、スポーツを通しての生徒の健全育成、地域へ貢献できる生徒の育成目指していく。

特に「人権教育」「道德教育」を充実させることで、自らの道を切り拓く生徒を育成する。

(2) 研究主題設定理由

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催時には、生徒は10代後半の青年期にあたる。将来に向けて自らの意思と能力で自らの道を切り拓くことができる生徒を育成するため、特に「人権教育」「道德教育」に視点をあてることとした。また、校内研修、授業研究会、小中連絡会を通して、自ら考えて行動できる生徒の育成を目指していく。

(3) 研究組織



2 研究の内容

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
5月	人権作文の指導と取組	川越西中学校	全学年
6月	人権標語の指導と取組	川越西中学校	全学年
6月	1年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶⅠ」職業調べ	川越西中学校	1年生
6月15日	小中連絡会 (各学年道徳授業公開)	川越西中学校	各学年
6月 ～9月	2年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶⅡ」上級学校訪問	川越西中学校	2年生
8月21日	2校1公民館合同研修会 「人権教育の推進」	川鶴公民館	全教員
8月22日	霞ヶ関5校合同研修会 「これからの道徳教育」	霞ヶ関北小学校	全教員
9月	人権絵画の指導と取組	川越西中学校	全学年
9月28日	小中PTA、公民館 合同家庭教育学級 「小学校の人権教育」 「セクシュアル・マイノリティ」	川鶴公民館	PTA
10月 ～1月	3年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶⅢ」進路学習	川越西中学校	3年生
10月31日	小中連絡会 (各学年道徳授業公開)	川越西小学校 霞ヶ関北小学校	全教員
11月20日	授業研究会(人権教育) 「いないのではなく、言えない」	川越西中学校	全教員
11月27日	授業研究会(特別活動) 「学級生活を見直そう」	川越西中学校	全教員
11月 ～2月	1年総合的な学習の時間 「生き方を学ぶⅠ」社会体験事業	川越西中学校	1年生
12月14日	パラリンピック体験授業 人権教室	川越西中学校	3年生
1月29日	「命の大切さ」講演会	川越西中学校	1年生

3 実践事例

(1) 校内授業研究会

① 人権教育

ア 日 時 平成29年11月20日(月)

イ 授業者 和泉 尚将 教諭

ウ 題 材 「いないのではなく、言えない」

エ ねらい

- ・性の多様性への理解を深め、互いの気持ちや考えをわかり合う態度を育成する。
- ・人間尊重の精神に基づく男女相互の望ましい人間関係を形成する力を育成する。



② 特別活動

ア 日 時 平成29年11月27日(月)

イ 授業者 矢島 利哉 教諭

ウ 議 題 「学級生活を見直そう」

エ ねらい

- ・全員が生活しやすい学級とはどのような学級かを考えさせ、学級に対する所属感や連帯感を深める。
- ・進路実現に向けて、支え合い協力して学習する態度を育む。



(2) 体験活動

① パラリンピック体験授業

ア 日 時 平成29年12月14日(木)

イ 講 師 車いすバスケットボール元日本代表 三宅 克己 様

車いすバスケットボール日本代表 立川 光樹 様

ウ 演 題 パラリンピックから得たもの

～スポーツを通じた心のバリアフリー～

エ 生徒の感想

日本では海外よりも差別や偏見などがあると知り、少し悲しく思いました。日本も外国のように、すれ違ったら笑ったりあいさつをしたりなど、バリアフリーな社会になればいいと思います。そのために、私自身も意識して、障害者の方が困っていたら声をかけるなどをしていきたいです。



② 人権教室

- ア 日 時 平成29年12月14日(木)
イ 講 師 さいたま地方法務局人権擁護課
ウ 演 題 人権教育の推進
エ 生徒の感想



障害のある人や高齢者でも健常者と変わらず共生社会をつくりあげることが、この先僕たちがしなければならない。とても大きな課題だと知ることができてよかった。

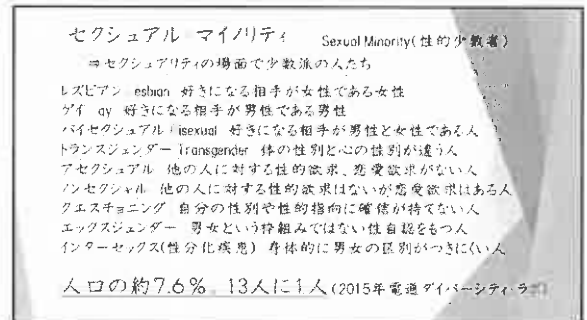
③ 「命の大切さ」講演会

- ア 日 時 平成30年1月29日(月)
イ 講 師 又野 亜希子 様
ウ 演 題 命の輝き～車イスから見える世界って結構ステキ～
エ 生徒の感想

最近何かあるとすぐ後ろ向きな気持ちになっていたけれど、この講演を聞いて前向きな気持ちになれました。「命」はとても強く、とても大切だということを改めて感じることもできました。また、車イスに乗っている方など困っている人がいたときには、みんなで助け合おうと思いました。

(3) 小中PTA、公民館合同家庭教育学級

- ① 日 時 平成29年9月28日(木)
② 講 師 川越市立川越西小学校
小島 仁 教頭
川越市立川越西中学校
今野 めぐみ 教頭
③ 演 題 小学校の人権教育



学校教育におけるセクシュアル・マイノリティ

4 研究の成果と課題

(1) 成 果

- ・「パラリンピック体験授業」でパラリンピズムに触れたことにより、生徒の学習意欲が向上した。
- ・授業研究会を通して教員の意識が向上した。
- ・部会を中心にして組織的に「人権教育」「道徳教育」に取り組み、3年間を見通すことができた。

(2) 課 題

- ・生徒の実態の分析を更に進め、効果的な指導につなげていく。
- ・来年度も授業研究会を実施するとともに授業における教育相談的手法(個々の生徒に対応したアクティブ・ラーニング)の研究を進める。

研究主題

「関連教科・領域を通じたオリンピック教育の推進」

川越市立霞ヶ関東中学校

研究のポイント

- 2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおける本市の取組を踏まえ、本校生徒に「オリンピック・パラリンピック」への興味・関心を高める。
- 総合的な学習の時間を効果的に活用し、川越市在住のオリンピック・パラリンピック経験者の講演会を通して「オリンピック・パラリンピック」をより身近なものとして感じさせる。その際、昨年度の学習を踏まえ「エクセレンス」や「フェアプレー」、「他者への敬意」といったオリンピック・パラリンピックの価値及びオリンピック・パラリンピック精神を再認識する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

中学校学習指導要領「保健体育 体育分野 H 体育理論」において、「オリンピックや国際的なスポーツ大会などは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていること」とオリンピックの意義が明示されている。パラリンピックにおいても同様であると考えられる。

川越市は、2020年の東京オリンピック・パラリンピックにおいて、会場となることが確定している。身近な地域で世界の祭典が開催されることは、本校生徒一人一人の記憶に深く刻まれる「貴重な経験」となるに違いない。

そこで、本校ではパラリンピック出場経験者の講演を通して、昨年度オリンピック教室で学習した「エクセレンス」や「フェアプレー」、「他者への敬意」といった、オリンピック・パラリンピックの価値及びオリンピック・パラリンピック精神を、再認識するために「オリンピック・パラリンピック教育の推進に係る講演会」を実施した。

本校の生徒が「オリンピック・パラリンピック教育の推進に係る講演会」の学習を通して、スポーツ基本法の前文に記されている「スポーツは、世界共通の人類の文化であり、次代を担う青少年の体力を向上させるとともに、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を培い実践的な思考力や判断力を育む等人格の形成に大きな影響を及ぼすもの」であることを改めて理解するとともに、実践的な行動力を身に付けることを研究のねらいとした。

(2) 研究主題設定理由

3年後に開催される東京オリンピック・パラリンピックにおいて、本市がオリンピック会場になることや、今年の11月にアメリカ合衆国大統領が日本の首相と会場を訪れたことは、生徒たちにとって歴史の1ページを身近に感じることができる貴重な出来事であった。

今年度は、昨年度同様に以下の「研究の内容」に示した通り、オリンピック・パラリンピックに関連した学習を展開した。その中で、昨年度実施した「オリンピック教室」や、今年度1月に実施した「パラリンピック出場経験者の講演」での学習を踏まえ、他者を尊重しこれと協同する精神や、公正さと規律を尊ぶ態度や克己心を育む一助とするために本研究の主題を設定した。

(3) 研究組織

校長 — 教頭 — 教務主任・研究主任
教科主任及び教科担当（社会科・保健体育）
生徒会担当
上記を除く教職員

2 研究の内容

期日	事業内容	場所	対象
5月	校内組織の結成と計画検討	校長室	関係職員
6月	社会：地理的分野（管理職による授業参観） 過去のオリンピック・パラリンピック開催国の調査を通して、参加国に対する理解を深める。	教室	1学年
7月	保健体育 陸上競技や水泳に係る基本的知識を確認する。	教室等	全学年
8月	校内研修 進捗状況と今後の計画を再確認する。	会議室	全職員
9月	白鷺祭（体験活動） 「地域ふれあい体験講座」を実施し、日本の伝統文化に触れる。	さわやか活動館等	全学年
10月	社会：地理的分野 「日本の諸地域」及び「身近な地域の調査」において、本市がオリンピック開催地であることを踏まえた学習を展開する。	教室	2学年
1月	パラリンピック出場経験者による講演会 ※下記の「3 実践事例」を参照	体育館	全学年
2月	研究のまとめ 成果と課題の確認および来年度の検討	校長室	関係職員

3 実践事例（「パラリンピック出場経験者の講演会」のみ掲載）

- 日 時 平成30年1月16日（火） 第3・4校時
- 対 象 全学年（生徒数323名）
- 場 所 体育館
- 講 師 牛窪 多喜男 先生

「パラリンピック出場経験者の講演会」を実施するにあたり、企画会議及び職員会議において内容や時期、講演者を検討した。

当日は全学年の生徒が、パラリンピック出場経験者の牛窪先生から御自身の体験を基にした講演会を真剣に聞くことができた。講演会の主な内容は以下の通りである。

- 1) 開会行事
- 2) 校長から講師の紹介
- 3) 牛窪先生の講演会。
 - ①努力より勝るものとは何か
 - ②パラリンピック出場で得たもの、感じたもの
 - ③役割を果たすことの意味
 - ④未来の子供たちに伝えたいこと
 - ⑤ギター演奏
- 4) 閉会行事
- 5) まとめ（各教室において感想記入）

【牛窪先生による講演会の様子】



「努力より勝るものとは何か」



「受賞メダルの紹介」



「講師のギター演奏」



「生徒会長からお礼の言葉」

4 研究の成果と課題

(1) 実体験を踏まえた講演会の開催の重要性

オリンピック・パラリンピックの価値や精神、他者を尊重しこれと協同する精神、公正さと規律を尊ぶ態度、克己心を培い実践的な思考力、判断力を育成するためには、体験的な活動や実体験を踏まえた講演会を実施することが重要である。これは生徒の感想や講演会の受講態度から十分判断することができた。また、今回の「パラリンピック出場経験者の講演会」を通して、障害のある方にどのような配慮と行動をするべきかを考えさせる一助にすることができた。

以下に生徒の感想を記載し、成果の一部としたい。

私は、今回牛窪さんのお話を聞いて身体に不自由があっても色々なことを感じたり考えたりでき、身体が不自由だからこそ感じることもたくさんあると思いました。私が一番心に残ったのは「努力は繰り返すもの」です。努力は今も何年後も生きていく上でとても大切だと思います。また、牛窪さんのお話に出てきた「夢中になること」を自分で探してみようと思いました。柔道のお話では、パラリンピックのことを聞くことができとてもよかったですと思いました。私はパラリンピックにはあまり興味がなかったのですが、牛窪さんのように金メダルを取っている選手について知りたいと思いました。最後のギター演奏では、目が不自由でも努力すればできることを示してくださったので、私も色々なことに挑戦していきたいと思いました。2020年のオリンピック・パラリンピックがとても楽しみになりました。

課題としては、体験学習や実体験を踏まえた講演会の重要性は十分認識することはできたが、来年度以降、上記の取組を実施するにあたり、どのような体験学習を実施するか、年間指導計画のどの部分へ位置づけるか、講演会に招く講師の人選はどうするか、などの課題を解決する必要がある。

(2) 本研究を終えての今後の取組

来年度は、上記に記載した課題を解決しつつ、本研究の成果を踏まえて、体験活動を取り入れた学習や人権教育に視点を当てた教育活動を展開していく。また、本研究で得ることができた「学年の垣根を越えた組織的な取組」を教育活動に取り入れながら、生徒・保護者・教職員・地域が一体となってチーム学校の具現化を推進し、本校のさらなる飛躍に努めていくことが重要である。